

なんでコイツ等楽しんでんの？

十六夜やと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SAO世界にオリキャラ勢のキチガイ共をぶち込んでみた。
そんなお話。

目次

プロローグ	1
知人の顔を見たところで驚く要素ある？	6
武器は装備しなければ意味がないってコト	11
とうとう出会っちゃったかー	16
自分を主人公だと思ってる一般キリト	21
さすがに二層攻略には参加しますよ？	26
——第二層ボス討伐戦——	31
MMOのギルドにマトモな名前は少ない	36
——第二十五層ボス討伐戦——	41
フラグは最初から折っていくスタイル	46
ユニークスキルにしてはユニーク過ぎないか？	51
紳士と変態は紙一重	56
ライブの時間じゃオラアア!!	61
そんなことよりサツカーしよっぜ!	66
キチガイ共の日常 主人公編	71
キチガイ共の日常 不良少年編	76
キチガイ共の日常 マイペース編	81
キチガイ共の日常 ロリコン編	86
キチガイ共の日常 神話生物編	91
——第五十二層ボス討伐戦——	96
シルバニアファミリー水車のある大きなお店	101
ソードマスターキリトく誤植編く	106
ソードマスターキリトく(人生) 完結編く	111
絶対負けられないし勝つても大変なことになる	116

グレート・オールド・ワンは恋をする	121
やっぱ筋肉は至高なんだなって	126
Lv90台ボスだろ!? 首置いてけ!	131
そもそも情弱なカーディナルが悪い	136
歴戦の武士共	141
決戦前夜は万全に	146
——第七十五層ボス討伐戦——	152
皆で一緒に「コスターバースト・キリト!」	159
「やっば友よ」	167
なんでコイツ等楽しんでんの?	172

プロローグ

——かつて『Sword Art Online』を攻略した黒の剣士は、生還後にこう語ったという。

「あの地獄のようなデスゲームを攻略できたのは俺だけの功績じゃない。あの城から生還したSAOプレイヤー……そして亡くなったプレイヤーが必死になって生き残ろうとしたから成し遂げられたものだ。俺は英雄なんかじゃないよ」

「俺の仲間——アスナやリズベット、シリカ、クラインにエギル……その他にも数えられないほどのメンバーのおかげで、今まで戦って来れたんだと思う。……ああ、現実世界にいた家族に会いたいって思いもあつたのかもしれないな。ちよつと恥ずかしいけど」

「本当に、地獄のようなゲームだった……」

「ゲームで死んだら現実世界の自分も死ぬ。ポリゴンが弾けるようなエフェクトには今でも抵抗が若干残ってるし、目の前で死んでいった奴等のことは夢に時々出てくるくらいだ。忘れたいと思う反面、本当に忘れていいのかと考えることは少なくない」

「こんなゲームで正気でいるような人間の方が珍しいな。現実世界^表には出せないような自分の欲望に忠実に行動したり、PKなどの犯罪に手を染めたり、デスゲーム環境下で精神が不安定になったり——生還しても精神に異常をきたす人もいたんじゃないか？俺や仲間たちもデスゲームでの思い出にトラウマを抱えているのだから、当然と言えば仕方ないんだろう」

「……そういう意味では、アイツ等にも助けられたな」

「βテストからの知り合いがリーダーのギルドだったんだけど、とにかく愉快で面白い連中だったよ。最初はデスゲームで精神的におかしくなったんじゃないの？って思ったんだけど、現実世界でも同じようなノリだったって話だから、本人達に会った時はおかしくて笑っちゃまったぜ。まあ、やること成すこと全てが型破りで、SAO時代には敵も多かつたって本人は言ってたけどさ」

「俺だってアイツ等のドタバタには何度も巻き込まれた。正直、『デスゲームでやることなのか!』って心の中で何百回も叫んだし、ユイに会わせたのは俺の人生で一番の失敗だと今でも思ってる。憶測かもしれないけど、茅場を唾然とさせたのは後にも先にもアイツ等だけじゃないか?」

「それでも俺が感謝してるのは——アイツ等が何一つ変わらなかったからだ」

「アイツ等が一層攻略に参加しないって別れた時も、俺がビーターとして悪名が広がった時も、二十五層のターニングポイントで多くの死者が出た時も、ラフコフを壊滅させるために俺が……人を殺した時も、二刀流のユニークスキルを習得した時も、ヒースクリフとの決闘のときも、七十五層での出来事のときも——」

「アイツ等はアイツ等の世界だけを展開し続けて、どれだけ周りが変わろうとも、あそこにあった笑顔や笑い声だけは何一つ変わらなかったんだ。ギルドには訳あって入ることが出来なかったが、それでもアイツ等と馬鹿やったのはSAOでもいい思い出だよ。……誰一人欠けることなくアインクラッドで前線入りしていたのは、SAO帰還者の間ではちよつとした伝説になってるし」

「だからこそ、言いたい」

「変わらないってのは悪い風に思ってた頃があつたが——変わらないことも大切なんだって、俺はアイツ等から学ぶことが出来た」

「ここだけの話なんだけど、今度は俺がアイツ等を振り回してやろうかと思ってる。SAOでは散々振り回されてやったんだ。少しぐらい巻き込んでも罰は当たらないだろう?」

「あんな面白い連中、デスゲーム内だけの付き合いじゃ勿体ないからな」

「あ、でも『イキリト』って造語をアインクラッド内で流行らせたのは絶対に許さない」



アインクラッド第46層の圏内。

一般的に酒場と呼ばれそうな空間の中、幾人かいるプレイヤーと呼びかけなければ会話すらしないNPCを横目に、ひときわ賑やかな一団が楽しそうに会話していた。

「——で、今日はどうするよ？俺はそこまでやりたいことが今のところないから、お前等に任せるわ」

『『迷宮区でレアドロコンプするまで帰れまー0』は昨日やったしねえ。あの気持ち悪いムカデが脳裏から離れないんだけど。今日くらいはモンスターの姿すら見たくないかな』

「そのせいでポジションやら結晶のストックがすっからかんだ。次のボス戦に参加できるのか？マジで企画した奴誰なんだブツ殺そうぜ」

「なら今すぐ全裸で最前線に行きなさい。私としては趣味スキルの熟練度をマッハで上げたい気持ちなんですけど……皆で釣りなんかいかがでしょう？貴方々の趣味スキルと比べれば、財布に優しいと思うのですが」

「全部任せる」

HPを全損させれば本当に死ぬ。

そのような環境下での会話とは思えない賑やかさを漂わせながら、身軽さを追求したような軍服風の防具を身に纏い、比較的刃渡りの長い短剣を腰に携えた黒髪の少年が、意見をまとめるように手を叩いて注目を促す。

「ということとは……今日は釣りの方向でいいか？ 釣った魚を料理すれば俺の料理スキルも上昇するから、別にそれでも構わないぜ」

そこで挙手するのは白髪の少年。

白を基調とした袴をモチーフにした防具を装備し、業物と見受けられそうな刀を揺らしながら、挙手した腕を左右に揺らしてアピールする。

「釣りできそうな場所ってあったっけ？ 確か54層に海らしきものがあつたはずだけどさー、流石に上層で釣りを楽しむのって難しくない？ 下層の方は記憶に残ってないや」

「別に釣りしなきゃならねエって訳じゃねエだろ？ オレは寝てるぜ。面倒だ」

白髪の少年の質問に被せる形で欠伸をする灰髪の少年。

軽装の鎧の金属が擦り合わさる音を響かせながら、大きな両手槍を立て掛けている場所の近くに足をかけ、テーブルの上に足を乗つける形で傍若無人さを漂わせた。

「ふむ……確か22層に湖がありましたよね？ あそこならモンスタ―がポップしたとしてもLv差で死ぬことはありません。安全に日常系スキルを上げることが可能かと」

その足を叩きながら遠回しに注意する黒髪の青年。

一見魔導師のようなコートの中に軽装備を着こみ、華奢なデザインのレイピアを身につけ、メガネの中央を人差し指で押さえながら安全な場の情報を提供する。

「……………」

そんなやり取りなど我関せずと、テーブルに顎を乗つけて会話の流れを見守る金髪の少女。

ゴスロリを彷彿とさせる胸当てぐらいしか防御力のなさそうな装備でありながら、背中に身長と同じくらいの大剣を背負った仏頂面の少女は、半眼で会話の流れを聞いているのかそうでないのかと分かりにくい表情を浮かべていた。

——ギルド名『天壤無窮』。

天と地は永久的に不滅と謳う名に相応しく、その在り方^{生き}をデスゲム生還間際まで貫いた少数精鋭のキチガイ集団。破天荒な行動が時に多くのSAOプレイヤーを巻き込む形になったとしても、この絶望しかなかった浮遊城アインクラッドに少なくない希望を与えた変人集団。

「じゃあ、さっさと22層行くぞー」

「「へーい」」

「……………」

そんな馬鹿共の奇想譚。

知人の顔を見たところで驚く要素ある？

『——これは、ゲームであっても遊びではない』

……なるほど、確かに茅場晶彦の台詞に嘘偽りは微塵もなく、誇張や妄想でもないことが今この場にて証明されたわけだ。ゲーム初日にするイベントとしては、恐らく世界でも一番物騒な催し物なのは確かだろうよ。

俺は巨大な上空に浮かぶロープを被ったGMを名乗るキャラクターを見上げながら、鼻で小さく溜息をつきつつ自分の顔を触るのであった。果たして触った感触がリアル本物なのか仮想偽物なのかは一般人の俺には分からないだろうが。

世界初のVRMMORPG——『ソードアートオンライン』

五感全てを電脳世界に飛び込ませる世紀の発明である『ナーヴギア』を用いて、100層からなる巨大な鉄と岩の浮遊城を舞台とした壮大なる世界を冒険するゲーム。それは今この時を以て、HPがゼロになったプレイヤーは、現実世界の本人が頭に被った『ナーヴギア』によって、ゲームオーバーになった場合、装着者の脳に電磁パルスを流して破壊される本物のデスクゲームと化してしまった。

「——あれ？ そんな顔してたっけ？ もうちよつと顔面崩壊してなかったか？」

「——テメエも目のパーツが全然違うじゃねエか。目と目の間に隙間なんぞなかっただろうが」

「——再現度が高いですなあ。現代科学も日々進歩しているというわけですか。実に素晴らしい」

「——身長があと十センチ足りない。やり直しを要求」

茅場曰く、100層をクリアすれば生還できると言う。

各層の間は『迷宮区』と呼ばれるダンジョンでつながっており、その最奥のボスを討伐することで、上の層の『転移門』をアクティベートし、『転移門』を通して下層と行き来することが出来るようになる。要するにこれを100回繰り返せばいいだけの話である。

問題はこれをデスクゲーム内にいる一万人未満のプレイヤーで、死ぬ

ことなくラスボスをシバく縛りプレイを行わなければならないという事実である。確かβテストでも10層までしかクリアしてなかったんだっけ？ しかも今回は死んだら御陀仏なのだ。ちと難しくないか？

「あつれー？ 身長も縮んでますなあ。アバター盛りすぎ」

「ほオ。完全決着モードをお望みたアいい度胸だ」

「これは『自分の役割を演じろ』というGMの粋な計らいと捉えてもかまいませんよね？ ふふ、ゲームの主人公を演じるのは心躍りますな」

「しまった。TUTAYAでDVD返すの忘れてた」

「お前等ちよつと煩い。ほら、周囲の人から睨まれてんじやん」

そんな茶番劇すつから周囲のプレイヤーの皆様にも睨まれたんじやんか。

少しは緊張感を持って。

「うつせエよ、ハムタロサアン」

「ハムタロサアンってその名前舐めてんの？」

「うん、俺もそう思うわ」

灰色と白色のツツコミに俺も真顔になる。

俺のプレイヤーネームは《Hamutarosaaan》と、ネタバレ線で適当に名付けてみた名前。本当は自分の使いたい名前が全部被っていたために、このような結果になってしまったのだが……いや、まさかデスゲームになるとは思わないじやん？

「つか『ケムツソ』と『ニート侍』って名前もどうかと思うぞ」

「まさかデスゲームになるとは思わないじやん？」

考えることは一緒である。

誰しもオンラインゲームがデスゲームになることなど予想しないのだから、適当にそこら辺にあった物の名前を付けるのは仕方のない

ことだと分かって欲しい。とつとこハム太郎のDVDがあつたのだから仕方ないのだ。あ、灰色の方が《Wurmpile》で白色が《neetsamuraii》である。

「正直言つて呼びたくない名前のオンパレードですね」

「激しく同意」

肩を落としてオーバーリアクションをとる眼鏡をかけた青年——《Madhatter》と、仏頂面で何考えているのか分かりづらい少女——《Clover》が話に介入してくる。

「くっそー、無駄にカッコいい名前だからって調子乗りやがって……」

「こうしくんが何か囁ってますなあ」

「ハムタロサアんだ間違えんなハッタ」

「その訳し方止めてくれませんか？」

心の中でコイツはハッタと呼んでやろうと決定しつつ、互いにいがみ合つてるケムツソとニート、まだ何か言つてる茅場の方を見ているクローバーを引き寄せて、他のプレイヤーに聞こえないような小声で、広場から出るよう提案する。

ふざけつつも茅場の話を聞いているが、『死んだら死ぬ』と『100層クリアしろ』以外に情報が少ないので、ぶっちゃけ聞かなかつたところの問題ない。最悪誰かに聞く。

人氣が全くない迷路のような路地裏を走りながら、街の出口に近いところで五人は動きを止めた。

スタミナゲージみたいなシステムは見当たらないのに、若干の疲労感を感じるのはなぜだろうか？ ゲーム世界でも疲れを再現できるつて、茅場つてスゲーな。

「——ふう。さて、これからどうするよ」

「どうするつつつても、このゲームクリアしねえとログアウトできねえだろうが。……まあ、HPをゼロにすりゃあ今からでもログアウトできるが」

「誰が人生からログアウトしたいって言った？」

デスゲームとなつた今でも気後れする様子のないケムツソに、頭を抱えながら溜息をつく。確かにゲームで死んだら人生からオサラ

バって実感は薄いけどさ。もっとう緊張感らしいものはないのだろうか？

緊張感してたら「気持ち悪っ」の一言で斬り捨てるけど。

「逆にこう考えれば？ ……ログアウトされることなく遊べると」

「……ニートお前頭いいな」

「……天才の茅場晶彦はSAOをデスゲーム化すると、馬鹿がどうい
う行動に出るか想像できなかったのじゃなか？」

行動力のある馬鹿が何よりも厄介だって哲学者が言ってたような。

それはそうとして、どうせデスゲーム化したところで日常生活と何が違うのだろうかと俺は考える。少し街の外に外敵が増えたところで、モンスターに殺されるのと車で轢かれるのは同じ『死』だ。そこに何の違いがあるのか？

悲観するのは他人に任せよう。

絶望するのは他人に任せよう。

諦観するのは他人に任せよう。

命を懸けている時点でSAOは現実だ。

他の連中には悪いが、茅場晶彦という天才が用意してくれた仮想世界で——現実世界と同じように一生懸命生きていくであろうSAOプレイヤーが住んでいくインクラッドで、まるで異世界に迷い込んだ設定のような仮想世界で生きていくのなら、それこそ楽しまない面白くないだろうか？

「……なるほどねー。全力でこの世界を遊び尽す、か」

「どーせ出られはしねえんだ。いいぜ、その案」

「悲観していても何も始まりませんからねえ。樂觀視している人間が

一人二人いても罰は当たらないでしょう」

「全部×……ハムタロに任せた」

俺の思考回路から導き出される俺達の目標——このゲームで俺達
が取るべき行動について話したところ、全員が乗り気のまま肯定の意
を示した。やっぱりコイツ等はキチガイだ。間違いない。

「現実世界でも仮想世界でも、俺たちがやることは変わりねえさ。全力でふざけて、全力で遊んで、全力で馬鹿やって、全力で巻き込む!!」
「ソードアートオンラインのプレイヤーの中で、一番このゲームを楽しんでやろうぜ!!」

武器は装備しなければ意味がないってコト

SAOがデスゲーム化してから一週間が過ぎようとしていた。

このゲームに閉じ込められたプレイヤーも多い中、とりあえずの生活基盤を整えたものが多いといっても過言じゃないだろう。ただ一層だけで生活するには無理があるのか、まだ住処を見つけれない者もいるだろう。

加えて、元々βテストの情報もあつた御蔭か、一層と二層を繋ぐ迷宮区自体は見つかったものの、この短時間で約千人程のプレイヤーが死亡していることが分かった。純粹にゲーム内で死亡する他にも、外部からナーヴギアを取り外そうとしたために死亡したケースもあるとか。

他に言うことと言えば……βテスターと新規プレイヤーの確執が挙げられる。情報を持つているβテスターと、右も左も分からない新規プレイヤー——そんな彼等がお手て繋いで一つの目標に走ると思うほど樂觀視してなかったが、どうやら溝は思ったより深いらしい。まあ、俺達には関係ないけどね。

「——チツ。やっぱオレには合わねエわ、コレ」

アインクラッドの一層では三番目辺りに人気が高かつた狩場で狩りをしていたところ、周囲にいる中では最後と思われるモンスターを斬り捨てたケムツソが、鼻を鳴らしながら地面に剣を刺す。

地面に刺した武器は《アニールブレード》という、片手剣の中では一層で得られる最高の武器とされている。あれを四人分揃えるのはかなり苦労したのだが、この外見不良低身長少年はお気に召さなかったらしい。この言い方からして剣の質ではなく武器の種類にあると仮定する。

「そうかなー、これ結構使いやすいよ?」

「オレには合わないんだよ」

対してニートは剣を自分の手足のように弄びながら上機嫌に鼻歌まで歌っている。

コイツは確かりアルでも剣道だか何だか……そういつた剣を使う

何かしらの習い事をしていた気がする。このゲームでは《自動操縦》システムアシストがあるので、武器を握ったことのない初心者でも簡単に刃物を振り回せるが、やはり実際に心得のある者との差はあるのだろうか？

集まった他の面々を観察すると、同じくβテスターであるハツタは、さつさと一層で手に入る最高品質の細剣をリセマラし終えた状態で所持しており、HPポーションを飲んで回復していた。一方のクロは剣を素振りしては首を傾げていた。

後者は不満があるらしいな。

「人には向き不向きつてのがあんだろ？」

「何とも言えない違和感」

「……そういうもんかー」

初期装備が剣であり、振つてるうちに慣れてしまった俺には俺には分からない感覚ではあるが、本能的にそういうものを察してしまったのか。

俺にはよく分からない感覚のため反応も薄くなるのは仕方ないことだと諦めて欲しい。

ケムツソとクロの言葉に、俺は少し悩んだ後に街へ帰ることを提案する。

かれこれ数時間は狩ったのだし、迷宮区には入れるレベルまでは上がっていた。

この狩場を使っていたのは、回復アイテムの素材の補充場所としても最適な場所でもあったのが理由だ。これだけあれば迷宮区を探索しても余るだろうと推測した。

「んなら街の武器屋でも覗いてみつか？」

「ケムツソが欲しいものも見つかるかもしれないしねえ」

何の武器があったのかβテストの時を思い出しながら、俺は近くの街まで歩いていくのだった。

途中ニートのアホタレがモンスターの群れに突っ込んで大惨事になったのは語る必要もないだろう。



「古来より武器つてのは日々進化していくもんだ。それは人類史が証明しているもんだし、じゃなきゃ人間が空飛んで爆発物投げつけるようなことは起こんねエだろ」

「二理あるな。日本でも槍の台頭、火縄銃の登場、零戦の活躍など、人を殺すための道具は形を変えて絶え間なく歴史に介入してきた。本来どのような形で使うのかという、制作者の意図せぬままに、な」

「そして——飛び道具は人類史を大きく変えた。接近しないと殺せない剣や槍なんか比べ物にならないほど、歴史の上に屍を積み上げてきたのは明白だ。考えても見ろや、女子供に銃器渡せば何人かは確実に殺せるンだぜ？　これほど訓練の要らない人殺しの道具なんて他にねエよ」

「つまり——何が言いたい？」

「SAOに銃火器ねエの？」

「FPSでもしてろ害虫」

んなアホな会話を武器屋で行うキチガイ共。

一通りの武器を試しに振るってみた結果、ケムツソの要求に「アホか」と切り捨てる。

そもそもソードアート・オンラインで剣以外があることに驚きなのに、その上銃火器まで登場したら本格的に『ソード』の部分が詐称になる。

あつたら攻略が楽になるかもしれないが、それを茅場が許すかと考えれば難しい。片手剣と細剣、両手槍に両手斧、曲刀や短剣……これだけバリエーションが豊富なだけでも、茅場の優しさなのかもしれない。そうじゃない可能性の方が圧倒的に高いがな。

「クロは良い得物を見つけたか？」

「……………」

自分の背丈はありそうな斧を街中でブンブン振り回した後、俺の方に物足りなさを含んだ仏頂面を向けて、気落ちした様子で弱弱しく呟く。

怯えた小動物のようで、何もしてないのに罪悪感が増す。

「……もつと重い両手剣とかないの?」

「さてはオメーSTR極だな?」

言ってることは脳筋のそれと大差ないが。

あるにはあると予想するが、まだスキルや武器の出現条件が分かっていない両手剣を要求して来やがったが、それよりもコイツのステータスに戦慄を禁じ得ない。ただでさえポンコツな脳ミソしてんのに、叩き潰すことしか考えてない武器のチョイスとステータスは相乗効果が決まじいことになるだろう。悪い意味で。

叩き潰すという意味合いでなら片手棍でも勧めてみようかと考えていると、ふと思いついたことを実践してみる。

俺はクロに《アニールブレード》を取り出すよう指示し、構えさせる。

それなりに様になった彼女の構えの背後から手を伸ばす。後ろから抱きつく形になってるのに文句すら言わないコイツに不安を覚えつつ、構えを若干矯正してみた。

「片手剣は片手で剣を使うもんだから片手剣と呼ばれる」

「……馬鹿にしないで。それくらい知ってる」

「つまり両手で握ったら両手剣。違うか?」

「……!? なるほど」

「……大丈夫なんでしょうかね、このパーティ」

彼女の開いた片手に俺は手を添えることで、片手剣を両手で握らせるという馬鹿なことを教え込む。本来なら知能のあるチンパンジーでもない勘違いだろうが、コイツの思考回路はチンパンジー以下なので問題ない。

目を輝かせながら片手剣を両手で振り回す馬鹿を生暖かい目で眺める俺と、この連中が根本的に問題があるのではないかと眉間を押さえるハツタ。この面子に問題があるなんて、何を今さら。

そこで放っておいた他の馬鹿の声が聞こえる。

どうやら欲しい武器を見つけたようだ。

「……この両手槍で勘弁してやるかア」

「あ、おっちゃん! その曲刀! その曲刀が欲しい! プリーズ

「ミ

もしかして《アニールブレード》は要らなかったんじゃないだろうか。

とうとう出会っちゃったかー

あまりにも濃い日常を送っていたが故に、時間というのはあつという間に過ぎていくものだ、ふと聞いたことのある声を聞いた瞬間に思い出す。

このゲームに囚われて早一ヶ月が過ぎようとしていた。

とうとうゲーム内での死亡者数が2000人を超えたと共に、人間というものはこうも簡単に死んでいくものだ、と痛感させられる。多くのプレイヤーが「次は自分の番だ」と街が死んでいく姿は、見ていて気持ちのいいものではないな。

確か近日中に迷宮区のボスを討伐するための攻略会議が開かれると小耳に挟んだ気がするが……。

まあ、俺達には関係ないけどね。

「——ん？ キリト？ お前もしかしてキリトか？」

「え、アンタ誰だ……？」

一ヶ月程前に聞いたきりなのになに覚えてるものだ。

いつものように迷宮区でモンスターと戯れていた帰りのこと、俺とクロは自分達の住処に戻ろうとしていた時に、聞き慣れた声があったので、声の主とすれ違う瞬間に呼び止めてみた。他のメンバーは先に帰ってるはず。

星々が輝きだす時間帯で若干見えにくいだが、黒髪の少年は女性のよいうな顔立ちと線の細いシルエットで、前見たときはもっと高身長のイケメンだった記憶があったが、その反応からして本当にキリトらしい。傍らにフードを被った不審者がハッピーセットの玩具の如く付属されていたが、俺は見たことも聞いたこともないので一旦スルーする。

とは言っても彼は俺の名前を覚えているだろうか。会った時とは姿形がまるつきり違うし、何か印象的な出来事と合わせれば思い出しもらえるかもしれない。

ああ、あれがあった。

「俺だよ！ βの時に四層でボス攻略時、ボスのケツにソードスキル

ぶち込んだ——」

「ああ!?..もしかしてハムタロか!?」

その説明で理解してくれたのか、黒髪の少年——キリトは驚いたように笑う。

疑問に思ったのは両方の連れも同じなようで、いち早く声を出したのはキリトの連れてきている不審者だった。ガラスのように透き通った綺麗な声から、不審者がSAOでは珍しい女性プレイヤーなのだと理解する。

「……貴方の知り合い?」

「ああ、βテストの時に、四層攻略で一時的にパーティ組んだ奴だよ。テストでは十本の指に入るくらいの高レベルプレイヤーだったはずだが……今はどうなんだ?」

「さつき迷宮区で遊んできた」

「遊ぶって……」

説明された俺は素直に答えて、彼女は訝しんでいる雰囲気醸し出す。

そしてアホにも『キリト』という人物を説明してやった。

βテストの時にパーティを組んだ中で、その後も交流のあったプレイヤー。あんまり目立ったようなプレイを見る事がなかったが、堅実な立ち回りとソードスキルは俺に真似できるものではなかった。それこそMMO初心者だとは思ってなかったし、βテスト仲間の中では割と印象に残っていた。

『四層の時のアレ』とは、ボスを討伐しようとしていた時に「このゲームってAIが優秀だよな。……コイツの尻に剣ぶつ刺したらどんな反応するかな?」という俺の素朴な疑問により、その攻略チーム48人全員がボスのケツを狙ってソードスキルを放った事件。最終的に言い出しつぺの俺がケツとラストアタックをゲットしたのだが、まさに『悶絶している化物の囃』が見れたのは良き思い出。

説明し終えた時の周囲の雰囲気は微妙なもので、特に不審者は呆れたように首を振っていた。

まるで奇人変人を見るかのようだ。

「——で、コレがパーティメンバーのクロ。よろしくな?」

「あ、ああ。……そうだ、ハムタロ達は一層ボスの攻略に参加しないのか?」

「あ、今日がボス攻略会議だったんだ。んー、今回はパス。明日は面白そうなマップの情報手に入れたから、パーティ組んでる五人で遊びに行く予定だし」

「貴方ね……真面目に攻略する気があるの?」

「……キリト、この人誰?」

「ああ、明日ボス攻略の時に臨時パーティを組むことになった人で、プレイヤーネームは『アスナ』」

フードの少女——アスナさんの声色には若干の怒りがあった。

どうにも堅物そうな第一印象を受けた俺は、彼女の性格も考慮して怒りの原因に思い当たる。

「別に俺達がゲーム内で何しようが倫理的にアウトじゃなきゃ構わねーだろ。フィールドの小川で水遊びしようが、イノシシ型モンスターに無理やり乗ってみようが、迷宮区で鬼ごっこしようが、片手剣を両手で持つてソードスキル縛りしようが、俺達の自由だ」

「お前そんな事してたのか……」

「何やってんのよ……特に最後は命知らずの大馬鹿者じゃない」

「だってよ、クロ」

「訴訟も辞さない」

さつきから無言だったクロの言葉に、アスナさんは啞然とした表情をし——ているのだろう。フードを深く被っているから判断しづらいが、そのような雰囲気は小さく呟かれた「え……?」の発言で推測できる。

ただ彼女の不意を突かれた驚愕が、仏頂面で言葉を発しなかった彼女が口を開いたからなのか、それとも馬鹿な行動を行うような人間に見えなかったのかは、流星の俺も判断できない。ぶっちゃけ両方のよくな気もするが、正直間違っても問題ない。

あのキリトですら目を見開いていたのだ。

うん、外見だけならば出るところは出て引っ込んでるところは引っ

込んでる完璧美少女なのだ、クロは。寡黙な姿は深窓の令嬢を彷彿させるし、リアルでも密かに男子から人気は高かった。

口を開けば智能チンパンジー以下が露見するだけで。

「話は変わるけど女性プレイヤーとは珍しいな。キリトのか——」
「違いますっつっつ!!!」

全部言っていないのに否定された。
とても悲しい。

「ふーん、じゃあ本当に即席パーティな関係なわけね。それにしても女の子が深夜に年頃の男の子と徘徊するとは感心しないなあ。何かあったらどーすんのさ」

「それは貴方達も一緒でしょ？　こんな小さくて可愛い子を夜に連れだすなんて……もしかして変なことしようと考えてるわけじゃないでしょうね？」

「え、可愛い女の子どこ？」
「……………」

ここに居るのは、パツと見女の子に見えなくもないキリト君と、勝気だが堅物そうな外見不詳なアスナさんと、頭の螺子が外れすぎて崩壊してる馬鹿が一匹だけだ。周囲を見渡しても年代様々な野郎共しか見当たらない。

馬鹿には見えない女の子だろうか？

本来見えないものが見える……まさかっ!?

「アスナさんって物凄く危ない人なのでは……？」

「そうそう！　そうなんだ——ひいつ!？」

同意しようとしたキリトの眼球スレスレに細剣のソードスキルを遠慮なくぶち込むアスナさんに、俺は彼女の認識を『不審者』から『バーサクなヤベー奴』へと変更する。

そしてクロと同じ目線になるようにしゃがんで、先ほどとは360°。違う優しい声を出す。

「あの変な人にいやらしいことをされたら、すぐにお姉さんに言ってね。HPがゼロになるまでスキルを放つから」

「……………」

「……クロちゃん?」

「……あ、ヘルシエイク矢野のこと考えてた」

「「……………」」

そりゃ優しさも相手に届かなきゃ意味ないわな。

つかヘルシエイク矢野って誰だよ。

「話が変わるけどさ、アスナさんって何歳?」

「……………15歳だけど」

「クロも俺も15歳だから同じ年だぞ」

「「はあっ!?!」」

良く間違われるがこのロリ巨乳は15歳だ。お陰様でアスナさんみたいに年下だと誤解する輩に説明する回数が多いこと多いこと。

加えて、俺のカミングアウトにキリトは重大なことを悟ってしまった。

「……………俺が一番年下なのかつ……………!?!」

「おいキリト、回復ポーション買って来いよお」

「あ、私のもお願いね。ちょうど切れてたし」

ちよつと調子に乗ってパシリみたいなことを頼んだら、堅物だと思っていたアスナさんも便乗して、回復アイテムを最年少のキリトに頼む。意外とノリが良いのかもしれない。

半泣きのキリトは唯一の砦であるクロの方へと顔を向けるが――

「……………」

「……………」

言葉を発さずに顎で「おら、はよ買って来いよ」と言いたげに催促したクロの仕草に、彼は泣きながら星空輝く街を走り廻ったとき。

自分を主人公だと思ってる一般キリト

一層のボスが攻略された。

——ボス攻略の発案者である『ディアベル』というプレイヤーを犠牲にして。

二層がアクティベートされたことにプレイヤー達が歓喜し、それと同時に不穏かつ不愉快な情報が出回るようになった。曰く、『キリトというβテスターは、L Sを手に入れるためにディアベルを犠牲にした、卑怯で狡猾なビーターである』と。

事前にハツタのツテで、情報屋をしているアルゴという少女から、彼が新規プレイヤーとβテスターとの溝を取り除くためのスケープゴートを自ら買って出た——そんな情報を得た。

犠牲無くして人は前へは進めない。それを14歳の中学生一人に背負わせるこの仮想世界は、どこまで残酷になれば気が済むのだろうか？ いや、リアルでは知らないだけで、自分達の知らないところでこういうことは頻繁に起こっているんだろう。

こう考えればいい。一人の犠牲で皆が救われるのだと。

少数を斬り捨てて多数を救う、素晴らしい民主主義的考え。皮肉でもなくコレが効率的かつ合理的で、別にキリトは強制されたのではないのだから、これで万事解決だろうか？

「よう、キリトく。お前ビーターになつたらしいじゃねえか」

「は、ハムタロ……!?!? ちゃんとハイディングしてたはずなのに……!?!?」

「俺達の方が熟練度が上なんだよ、それくらい察しろ」

んな解決認められるわけねえだろうが。

木陰から攻略組のレベリングを遠巻きに観察していたキリトを見つけた俺達は、彼に気付かれないように《ハイディング隠蔽》で近づき、代表として軽いラリアットをしながら引きずっていく。

キリトは逃げ出そうとしたが、キチガイ共の包囲網を甘く見ないでほしい。

途中でイガグリ頭の男と、若干ロン毛の男が目を見開いていたが、

そんなことを気にせず目的の狩場まで移動する。なんか栗色の髪をした美少女もついて来ている感じがしたが、そんなのを気にするようではアホ共とパーティイは組めない。

歩みを止めた俺達はキリトを包围する。いくらビーター様だろうと、容易に抜け出せはしないだろう。

「おうおう、テメエがイキリキリキリト様かア。オレはケムツソって名前だヨロシクウ」

「あ、僕はニート侍ね。このコート結構防御力あるんじゃないの？どこでドロップするのか教えてよ、イキリキリキリト君」

「初めまして、とでも言うべきでしょうか。私はマッドハッターと言うものです。一層攻略の立役者であるイキリキリキリト君には是非ともコネを持って利用してやろうと思っていたところ。どうぞよしなに」

「ま、待て待て待て！色々突っ込みたいところが多すぎて訳が分かんないんだが！その『イキリキリキリト』って何だよ!？」

いちやもんつける田舎のヤンキーみたいにメンチを切りながら自己紹介をしていた初対面の連中は、一人だけ身長が飛びぬけて低い紅一点の金髪娘へと視線を移動した。

同時に腰の引けるキリトもクロへと視線を向けるが、何とも言えない仏頂面の迫力に押されて冷や汗をかく。

そんなイキリキリキリト君に——彼女は身も蓋もないド正論を叩きつけた。

「ビーターになれば解決すると思った？ そんなに人の心は単純じゃない」

「い、いや……それは仕方のないことで……」

「本当は孤独に生きている俺カッターって考えてるんでしょ？ 中途半端過ぎ」

「そんなわけないじゃないですか!」

『自分を主人公だと思ってる一般キリト』……略して『イキリト』
「いきつ……!？」

トドメの一撃にキリトは言葉を失う。

俺達がさつきから行ってる『イキリキリキリキリト』の発案者はクロ。彼女は一層攻略時に広まったキリトの悪名に、仏頂面ながらも不機嫌になった故、このように『イキリト』——俺なら皆の不満を一身に背負える！と思ってる勘違い野郎の意味を持つ造語を考えたのだ。自分だけが犠牲になるという甘い考えが許せない。世間知らずのお子様の考えと言われようが、クロは自らを捨て石に使うやり方が心底気に入らなかったのだろう。少し彼女の罵倒はズレているかもしれないけれど、彼女なりに怒っているんだろうよ。

それは俺だって同じだ。

知己の奴が知りもしないアホタレに貶されるのは我慢ならない。

だから——

「あ、この造語はアルゴさんに頼んで広めてもらう予定だから」

「はあっ!?!」

俺達が貶すのは大いに構わない。

すでに莫大なコル（アインクラッド内の仮想通貨）を払って、攻略で一緒だったらしいエギルさんと、キリトと知り合いらしいクラインさんなどに頼んで広めてもらっている。イキリトの知り合いすら見つけ出すハツタの謎な友好関係も侮れないと戦慄しつつ、『イキリトのキリト』は着実に一層で有名となっている。

ん？ んな変なことに金を使うなって？

キチガイ共がマトモなことに金を使うわけがねえだろうか？

そして栗色の髪的美少女……恐らく声からしてアスナさんである人物が、明後日の方向を向いて震えている。

怒っているようにも泣いているようにも見えるが、

「イキリ……キリキリ……イキリト……君……!」

「アスナさん何笑ってんのお!?!」

くっそ笑ってるらしい。

隠せていない様子から、何気にツボってしまったのだろう。

「さーて、無駄話はそれくらいにして」

「俺の名譽的に物凄く重大なことなんだけど」

「後で広めるために使ったコルは全額請求するからな? ——せつかく狩場の一部を使わせてもらってるんだから、ここにいるメンバーで『どっちが多くのレストランを狩れるか』勝負しようや」

俺とクロとアスナさんとイキリキリキリキリト。ケムツソとニート侍とハツタと、さつき隠蔽スキルを使って木蔭で大爆笑していたアルゴさんも巻き込んで、4対4の即席パーティを作った。

レベル上げのモチベーション維持の為に俺たちの間ではよく使われる方法で、無駄に攻略組と同じくらいレベルが高い要因の一つでもある競争は、俺たちの間ではいつもの如く『賭け』が発生する。

「よし、負けたパーティは勝ったパーティにケーキ奢りな」

「前の『負けたら全裸でエイサイハラマスコイ踊り』より生ぬるくねエか?」

「あのハツタのキレキレダンスには驚いたよねー」

ケーキという言葉に目を輝かせる女性陣と、生ぬるいと嘲笑う男性陣。

被害者面をしているキリトは「もう俺疲れたから帰りたいんだけど……」と攻略組にあるまじき泣き言を漏らす。

こうして俺たちは日が暮れまでモンスターを狩り続けた。

ビーターと呼ばれる人間と楽しく狩ってる連中が気に食わないと思う奴もいたかもしれないが、それでも俺達が楽しんじゃいけない理由にはならない。

少なくともこのメンバーは……今がデスゲームであることを忘れて楽しんじやないだろうか?

「ところで人を武器にしてソードスキルは放てるのだろうか?」

「おいつ、ハムタロ! お前また余計なことを……!」

「実際にやってみた」

「あ、クロちゃんにブン回されてるキリト君が光ってる」

「へー、人を片手に装備してもソードスキルは打てるのかあ」

「つまりハツタ投げれば飛び道具って訳かア」

「私を投げられる身長じゃないでしょう？ そのアルゴさんを使いなさい」

「チヨっ!? オレっちを掴むな……って投擲スキルを使うなあああああ!!?!」

さすがに二層攻略には参加しますよ？

俺達が一層攻略に参加しなかった理由。

新規プレイヤー勢にカテゴライズされている他三人の武器の熟練度が低かった上、一層のフィールドにβ時になかった追加マップも存在していたため、ボスを討伐する余裕がなかった……が、それだけじゃない。

βテスト時のボス攻略情報。

その情報が正しいのかが疑わしかったためだ。そして実際に、一層のボスはβテストにはなかった《刀》のスキルを使用したという。以上のことから、『ボスがβテストと同じような行動を取るとは限らない』ことが証明されたのだ。

先入観というものは恐ろしいものである。ボスが未知の行動をしてきたために、攻略組は最後が総崩れになりかけたと耳にした。

死んで逝ったものには悪いが、やっぱ初見でボス攻略は避けたいよね。流れくらいは知っておきたい。

「……ここで本当に合ってるのか？」

「イキリキリキリキリトが本当のことと言ってたら話だけだな。アイツだつて俺達に偽情報掴ませたらどーなるか分からんほど馬鹿じゃないだろ？」

「クロの武器熟練度が上がったちゃうからねー」

攻略のことはさておいて。

俺達5人はキリトを脅迫して説得して得ることのできた情報——エクストラスキル《体術》をゲットするために、わざわざ二層の森林地帯まで足を運んでいた。

クロの武器熟練度の餌食になりたくなかったイキリト君によると、ここら辺にある大岩で受けられる隠しクエストをクリアすることによって、本来ならば入手困難なスキル《体術》ってやつを覚えられるらしい。ソースはアルゴさんだとか。

「おや、あれですかね？」

「んー？ ……おお、あれだあれだ！」

「……チツ」

キリトを武器にする口実を失ったクロの舌打ちは置いて、やけに岩が転がっている拓けた場所に出た俺達は、まず目についた大岩にニートが先行して走っていく。

いつもはコイツの行動でモンスターによる大惨事が起こりやすいが、こうやって先行して危険があるかを自分の身で俺達に警告してくれる姿は頼りになる。簡単に言うスケープゴートである。

「いえーい、一番乗りー」

危機意識のないニートまぬけと、無駄に負けず嫌いなケムツソボケナスが我先にとクエストを受けようとしているのを、何やら嫌な予感がした俺は黙って見つめる。クロは俺の真横に立って仏頂面を曝け出し、妙にニコニコ微笑んでいるハツタは何も言葉を発しない。

ハツタのニヤニヤだけで俺が警戒するに値する。

そして理由はすぐに分かることとなった。二人の間に爆笑が起こる。

「——ククククツ、テメエ何時から猫になったア？ そんな髭生やしてもテメエのアホさ加減が消えることはねエゼ？」

「あひゃひゃひゃひゃっつ！ そっちこそ猫ちゃんでも目指してんの!? どんなに頑張ってもケムツソがプリティでキユートな存在にはなれないって！」

「……………」

「……………」

クエストを受注した瞬間、突風が吹いたかと思えば、互いが頬に三本の髭を書かれていた……と言っても急展開過ぎて理解できないだろう。当の本人達でさえ頬を掻きながら「アルゴったああああああ!？」と錯乱状態に陥っているのだから。

ただ第三者視点で見えていた俺やハツタには理解できる。

いつの間にか大岩に胡坐を搔いていた老人の手には筆が握られていたのだ。

クエストを確認してみると、どうやら武器を使わずに大岩を破壊できたのなら、『体術』のスキルを得ることが出来るという。つかジジイ

が言ってた。

なるほど、素手で岩を砕けと。

「あははは……無理ゲーだろ」

「ですな」

「いいからテメエ等も受けろやあつ！」

割と迫真の表情で二人が怒鳴るものだから、俺たちも仕方なくクエストを受注し、もれなくアルゴる。もしかして彼女はクエストをクリアしていないのではなからうか？

アルゴった頬を擦っても髭を消せないことを確認していると、俺の服の裾を引っ張る抵抗感を受けた。そちらの方を見ると、他の連中と同じように猫の髭を描かれたクロが、いつもの仏頂面ながらも何やら期待を込めた瞳で俺を見ていた。

「どう、似合う？」

「いや、特には」

「Fuck you」

どうして俺は罵倒されたのであろうか。

コイツ情緒不安定過ぎないか？

「さて、ハム吉君。このクエストの存在自体はβテストで知っていたのですが、クリア方法だけは見つけることが出来なかつたんですね。この通り、武器も取られては如何しようにも……」

肩をすくめるハツタの言う通り、老人によって武器は手元にない。文字通り武器を使わずに岩を砕かなければいけないのだが……。

俺は近くにあった岩に触れてみる。

仮想世界なのに、しっかりとした岩の肌触りが完全に再現されており、拳を軽くぶつけても岩はビクともしないどころか、本気で殴ったらダメージを受けそうだ。

うーん、これ正攻法じゃ無理なんじゃね？

「で、どオスンだ？ このままじゃ人前にも出られねエぞ」

「それアルゴさんの前でも同じこと言ってみろよ……。まあ、正攻法じゃ早めにクリアできなさそうなクエストだし、何か裏があるとは思うんだわ。とりあえず目星らしいものは付けてるんだが……」

「へえ、例えば?」

ニートに急かされた俺はハツタに視線を移す。補足だが、クロは馬鹿真面目に岩を殴っている。まるで吊るされたバナナを取ろうとしているチンパンジーを彷彿とさせた。

ひとまずハツタに、拳が顔の部分に来るように腕をクロスさせるよう指示する。

「こう……でしうか?」

「もうちよい下……そうそう、そのまま何があっても姿勢をキープしとけよ?」

俺は直立不動でラジオ体操の腕をクロスさせる運動みたいなアレの姿勢を貫くハツタの後ろに回り、腰を低くしゃがませて、彼の両足を両手で力強く握った。

これは以前の疑問を応用とした解決法だ。

求めるのは最速

己のSTRを最大限に生かし

腰を低く踏ん張り

体を大きく捻らせて

岩の中央めがけて

ハツタを叩きつける。

ソードスキルが発生するエフェクトを身に纏ったハツタは、大岩を木っ端微塵に破壊して、俺がうっかり手を滑らして離してしまったので、そのまま森の木々にミサイルが如く突っ込んで消えてしまった。

そしてクエストクリアのファンファーレが鳴り響いた。

「そっかー、これだとハツタがクリアしたことになるのか」

「なるほどねえ」

「オイ、待——」

同じように一歩早かったニートがケムツソを使って岩を砕く所を眺めていると、不意に視界が大きくぼやけた。正確に描写するのならば、世界が高速で動いたかのような気分だ。

咄嗟に俺は顔面を拳で守った矢先、硬いものに当たった体の部位が粉砕骨折してしまうのではないかと錯覚してしまうほどの衝撃を与

えられ、ついでに空中へとFly Awayしてしまう。地面に衝突してしまった俺の目に映ったのは、クエストクリアの文字と、残り一割を切った赤色のHPバーだけである。

「クエストクリアおめでとうございます」

「ああ、助かった」

PTメンバーがクロを除いて全員HPが一割なのが面白かったデス。

え？ オレンジプレイヤー？ 武器の耐久値が減っただけでオレンジプレイヤーになるはずがないだろう？

後はクロだけだなあ……と考えた矢先、突然爆発音が森に響き渡った。

その方角を見てみると、大きな土煙と共に岩が粉碎する瞬間と、小柄な少女が正拳突きを繰り出した姿勢を維持している姿だった。

これには俺たち全員が目を剥く。

「……………何これ脆い」

「……………」

クエストクリアの文字すら見ずに吐き捨てるクロ。

……………《体術》スキルいららないよな、アレ。

——第二層ボス討伐戦——

——第二層ボス攻略前に、俺はボス攻略の要の人物であるキバオウに告げられた。

俺とハムタロ達はボスの取り巻きを押さえることに集中しろ、と。ボス攻略に参加できないかと思われた俺だったが、ビーターとしての戦闘経験はボス攻略に欲しいものであり、また取り巻きはボスを討伐するに当たって邪魔であるとした。少数精鋭で事に当たって欲しいと、最初はその言葉を真に受けたのだが、もう一人の指揮官・リンドとの会話でだいたいの事情は把握した。

『——取り巻きにもドロップアイテムはあるだろう!?　なぜアイツ等に任せる!?!』

『ほなら、あのキチガイ共を説得しに行け。前にアイツ等がワイとお前を物理的にブン回したのは覚えてるやろ?　ワイは武器としてボス攻略には参加したくあらへんで』

『そ、それもそうだな……』

あれってユニークスキルなのだろうか?

ハムタロ達以外に使ってるプレイヤーを見たことがない。

ただアレのソードスキル?の弱点は見ていて理解できた。

人を持ち上げるほどのSTRが前提条件として、武器そのものの耐久性はプレイヤーのHPが参考にされる。PKに使われる可能性も考慮してみるが、モンスター蔓延る圏外で以上の方法でPKしたとして、その後はどうする?　あのスキル発動後はかなり硬直が激しく、武器を変えることも結晶を使うことも、かなり致命的なタイムラグがあるのだ。

だからアレを取得しようと思うプレイヤーがいないし、PK利用しようとも考えない。

そもそも人を武器として使う馬鹿がない。

「みんな、回復結晶やポーシヨンの用意はしたか?　武器の耐久値は大丈夫か?　転移結晶だけは絶対に忘れるなよ?　自分の仕事はちゃんと理解したか?」

「……あ、今日の天気予報見てない」

「クロちゃん、今日は晴れだつてよー」

「ん。ニートグツジヨブ」

ボス前は皆が緊張する。それは一層でも例外はなく、例え二回目のボス戦だろうと同じだ。HPが全損すれば死んでしまうわけだし、誰もが握りこぶしを固くして、武器を持つ手が震える。

本来ならばその反応が正しいのだ。誰だつて死にたくない。だが俺のパーティメンバーはどうだ？

自分の明日よりも天気予報の心配を皮切りに、三層で立てられるギルドの名前を考え始め、ボスラストアタックは誰が取るか賭けを行い、あまつさえ暇ゆえに『しりとりに』すら開催されるレベル。

肝つ玉が据わっているとかの次元じゃない。ボス前の俺の脱力感は何なんだ？

そんなこんなしているうちに目の前の大きな扉が開かれる。

俺は思考を切り替えてボスの間へと歩みを進めた。

「ふ？ ふ、ふ…… 『ファイボナッチ数列』」

「『つ』かア…… 『ツリーリング』」

「また『ぐ』ですか？ 『グループプレイストア』」

ホント真面目にやってくれよ……？



何だ。

何なんだ。

マジで何なんだコイツ等は!?

「やっぱりHP多いなコレ。ゲージ何本ついでんだよチートかよ」

「ちよーつと舐めてたかも、ボス攻略戦。あっちの方が強そうだし、一筋縄じゃいかないかもねー」

「このモンスターうっざい」

ボスを討伐したことによる真のボス登場。

アスナと詐欺鍛冶師の乱入。

チャクラムを使う戦法に驚く攻略組。

目まぐるしく変わっていく戦況をよそに、ボスレベルの強さを誇る取り巻きの一体を相手に、俺達六人は取り巻きとの死闘を繰り広げていた。

正確には俺だけが瀕死になっただけなのだが。

普通はタンク一人でボスの攻撃を防ぐことはできない。故にソードアートオンラインには敵をソードスキルで攻撃した時に発生する硬直状態を補うために、『スイッチ』と呼ばれるものが存在する。攻撃する人間が入れ替わると同時に、敵のターゲットもスイッチした人物に移るため、回復をしたときやタゲを入れ替えるときなどに重宝するのだ。

一層でも『スイッチ』が使われる場面は多く、そのためプレイヤー同士の掛け声が非常に重要となってくる。

攻略前にも戦闘に関する大方のおさらいはして、ハムタロの「キリトは基本的に好きなように攻撃して。指示は出すから」とは言っていたが――

「今日の晩飯どオスンだア？」

「三層に美味しい店はある？」

こんな雑談をしながらケムツソはソードスキルを放ち、クロトスイッチを果たす。その鮮やかさは見事なもので、一層でアスナとやった時以上に洗練された動きだったのは認める。

だが問題はそこじゃない。

コイツ等は声をかけ合うことなくスイッチを行っていた。

「三層の街探索はハツタがやってたよな？」

「そうですねえ……美味しい店というのはなかったような」

加えて、コイツ等は戦闘で敵の動きを完全に読もうとしている。

例えば取り巻きが行う範囲攻撃の条件として、一定距離にプレイヤーが三人いるときに発動する全体麻痺攻撃がある。それを一度か二度くらい発動していた取り巻きなのだが、その一・二回の攻撃だけでコイツ等は範囲・人数・タイミングを完全に把握し、今ではタンクと攻撃するメンバー以外は取り巻きに範囲攻撃をさせないギリギリ

の距離を保っている。

俺の瀕死の理由はその条件に気付くのが遅かったからだ。これはβテストのときにはなかった。

この条件を見つめるだけなら俺でも時間はかかるが出来た。

しかし、コイツ等は誰一人その法則を言うことなく全員が把握した。

そんなことを考えているとクロのHPがもうすぐイエローゾーンに入ろうとしているのが見えた。

俺達は取り巻きを囲むように点在しているため、頭上のHPを見ることはできないが、パーティメンバー欄からは確認可能だ。

まだケムツソは完全に回復していなかったので、すかさず俺が叫ぶ。

「クロ、スイッチー！」

「……あと五秒」

五秒とは何だろうか？

ソードスキルのCT？

疑問符を頭上に浮かべていると、丁度五秒後にクロのHPが黄色に変色し、同時にクロが敵に向かってソードスキルをぶち込んだ。啞然としたのは一瞬で、どうにかスイッチは成功させられたが、同時に冷や汗が溢れてくる。

もしかして敵の攻撃予測タイミングとHPの管理を自分で行っているのか!?

コイツ等全員が戦闘に関する才能が天性的なものなのか、言葉を交わさなくとも意思疎通が出来るくらい信頼し合っているのか、どちらにせよ並大抵のプレイヤーが一朝一夕で出来る技術じゃないだろう。俺にはちゃんと指示を口で出してくれるし、ここまで安定したボス攻略はβテストでもなかった。

このようにHPが多いだけの大型モンスターを討伐する作業感で行っていた第二層ボス攻略は、残り一本しかないゲージが残り僅かにまで減っていく。

焦る気持ちを必死に抑え、淡々と雑談するハムタ口達に耳を傾けて

いると、

「イキリト君、とりあえず回復結晶使ってHP全快にしといて。あと使った分はこっちで補填するから」

「え、どうして……」

ここで謎の指示を出してくるニート侍。

早く早くと急かすため手持ちの回復結晶を使った瞬間、両足を掴まれて視界が反転する。

「よし、ラストアタックぞー！」

「任せて」

……ああ、だからHPを全快させたのか。

二度目となる光景に心で涙を流しながら、仄かに青白い光を纏って、俺の身体はHPがドットしか残っていない取り巻きの身体を切り裂いた。

フルスイングと取り巻きの防御力のせいかな、前はそこまで減らなかったHPを七割くらい失い、ついでに地面へと放り投げられた。

「うっしやー！ 取り巻き討伐完了っつと」

「「「イエーイ!!」」」

パーティメンバーが俺以外集まってハイタッチを行う。

そして間髪入れずに真ボスが討伐されたのか歓声上がる。

ハムタロからしてみれば、最後の報酬は与えたから別にいーじゃん？ っつてことなのだろう。確かにレアアイテムは嬉しい。嬉しいのだが……。

ラストアタックの報酬が俺に入ったことを確認しながら、その後もちよつとした問題があるはずなのに、それを見届けることなく俺の意識は暗転したのだった。

疲れた。

MMOのギルドにマトモな名前は少ない

三層に辿り着いた俺達は重要な問題にぶち当たる。

頭を悩ませるほど重要なことか？と問われれば、そこまで問題視するほどじゃないが、割と今後を左右してしまう案件なのも否めない。事実その問題にぶち当たったSAOプレイヤーも少なくないだろうし、俺たちもそのうちに数えられるわけだ。

そう——ギルド名。

「そんじゃギルド名に希望ある奴は発言どうぞ」

「二「鉄華団」三」

「そうかー、最終的に華々しく散りたいかー」

三層の某所にていつもの如く集まったキチガイ共とギルド名を考えていたのだが、誰一人として良い名前を出さず、そもそも考えようとすら思っていない。

俺は頭を抱えながら、円卓状に座りながら頬を机につけてだらーんとしている面々を蔑む。

確かにパーティーメンバーだけしか加入しなさそうなギルドを作る理由もないし、結成したとして今後メンバーが増える予定もない。ならパーティーだけ作つとけばいいのではないかと、最年長者のハツタは言う。

無理もないだろう。アホなことし過ぎて加入者どころか、攻略組の面々ですら距離を置くほど、俺達の悪名は知れ渡っているのだ。ぶつちやけ『ビーターのキリト』よりもヤベー奴だと思われる。

全く以て遺憾。名誉棄損で訴えるぞ。損害賠償責任モノだ。

まあ、言つちや何だが最初からコイツ等をアテにはしていない。なので開始数秒で切り札を召喚する。

「そんな訳で、イキリト君にアスナさん。おまけでアルゴさん。何かいい案ない？」

「……どうして加入しないギルドの名前を考えさせられるのだろうか？」

「私なんて部外者よ！」

「オレっち歩いてるだけで拉致られたんだがナ……」

さすがに自分達よりも年長者なエギルさんやクラインさん、攻略組で仲の良いキバオウさんを頼るわけにはいかないのだ。彼等だって自分のことに忙しい。

だから大人な彼等が推薦するメンバーを適当に拉致ってお呼びしたわけなんだが。どうにもアホ共よりもモチベーションが低いように思われるのは気のせいだろう。

あんま期待してないけど最初はイキリトウ君だな。

腕を組みながら考えている黒コートの剣士をセンターに持つてくる。ここで最年少たる若さを見せつけて欲しい。

「うーん……そうだなあ……『黒†影の旅団†黒』とか『絶†影』とか……あ、『†紅血の牙†』なんてのはどうだ!？」

「どうだじゃねえよ。誰がイキリト君と不愉快な仲間達の名前考えてるって言った？ チツ、中学二年生に期待した俺が馬鹿だった……」

「うわっ、キリト君ってそんな趣味だったんだ」

「どうしてそこまで罵倒されなくちゃいけないんだ!？」

隙あらば黒や†を取り込むスタイルはどうかならんもんか。

十年後のコイツに見せてやりたいわ。これには現役女子高生（センター入試は受けられなかったが）のアスナさんも、何歳かは知らんけどハツタよりは年下であろうアルゴさんもドン引きである。

しかもキリトは何が悪いか分かってないし。

ならば次だ次。

俺達には同世代の女子がないので、俺は真摯に耳を傾ける。

「えつと……その……『猫の足跡』、とか……どうかな……?」

「『ほう、ならば俺達は『猫の足跡』と名乗ることにしよう!』」

「やっばごめん。今のなしで」

アスナさんの考えたギルド名を聞いた瞬間、顔を上げた男共が声をそろえて彼女の考えた名前を暗唱する。全員がわざと野太い声を出したため、どこが問題なのかバーサク細剣使いは一瞬で理解して取り消した。

一光年譲ってクロが外見美少女だとしても、その名前を俺達で共有

するには可愛げがあり過ぎる。悪くはないんだが、良くもなかった。嘆息しながら肩を落とすアスナさんに、イキリキリキリキリトが苦笑いを浮かべる。

「何だよ、アスナも駄目じゃないか」

「貴方よりは数百倍マシよ。絶+影とか名乗れるわけないじゃない」「カツコイイと思うんだけどなあ」

——まさか十年後に俺達からそう呼ばれて「ア、ア→!?(絶命) やめて く れええええええええええ!!」と叫んでのた打ち回るとは思わないキリト君だった。

「アルゴさんは何かない?」

「オネーサンでもコレはお手上げんだケド。クロっちがいるから凜々しい名前もいけると思ったんだけどサ」

「……アイツの二つ名が『《剛腕》のクローバー』だからなあ」

「クロちゃんいつの間そんな漢らしい二つ名つけられたの!」

まさかのカミングアウトにアスナさんは青ざめて、キリトは引きつった顔を元に戻すことが出来ない。剛腕とか成人迎えてすらいない女の子につける異名じゃねえし。

攻略組の間ではキリトに続く二つ名持ちなのだが、その話を聞いてクロが物凄く不機嫌だったのは同情した。

戦闘シーンを振り返れば嫌でも納得するけど。

「わ、私も気をつけないと……」

攻略組で数少ない女の子が凄まじい二つ名をつけられている事実を耳にして、同じ女性である細剣使いの少女は危機意識を持ち始めたようだ。アスナさん男よりも漢らしいプレイングだもんね。

……まさか『《狂乱》のアスナ』とか呼ばれてるなんて口が裂けても言えない。言い出したのがニート身内だから余計に。

こりやダメかなーと皆が諦めていると、ふとアルゴさんはボソツと四字熟語を呟く。本当に小声で分かりにくかったが、声だけは何とか掴むことが出来たレベルの小ささだった。

「……天壤無窮」

「ん? 何それ」

「いや、オレっちも詳しい意味は知らないんだけどネ。確か空や大地は永遠に変わらないって意味の言葉だったようナ。キー坊から聞く限り、ボス戦でも同じようにふざけてるって聞いたから、変わらないうって意味の四字熟語が似合うんじゃないかなってサ」

キリトやアスナさんに確認してみたが、彼等も知らないと言を振る。

アルゴさんに文字を起こしてもらっても、どうにも難しい言葉の羅列としか思えない。かといって彼女が出鱈目を言うような人じゃないし——

「——日本書紀に出てくる言葉だねー」

「ん？ 知ってんのかニート」

この言葉に反応したのは、顔を上げて眠たそうに目を細めるニート。

俺以外の起きてる三人も啞然とする中、ニートは知識をひけらかす様子はなく、ただ淡々と独り言のように説明し始めた。

「アルゴちゃんの説明であってるよ、多分。『天壤窮まり無し』あめつちきわって読んで天壤無窮。日本書紀の神代下に天照大神が瓊瓊杵尊にぎのみことに賜った『天壤無窮の神勅』の中に出てくるよ。……ああ、確か教育勅語に十二の徳目として『以テ【天壤無窮】ノ皇運ヲ扶翼スヘシ』なんて言葉も出てきたよね。だからアルゴちゃんも知ってたんじゃない——」

「ちよ、へ!?! ま、待ってー!」

そこで待ったをかけたアスナさん。

……あ、キリトから聞いた話だけど、彼女って勉学に対する並ならない執着心みたいなものを持ってたとか言ってたようナ。そりや自分の知らない言葉を、さも当然のように語るニートは無視できない存在だろう。

特に今までの奇行を見てきたんだから。

「どうしたのアスナちゃん?」

「何で貴方がそんなこと知ってるのよー!」

「……興味があったから?」

馬鹿な行動を取る人間が必ずしも学力が低いとも限らない。

いや——馬鹿な行動を取るからこそ、そこには様々な知識と推測から成り立つ根拠によって動くのだ。要するにニートは勉強が出来るゴミ屑ってわけだ。

こうして俺達のギルドは『天壤無窮』となった。

天地とともに永遠に極まりなく続く。それこそ永遠に。

だから俺達はデスゲームで良くも悪くも変わっていくであろう人々の為に、変わらず馬鹿をやって楽しむ存在であろうと再確認したのであった。

「……う……嘘よ……こんな……こんなアホに……」

「あ、アスナ大丈夫か？ 過呼吸状態になってるぞ？」

勉強の圧力から解放されたはずだった少女の心と引き換えに。

——第二十五層ボス討伐戦——

——何なんだ、コレは。

その程度の感想しか抱けない自分の表現力が恨めしいと共に、目の前に広がる光景を理解したくない自分が存在する。自分の想定していたものとは掠りもしない現象に、どのような言葉を使えばいいというのだ？

このソードアートオンラインを作った張本人である私は、二十五層のボス攻略には苦戦するだろうと予測していた。事実、二十五層はクォーターポイントとして設定しており、他の迷宮区のボスとは比較にならないほどの強さを設定していたのだから当然と言えるだろう。

このボスモンスターは双頭巨人型の大型ボスで、高い攻撃力で迂闊に生身で受けようものなら、最悪一撃で死んでしまうであろう凶悪な敵。

私はHPを半分以上は減らないシステムを組み込んでいる上に、このモンスターの行動パターンは読めてはいるので、死ぬことはないとは断言する。

今回のボス攻略の指揮を執るのは黒髪の少年。名前は確か——ハムタロサアンと言ったか。

第一層以外のボス攻略に欠かさず参加する、ギルド『天壤無窮』のリーダー。短剣で相手を翻弄させる戦闘を得意とする、ボス攻略の古株といってもいいだろう。彼の評判は「良くも悪くも堅実的な戦い方をする、頭のぶつ飛んだキチガイ共の一人」だ。

今回のボス攻略が初である私だが、ボス攻略に関してはGM権限を使っただけで済んだ。使ったことがない。

言い訳にしかないだろうが、この戦闘を楽しみたいのだ。ラスボスとして君臨するため死ぬことが許されないにせよ、私の作った世界で彼等がどのように生き抜くのか、この目で確かめるために私は参加する。訳あって参加できなかったが、これからは私が直接この世界で生きる者達の軌跡を見ていこう。

さあ、SAOプレイヤー諸君。

君達の軌跡を見せてくれ!

「くっ、尻ばつか隠しやがって! 正々堂々と戦うことが出チャーンスう! これが貴様のケツの最後じゃああああああ!!」

「アスナ! スイツチ! そろそろ準備しないと間に合わない!」

「攻撃が重いけど……! というか女の子に壁役頼むとか男として(クロを見て)——あ、はい。頑張ります……」

「イキリト、キバオウ、HP回復に専念して」

「アルゴ砲発射用意——! オラアツ!!!」

「第二射。エギル砲発射致します。——撃てえっ!!」

こんなの見せてとは言ってない。

執拗にボスの臀部を狙う総指揮官。

ボスの間の端で寛ぎながらポーシヨンを飲んで雑談する、黒髪の少年とイガグリ頭の青年男性。

本来ならばプレイヤーを一撃で屠る攻撃を女性とは思えない雄叫びを上げながら、ガニ股で踏ん張る栗色の髪の少女。スイツチでボスの追加攻撃を《体術》スキルで押し返す人外の金髪少女。

プレイヤーを巨人の弱点に、的確に《投擲》スキルで飛ばす二人組の少年達。

激突した後に安全圏まで即座に退却していく、投げられたプレイヤー達。

どこから指摘すればいいのか分からない。

そもそも《投擲》にプレイヤーを飛ばすシステムはなかった筈だ。

何故だ。何故だ。何故だ!?

「というか何で俺まで呼ばれたんだ? 一介の商人やってる俺が何でクオーターのボス討伐になんて……」

「何でも『投げた時にダメージでかそうな前線に出られるプレイヤー』に声をかけたらしい。オレっちは——まあ、投げられ慣れてるからナ。最近《投擲》スキルに何故か補正が入るようになった」

もつとも理解不能なのは、この奇行としか思えないボス攻略を全員が素直に受け止めている点だ。安全性も信頼性もないはずなのに、どうして彼等は受け入れることができるのか。一層の絶望感は何だっ

たのか。

確かに現実世界ではあり得ない光景だが、こんな私が夢見た世界じゃない。

「うんぬらばああああああっ!! こなくそがああああああああっ!! ど根性見せたるわああああああっ!!」

「アスナ、女の子の出している声じゃない」

「声出さないとやってられるかああああああっ!!」

巨人の片腕を細剣で必死に食い止める可憐な少女は、喉から絞り出すかのように自分に喝を入れながら防ぐ。あれ彼女のステータスでは防ぎきれないはずなのに、どうして力が拮抗しているのだろうか？

もう片方のタンクを務める少女……？は、もうあれは視界に入れないようにしよう。

プレイヤー三人を同時に粉碎する片腕の攻撃を、華奢な片手でペシ受け流せるはずがない。しかも仏頂面で直立不動で。私は神話生物をプレイヤーにしたはずはないんだが。

「キバオウ、今レベル幾つだ？ ……大丈夫か？」

「何言ってるんや。このボスの攻撃力は高いが、防御力は若干難があるっちゆう話や。ワイのレベルでも耐えられるに決まっとる」

「それなら大丈夫か。ああ、今回はアンタにラストアタックを譲るよ」
なぜクォーターポイントのボスの前で胡坐を掻きながら雑談をできるのかは置いといて、どうして内容には若干の違和感のある会話でさえ、私の心をこうも掻き乱すのだろう。

これから大変なことが起こる、そんな気が――

「ちよいちよい」

「ん？」

呆然と立ち尽くす私に注意しに来たのかと振り返ると、そこには白髪の少年が立っていた。

彼は初対面の私にもこやかに笑いかける。

「ええと……誰だっけ？ ハナヲホジツジ？」

「ヒースクリフだ」

「おお、そつかそつか。惜しかったなあ」

彼らにとって文字数どころか一文字も合っていないは『惜しい』らしい。

そんな彼は私の手を引いて——未だにプレイヤーを発射させている少年達のところまで連れていこうとする。

「あ、大丈夫だよ。HP満タンでハムタロの面接に受かったのなら、だいたい三割くらいのHPは残る計算だから心配いらないぜー」

「——っ!？」

そこで私は重大なミスをする。

私はHPを半分以上を削られない設定になっており、このままだと私が『茅場晶彦』であると露見してしまう。この半分も行っていない階層で正体を明かすのはマズい。

そのためGM権限で一時的にその設定を解除して——再設定できないことを思い出す。

つまり、私は今後入手する予定の《神聖剣》のスキルだけで九十五層まで生き延びなければいけない。

以上のことまで考えて、今はそれどころじゃないことを思い出す。

私は今から人間魚雷となるのだ。

ちらりと視線を逸らして周囲を見て把握逃げる手段を探しているしようとしていると、

「二体は剣で出来ている

血潮は鉄で心は硝子、心は硝子（ここ重要）

二十五のボス戦を越えて不敗

ただ一度の全損もなく、

ただ一度の安全もなし

担い手はボス前で一人

我々に無茶を強要する

ならば我々の必要性に意味が欲しい

故に、この行為は

無限の理不尽で出来ていた——!」

少年と男性が悲痛な詠唱を行っていた。

これは覚悟を決めるしかないのか……！

「オイ、新入り。最初は怖いかもしれねエが、直に慣れる。さア、逝つてこい——！」

胸ぐらをつかまれて投げられた私は、パアン！と甲高い音を立てながら、一直線にボスの顔面へと突っ込む。私が空気抵抗も考えて姿勢を伸ばしていたせいか、綺麗に速度を落とさず目的カ所に当たった。

ぶつかった瞬間、私は走馬灯を見る。

そして、私は理解した。

そういうことか。

私は人間魚雷になるために、ソードアートオンラインを作ったのか
(洗脳完了)。

フラグは最初から折っていくスタイル

現在装備している短剣は、現段階で装備できる物の中では最高品質のダガーであり、これを強化する際に必要な素材は片手剣と若干似ているという。

俺達キチガイ共の中では俺のダガーだけが飛びぬけて攻撃力が低く、そのため最大強化が必要とされているのだ。そりゃ、ダガーで攻略組に名を連ねているのは俺だけだという噂もあり、その理由には他の武器より武器のレパトリーが圧倒的に少ないのも理由の一つだ。茅場さんや、もうちょいダガー種類増やしてくれませんか？ この武器リセマラで十七本目なんですけど。

そんなこんなで20層周辺でニートと狩りをした帰り道、どうせならと20層の街に顔を覗かせたところ、なんと酒場にイキリト君の姿があった。

どうやら何人かのプレイヤーと会話をしていたらしく、そこまで話しかけ辛さなどが感じられなかったため、俺とニートは彼等に割って入ってみることにした。中二病でコミュ障なキリト君と言語的会話できるプレイヤーというものに興味が湧いたからだ。是非ともウチの姫ともコミュニケーションを試みて欲しい。

「泣く子も黙るイキリトのキリトじゃねーか。こんな下層で何してんだ？　もしかしてお前も強化素材の収集しに来たん？」

「ハムタロとニート!？」

「……キリト?」

やましいことでもあったのか、キリトは俺が声をかけると大いに驚き、同時に他メンバーの一人が訝しむようにキリトを凝視した。

事情を聞いてみたところ、イキリト君は俺と同じく武器強化素材を探しに下層へ潜っていたところ、フィールドモンスターに苦戦しているパーティに遭遇し、それを颯爽と助けて今に至るといいう。

彼等はリアルで同じ高校のパソコン研究会のメンバーらしく、キリトをギルドに誘うと共に、パーティメンバーの一人『サチ』というプレイヤーの戦闘指南を頼んでいたところだったらしい。ここでキリ

トが渋い表情をしていた矢先、俺とニートが介入してきた、と。

「どうもー、ギルド《天壤無窮》のリーダーやってるハムタロといいまーす。とりあえず親しみ込めてハムタロサアンとでも呼んでくださいな」

「同じギルドの曲刀使ってるニート侍です。ニートとか名乗るときながら、攻略組として毎回ボスと戯れてる働き者です。以後ヨロシク」

常識ある人間として彼等——ギルド《月夜の黒猫団》のメンバーに自己紹介をしてみると、彼らの表情は驚愕と驚嘆に彩られた。

『《イキリト》のキリト』も確か攻略組のトッププレイヤーの一人だったような——！ は、初めまして！ 俺は《月夜の黒猫団》のギルドマスターをしているケイタと言います！ お二人のようなトッププレイヤーに会えて光栄です！」

ケイタ君は興奮した様子で自己紹介をし、他のメンバーも名乗りを上げる。そしてサチちゃんも自己紹介をしたのだが、どうも大人しくて健気で戦闘に向かなさそうな人物という印象を受けた。

……ウチのクロとトレードしてくんねえかなあ。

「——ふむふむ、つまり前衛が欲しいからサチちゃんを槍から片手剣にシフトチェンジしたいと考えてるわけだね。パーティバランス的には正しい判断だよ」

《月夜の黒猫団》の抱えている問題に肯定的な反応を示すニートに、《月夜の黒猫団》のギルドメンバーは希望が芽生えた表情を浮かべ、キリトは苦虫を噛み潰したように渋い顔を俺に向け、当事者のサチちゃん——若干の怯えを含む瞳の色をした。

キリトは気づいているのだろう。散々クロに武器にされたり、ケムツソに投擲で投げられたり、ハツタに騙されてトラップの数々を潜り抜けていた彼は、このゲームにおける本能的な恐怖に敏感になっているため、薄々と彼等の行動の問題点を察している。

話は変わるが、攻略組としてボス戦に入るために、事前試験としてケムツソがプレイヤーを投擲する儀式みたいなものがあるのだ。彼の人間投擲スキルを上げる意味合いもあるが、彼等が本当に迷宮区のボ

スと対峙していいのかを測る目安としても用いられている。一種の度胸試しやな。通称『マユルドへの進化』。

選別するために行うので、特にサチみたいなプレイヤーを投げたら、十中八九街から出てこなくなるレベルのトラウマを植え付けてしまう。そういうプレイヤーは前線に出てくる素質がない。

ただトッププレイヤーとなるとケムツソの儀式を行わずとも自然と分かる。

——サチちゃんが戦闘に向かない人物であると。

つまりキリトは『分かるだろ？ ほら、分かるだろ!?』みたいなことを俺に言いたいのだ。さっさとニート止めろと。

ただニートが分からないはずがないんだよなあ。《天壤無窮》の中で戦闘センスがずば抜けて高いのは——

「——ただ、正解かって言われたら論外だなー。ぶっちゃけサチちゃんって戦闘そのものに向いてないし。それよりも生産系にシフトチェンジしたら？」

——ニートなのだから。

「ど、どうしてですか……!」

「うーん、何ていうのかなあ。こう、感覚的なものなんだけどさ、サチちゃんって無意識に戦闘そのものが嫌いな印象を受けるんだよね。そんな人間に無理矢理戦わせようとしても意味ないよ。いや、サチちゃんを早死にさせたいってなら止めはしないけど」

ケイタの疑問に、ニートは歯を着せぬ物言いに全員が黙り込む。

コイツは昔から言葉に対する遠慮を知らない。

「で、でも……!」

それでも諦めきれないのだろう。戦闘面での強化を図り、できれば攻略組を目指したいと考えてるケイタには。

だから次にニートが言うことは目に見えている。

「それなら、君達には洗礼を受けてもらおうか」
「「「「……は？」」」」



青空はどこまでも続く。

雲一つない空は実に綺麗だ。

日向ぼっこをしていたのなら、次の瞬間には寝てしまいそうだ。

「——つと。コイツ等レベル低くねエか？」

「お試しと言ったでしょう？ 下層プレイヤーなら高い方でしょうよ」

そんな空を背景に、飛んで逝く《月夜の黒猫団》の愉快な仲間達。第一層始まりの街で行われたケムツソの儀式 in 第一層編は、案の定、攻略組を夢見た初々しいプレイヤーにトラウマと恐怖を植え付けたのだった。

この儀式を体験した《月夜の黒猫団》のメンバーは、ハツタの『これをボス戦前になると必ず行います。しかも最前線のモンスターにブン投げますね』に、全員が例外なく項垂れる。さつき、低レベルモンスターに矢の如く突っ込んでいったサチちゃんに至っては、蹲って頭を抱えてカタカタと震えて泣き始める始末。

いくら夢を持つとも、この有様を見れば誰だって考え直す。

呆然とその様子を見守るケイタ君に、俺は肩を置きながら親指で後ろを指した。

「さて——ギルドマスターには特別モードだ」

「……へ？」

「君には武器になってもらう」

「ばっちーい」

考える思考時間すら与えず、クロはケイタ君の両足を掴んでブンブン振り回しながら、一層のイノシシ型モンスターを100体ぐらい狩った後、ボロボロで意識がないケイタ君を引きずりながら戻ってきた。

そしてケイタ君を無慈悲に投げ捨てる。

クロは鼻を鳴らしながら言い捨てるのだった。

「弱すぎる。レベル上げて出直して来い」

「……………」

ボロボロになったケイタ君は理解してくれただろうか？

攻略組と君達の差とは、情報量でもプレイヤースキルでも意思でもなく、ただ頭ネジがぶっ飛んでんのかだ、って

——後に《月夜の黒猫団》は、生還間際まで中下層の支援をメインに活動するギルドとして名を馳せることとなる。特に『《治癒》のサチ』は、強力な回復ポーションなどを制作するプレイヤーとして、彼女の作るポーションは前線の攻略組が生命線と揶揄するくらい活躍したそう。

あとケイタ君は現実世界に戻った時に、クローバーという植物を見ると発狂するようになったのは……俺達には関係ないことだろう。

ユニークスキルにしてはユニーク過ぎないか？

このゲーム世界にいると暦の感覚が薄くなってくるが、あれは2023年の10月頃だっただろうか。

珍しくキリトが俺達を呼び出したので、『天壤無窮』の仮のギルドホームである26層で落ち会った時、彼はトンでもないことを呟いた。

「――俺、ユニークスキルを獲得したかもしれない」

俺達のギルドホームの応接室で神妙な面持ちでキリトが告白したことに、ちよūd料理を持ってきた俺は目を見開き、他のメンバーも黒髪の少年へと向ける。

何かを探るような目付きのイキリキリキリキリト君に対し、俺は彼の言葉に対する感想を簡潔に述べた。

「え、お前も？」

「は？」

さすがに予想外の反応だったのだろう。

キリトはポカーンと間抜け面を晒した。

「ま、待て待て待て待て待て！ もしかしてお前等もユニークスキルを手に入れたとか言わないだろうな!？」

「んー、どうなんだろ？ 正確に言えば『ユニークスキルだと思われるもの』と、『ユニークスキルに限りなく近いスキルを手に入れた奴がいる』かな。ちなみに対象者はニートとクロ」

呑気にアハハと笑う白髪の少年と、無言で出された料理をバキュームの如く喰らっていくクロに、キリトは力が抜けたかのように肩を落として溜息をついた。

微妙に顔が引きつってる。

「け、結構勇気振り絞ったんだぞ……ユニークスキル晒すの」

「確かにテメエだけがユニークスキル持つてんなら、この前カンストした『投擲』スキルと派生型の『砲撃』スキルを披露してやるところ

だったがなア」

「その《砲撃》スキルも初めて聞いたんだが。それもユニークスキルなんじゃないのか？」

「私も取得しているのでユニークスキルではないことは確認済みです。その他のプレイヤーが取得できるかと問われたら微妙なところですが。して、キリト少年のユニークスキルとは何なんでしょう？」

最年長者たるハツタの問いに、キリトは素直に答える。

この言葉には先ほどのような慎重さは感じられなかった。

「——《二刀流》だ」

「ふーん、二刀流かあ。あ、ちなみに僕のユニークスキルは《抜刀術》ね。二刀流ってことは防御に趣を置いたスキル構成なのかな？」

「あつさりバラしていくな……って、どうして二刀流が防御型のスキルだと思ったんだ？」

「二刀流自体は剣道でも存在して、実際に公式大会でも使用は認められてるんだ。んで、イキリト君は剣道経験者だから知ってるだろうけど、剣道の竹刀って物凄く重いんだよね。それこそ両手で振るとか論外。公式で使う二刀流も片方の竹刀は短い」

ニートに賛同するかのように《二刀流》スキルを得た少年は頷く。どうやらキリトのスキルは手数が半端ないほど多いスキルを放てるらしいが、そんなの現実では人間の筋力的に不可能であるし、やるくらいなら普通の剣道を極めたほうが強いとニートは語った。

そして二刀流の剣道の構えは、長剣を上段に構えることが多いが、古流剣術だと両手に持つ武器を交差する構えをすることがある。後者のような構え方をしていると、自然とどの攻撃も受け流したり受け止めたりしやすいので、ニートは《二刀流》のスキルを防御型だと推測したようだ。実際には違ったんだが。

「——まあ、ゲーム世界だし二本の同じ長さの武器を振り回すのは簡単か。えー、ちよつと羨ましいんだけど」

「そういうニートも《抜刀術》を持ってるじゃないか。正直《二刀流》のスキルの扱い方なんて、誰に聞けばいいのか分かんないぞ」

「そういう意味では二トのユニークスキルは適切と言えるでしょう。ちょうど《刀》スキルも熟練度が500を超えたと言ってますませんでしたか？」

こうやって和気藹々と楽しく共通の話題で語れるのは羨ましい気がする。キチガイ共の中で俺だけ特徴的なスキルを持っていないため、置いてけぼりをくらっている気分だ。

ユニークスキルを持つゆえの悩みとかあるだろうし、持つことが必ずしもメリットとは限らんが。

だが、少しくらいは手助けをしてやれないだろうか？

「あ、そういや近所のジジイが二刀流使ってたことあったな。見よう見真似でしか教えられないが、それでも良ければ基礎的なことぐらいは教えようか？」

「ホントか!?! マジで助かる!」

光明が見えたと言いたげに顔をほころばせるキリト。そして俺の発言に反応したケムツソは「ああ？」と目を細くする。

「二刀流使いのジジイ？ もしかして田ノ浦のジジイのことかア？」

「ああ、そんな人。俺達もお世話になっただろ？ ほら、裏山に現れた熊を九十八連撃の二刀流剣術で木っ端微塵にした近所のじーさん」

「ちよつと待て、聞き捨てならない発言が聞こえたんだが」

懐かしいな。

あのジジイ元気してるだろうか？

「彼のご老人も元気にしているでしょうか？ まあ、《町内四天王》の一人でありましたし、寿命でくたばる以外に死ぬ要因が見つからないんですがね」

「そ、そんなに凄い人だったのか？」

恐る恐る《町内四天王》について聞いてきたキリトに、俺は言葉を選びながら説明する。俺の住んでいた地域は特に人外魔境のビツクリ老人の巣窟だけに、下手に説明すると信じてもらえない可能性がある。ぶっちゃけ実際に見てくれたほうが楽なんだが。

「身体能力的にも思考回路的にも、凄い人だったことには違いないな。簡単に説明すると――」

「説明すると?」

「クロが常識人に見えるレベルのヤベー奴?」

「それ存在しちやいけない生命体だろ!」

しちやってんだから仕方ないじゃん。

あれを見て育ったから今の俺達があるといつても過言じゃない近所の方々だったんだから。このデスゲームにあの人達がいてくれたらと何度思ったことか。今頃ゲームクリアしていても不思議じゃない。

「ああ、これ以上は説明するつもりはないぜ。『噂をするとどこからでも現れる堀之北のババア』が現れる可能性もあるし」

「そ、そうか。……そういえばクロは何のスキルを取得したんだ?」

学校だろうが修学旅行先だろうが海外旅行先だろうがネット掲示板だろうが異世界だろうが、とにかく噂をすれば概念を超越してまで現れる近所のババアが出てくることを畏れたため、俺は、この話題を唐突に打ち切ることにした。デスゲームにログインしてきても俺は驚かない。

話題を変えるようにキリトはクロのスキルへと話題を移す。

とつとこハムスターのように食べ物を両頬に詰め込んで、愉快的顔をしている仏頂面のクロは、器用にそのままの頬でしゃべり始めた。

「……『イキリト』」

「……? 俺の名前がどうしたか?」

「違う。スキル名」

「はい?」

断片的にしか説明しないクロの代わりにハツタが補足する。

「スキル取得条件がかなり厳しいエクストラスキルです。まず三十八層に現れる『キリトかなーやっぱww』しか連呼しないNPCと会話し、人でモンスターを1000体討伐と迷宮区ボスに二十回トドメを刺すことが前提条件としてクエストが進行します」

「……突っ込むところが多すぎて脳が思考を止めるんだけど。え、俺?」

「最後にクエスト内容が、クエストを受注している人物のみが行ける

三十八層に現れる『イキリトの丘』に咲いている《イキリトの花》を入手して、クエストNPCに届けることでスキルを取得できます」

「ごめん、泣いていい?」

「ちなみにスキル効果は、《Kirito》の名前を持つプレイヤーを武器にした時に、攻撃する際の耐久値減少が著しく下がり、攻撃力も50%増加します」

「……………」

ハツタが説明する間も、キリトは静かに顔を背けて泣いていた。

そして泣き終わった後に「かなり強くないか、そのスキル」と冷静に分析する辺り、強かになったなっと思って思った。

紳士と変態は紙一重

「ここにはタイムしているモンスターが死んでしまった時に、それを蘇生させるためのアイテムが入手できるという情報があるんですよ」「モンスターってタイムできたんやね。最近なんでか知らんけど、モンスターと顔を合わせたら逃げていくしき、タイムシステムとか知らんわ」

「新しい行動パターンでしようかね?」

第四十七層は花が咲き乱れる階層。

『ビーストテイマー』と呼ばれるプレイヤーが近づくと咲くと言われている『プネウマの花』の情報の信憑性を確かめるために、まずは下見として『思い出の丘』というマップに足を運んだ俺とハツタ。

なぜにむさ苦しい男同士でフラワーガーデンに足を運ばねえといけないのかと思ったが、よくよく考えたら俺の知り合いに女の子がサチちゃんぐらいしか思い浮かばないことに気付いて諦めた。彼女は最近新しいポジション制作で忙しいとか言ってたし、邪魔しちや悪いよね。

はー、周り男と蛮族と神話生物とか悲惨な青春送ってるなー、俺。せめてもの楽しみ方として、咲き乱れる花々を眺めながら歩いていると、最近親の顔より見てそうな黒いコートの中二病と、小柄な少女が並んで歩いているのが見えた。

セミロングの髪をツインテールにした、クロと同等かそれ以上に小柄な少女で……

「——ん? ハムタロとハツタ? こんなところでどうしたんだ?」

「とりあえず通報するわ」

「待て待て待て待てええええ!!」

さっそく中下層の自警団を営んでいる知り合いのリンドにメッセージを送ろうとして、それを素早い動きで制するロリコンの性犯罪者。そういやコイツAGI（瞬発力、反応速度）のステータス伸ばしてたな。これを見越して反応速度を上げていたとは……末恐ろしい奴だ。

「……っ、《タイタンズハンド》か。なるほどねえ」
噂だけは耳にしたことがある。

このデスゲームにおいてPKを楽しむ、通称『オレンジギルド』。この協力が必要不可欠なソードアートオンラインで、背後を警戒しないといけないのは皮肉な話だが、ハツタからの情報でオレンジギルド自体の情報は頭に叩き込んでいる。

どうやら目の前の連中は結構大きなオレンジギルドの人殺し共らしい。

だが相手が悪かったな。

「おうおう、ロザリアさんや」

「何かしら、お姫様の護衛が私に用？」

「アンタも考えが甘かったなって話さ。とりあえず慈悲として聞いとくが——アンタ等、俺達《天壤無窮》と事を交えるって認識でOKか？」

俺の口から発せられる《天壤無窮》という言葉にざわめきが起る。良くも悪くも攻略組きつてのキチガイ集団の異名はソードアートオンライン中に響き渡っているらしいな。

「て、《天壤無窮》だって?! ラフコフですら畏怖した真性のキチガイ集団じゃないか! 《豪気》のアスナや《武者》のクライン、《神聖剣》のヒースクリフや《イキリト》のキリトと並ぶ、攻略組のトッププレイヤーが何故……!?!」

「俺達は別に今引いてくれれば危害は加えないよ。見逃してやってもいい」

「お、おいハムタロ」

「だがな——」

俺が振り向いた先は——まさに地獄だった。

怯えるシリカちゃんの前には立つのは、細剣を西洋の騎士の彫像が如く上に構え、直立不動のまま瞳孔が開いた瞳でオレンジプレイヤーを睥睨するマッドハッター。「一步でも動いたら貴様等を刺し殺す」と、言葉で言わずとも威圧で示しているため、周囲のオレンジプレイヤーは動けない。

いつもよりもトーンの低い声色が響く。

「幼き美少女は地球の宝。それを汚す輩は神が許そうとも私が許さない。——さあ、その命を（ロリコンの）神に返しなさい」

「——このロリコンが許すかな？」

事実上の死刑宣告を述べた後、キリトですら肉眼で捉えられない動きでオレンジプレイヤーをなぎ倒すハッタを前に、ロザリアさんは夢でも見ているかのように呆然とする。

——この後ギルド《タイタンズハンド》は案の定崩壊したのだが、そこから辺は大して面白くもないので割愛するでしょう。

キリトは彼等を黒鉄宮に送るよう依頼されたらしいが、依頼主は事の顛末を聞いて「あの連中に目をつけられたなら、死んで逝った仲間たちも喜ぶだろう」と述べたとか。そりや、あのロリコンに喧嘩売ったんだから仕方ないだろう？

ライブの時間じゃオラアアア!!

「——まったく、自分のスキルの特徴くらい把握しとけつての」

「……ハア……ハア……ハア……ハア……!」

「エ……の、ノーチラス!? だ、大丈夫?」

なんでこんなことしてんのかねえ……と空を仰ぎつつ、俺はモンスターに集団リンチされそうになっていた男女二人を一瞥する。ついて来てモンスターを無双したクロは、まったく毛ほども興味がないのか、まだ周囲に闊歩しているモンスターを駆除しに行っている。

平原フィールドの柔らかい雑草に尻餅をつき、呼吸荒く冷や汗をかきっぱなしの少年——ノーチラス君と、吟遊詩人みたいな服装をした楽器を持つ少女——ユナさんに、俺は彼等に背を向ける形で声をかける。遊びとはいえエスゲームなため、また死にかけられても困るし、周囲の警戒は怠らない。

「その《吟唱》^{チャント}は補助効果が強力なスキルだが、効果範囲内の敵のタゲを集めるデメリット効果がある。そりゃ、知らんのは仕方ないよ? 割と珍しいスキルだし? でもさ——《フルダイブ不適合》のプレイヤー一人で護衛は無理あるんじゃない?」

その言葉に落ち着きを取り戻し始めたノーチラス君は悔しそうに俯く。

あのSAO最強と名高きヒースクリフの設立した《血盟騎士団》のユニフォームを着ているのだから、戦闘に関しては腕はあるのだろう。だがユナさんの話によると、彼は軽度の《フルダイブ不適合》を持つのだとか。簡単に言えば、本能的な恐怖を感じた時に動けなくなる……みたいなの? これはどれだけ本人の意思が強くとも、ナーヴギアが彼の本能的意識を読み取って二の足を踏ませるのだとか。

普通にゲームするのなら別に気にしなくてもいいだろう。エンジョイ程度なら、な。

だが状況が悪かった。そうとしか言いようがない。

だが淡々と言う俺が気に食わないのか。

俺を睨みながらノーチラス君は呟いた。

「……アンタに何が分かる」

「分らんことだらけだな。ただ——このまま俺達がこのマップを通らなかつたら、ユナさんは確実に死んでたことは断言できる」
「……………」

きつい言い方になるかもしれないが人命が懸かっている。なので、ノーチラス君には悪いが現実をつきつけるような形で反論させてもらう。

「ごめんなさい……私がこのスキルを把握してなかったばかりに……。あの、助けていただいてありがとうございます！」

「払うもんは払ってもらうよ。そっちの方が『無償で助けた』って言葉より信頼できるからね。あと、くれぐれも今回のようなことは起こさないようにな？」

平謝りしてくるユナさんに、少なくともはないが命の対価としては安すぎるゲーム内マネーを提示し、その場で交渉を成立させる。ついでに釘をさしておくのも忘れない。

「……俺は……彼女を守るためだけの力が欲しかった……だけなんだ」

「なら圏内にも籠ってる。そっちの方が数百倍安全だぜ」

「それじゃあ逃げてるだけじゃないか！」

「生きるための『逃げ』は正しいよ」

俺の即答にノーチラス君は息を飲む。

こういう日本人は結構多い。『逃げること』を『悪』だと思ってる。実際には立ち向かったところでダメなもんは大抵ダメだ。そう根性論がまかり通るほど甘い世界じゃないし、引き際を覚えない人間は潰れやすい。

逃げたっていいじゃないか。死ぬよりヤマシじゃん。

「血盟んところに入ったってことは、ユナさんをデスゲームから早く解放させたいって想いがあったからじゃないの？ そこんとこどうなん？ んー？」

「ななななななな、何を言ってる!？」

「……意外とわかりやすいんだな。なら彼女の傍に居たほうが彼女を

守れるんじゃないか？——あ、思い出した。ユナさんこの前一層の
コロッセオでストリートライブやってなかった？ あれの手伝いし
てやったほうが堅実だと俺は思うぞ」

ちよろどクロがモンスターをブン回しながらモンスターを倒す様
子を確認できたので、話は終わりだと打ち切るかのよう二人へと近
づく。とうとうプレイヤーだけでなくモンスターまで振り回すよう
になったか、あの神話生物は。

「ああ、ゲームクリアに関して、ノーチラス君やユナさんが気負うこと
はねーよ。少し時間はかかるかもしれないが、俺達攻略組が適当に10
0層クリアしてやつから、それまでデスゲームライフを満喫するとい
い。このゲーム作り込み凄いいから、街を散策してるだけでも楽しいん
だぜ？」

「……………」

「まあ、俺の個人的な意見だ。参考にするかどうかはご自由に」

二人だけだと危ないので、帰りも俺とクロが先導して街まで帰す。

その間はノーチラス君がやけに無言だったが、果たして彼の心に届
いたのだろうか？



「——というわけで、私が《歌姫》のユナと《バックダンサー》のノー
チラス主演のライブを企画することになりました」

「…………俺は何を間違ったんだろうね」

彼等と出会ったのが何か月前かは覚えていなかったが、ギルドホー
ムでハツタの相談を受け、若干遠い目をしながら話し半分で聞く。

《血盟騎士団》から脱退した話は耳にしており、それ以降は目にしな
かったため気にしなかったが、まさかバックダンサーを極めていると
は思わなかった。むしろ誰が予測するんだコレ。

「つか俺に何で話を？」

「その主役二人に言われたんですよ。人生の恩人たるハムタロサアン
には是非とも見てほしいと。まさかノーチラス君ともかく、ユナ嬢と

も知り合いとは思いませんでしたよ。彼女の歌は聞いていて心躍りません?」

「ん……まあ、そうだなあ……」

何せ、以前聞いた歌が頼りなだけに、曖昧な返答になってしまう。ぶつちやけ歌聞いて「バフありがと」みたいな印象しかなかったから

「バックダンサー……バックダンサーねえ。SAOにそんな機能あったっけ?」

「そこはケムツソが教官として」

「アイツがバックダンサーできたことが今日一番の驚きなんだが」

「ちなみに作詞にはニートも関わってますよ」

「俺達関わりすぎてない?」

俺の知らないところで、俺が助けたプレイヤーがギルメンとヨロシクしてた件について。

下手にノーチラス君が暴走して、悲惨な結果を生むよりは遙かにマシかと、ポジティブシンキングで気持ちを切り替えていく。

「歌の力というものは侮れません。特にデスゲーム下における娯楽の減少、一層から出ないプレイヤーの無気力化は、自警団のリンド氏に以前から相談されておりましてね。このライブは《アインクラッド解放軍》や《風林火山》といった攻略組も一枚絡んでます」

「ふーん、いいんじゃないの? 歌云々かんぬんは知らんが、お祭り騒ぎは大歓迎だ。どうせなら一層で本当に祭りでも開催するか?」

「お、いいですねえ! 《料理》スキルを持つプレイヤーで屋台を開いてみたり、低レベルプレイヤー参加型の催しを企画してみましようか!」

「んで最後に打ち上げ《イキリト》だな」

「素晴らしい!! 企画主任のヒースクリフ氏と広報担当のキバオウ氏にも相談せねば」

アイツ等も関わってたのかよ、という俺の苦笑いは、速攻でギルドホームから出ていったハツタの耳には届かなかった。こういうお祭り騒ぎ大好きなのは、《天壤無窮》メンバーの数少ない共通点の一つで

もある。

入れ替わりとしてギルドホームに帰ってきたクロが、ハツタが出ていったほうを見ながら仏頂面で俺に尋ねてくる。

「何かあったの？」

「こっから忙しくなるなってコトよ」

俺は近くにあったソファーに仰向けにダイブしながら、彼等二人のことを思い出す。あの彼女を守る必死さだけは、状況を把握できなかった俺が唯一理解することができた。

「さあ、彼は《バックダンサー》として、彼女のライブをどのよう^{成功させる}に守っていくのだろうか？ ……なるほど、こりや楽しみだ。

「お祭りやるんだってさ。クロも行くか？」

「当たり前」

俺は未来行われるであろうライブに思いを馳せるのであった。

そんなことよりサツカーしようぜ！

ラフィンコフィンだっけ？ マフィンコフィンだっけ？

まあ、どうでもいいや。

そんな快樂殺人ギルドがSAOに存在しているのだが、その討伐パーティにキリトは参加してきたらしい。ちなみに俺達は諸事情により参加しなかった。

「……………」

んで、ギルドホームに来てずっと黙りこくっている。

どうやら奇襲を仕掛けたラフコフのメンバー三人の命を、正当防衛ながらも奪ってしまったことに罪悪感を感じているらしい…………と、メールでクラインの兄貴に相談したところ、そう返ってきた。

他にも「キリト君そこ居る!」みたいなアスナさんのメッセージや、「彼の精神状態は大丈夫かね?」とかいうヒースクリフさんのメールを始めとして、多くの彼の心配をする伝言が俺のところに来る。いやいや、心配するなら本人に送れよ。つか来いよ。

キチガイギルドのホームには入りたくないってか？

というわけで、応接室のソファで座りながら拳を握りしめるキリトを、机を挟んで対面のソファに寝転がりながら観察する俺と、一人掛けの小型ソファに器用に横になりながら本を読むケムツソがいた。ケムツソが俺から見て右手に居り、左手にはコクコクと頭を揺らしながら眠るクロが鎮座している。

だが黙っているのも飽きてきた。

ケムツソから本を奪って読むのも一考したところで、不意にキリト君が黒の剣士君が言葉を発する。

「ハムタロ、お前は…………人を殺したことがあるか?」

「ゲーム内なら何回か。確か四人」

「…………っ!」

コイツから聞いてきたはずなのに、妙にオーバーリアクションを取るキリト。ただでさえキチガイ行動を自覚しているのに行っていて、誰からも恨まれないはずがないだろう? しかもオレンジプレイヤー

が少なからず横行しているSAO世界で。

「……何とも……思わなかったのか?」

「何とも思わないわけじゃないじゃん。キチガイ舐めてんの?」

さらっと即答したからなのか。

キリトはアホみたいいな質問をしてくる。

『人を殺すことは最も恥ずべき悪徳である』……中々に立派な信念だろ? このまま貫ければ良かったんだけどねえ。戦国時代に生きてた将兵の気持ちは何となく分かったわ。あれだ、殺さなきゃ俺が死ぬ」

「だが! 人を殺すことは最低なことだろう!」

「ああ、最低だ。キリトの気持ちも分からんでもないよ? ありやヤバイ。何がヤバいって、初めて人を殺した時もそうだったんだが、罪悪感が微塵も湧いてこなかった。死体が残らないってのも理由なんだろうけど、殺人行為をしている感覚が薄くなる。オレンジとレッドが増えるわけだよ」

俺はソファーに寝転がりながらキリトの意見に僅かながらも肯定する。そのせいか一瞬激昂しようとしたキリトも拍子抜けしたように鎮火した。キリトの言う通り、殺人は悪いことだ。けどゲームシステムが殺人そのものの罪悪感を減らす。人を刺す感覚がないまま人が死ぬというのは、ある意味恐ろしいものがある。それをキリトも薄々感じているゆえに、若干逸れた俺の発言にも突っ込まないのだから。

一連の流れを聞いていたのか、突如ケムツソが鼻を鳴らして語りだす。

「ンだよイキリト。そんな女々しい事考えてやがったのかア?」

「女々しいって何だよ! こっちは——」

「何でオレ達が自分を殺そうとしてきた連中のことまで考えねエといけねエんだ? 自業自得だろうが。殺されても文句は言えねエよ。……もう連中は文句も言えねエけどな」

人を殺したことに罪悪感も持たず、むしろ笑って皮肉まで込めるケムツソの姿に、キリトは化物でも見るような目で灰色の髪の少年を捉

える。

ケムツソの発言は暴論に近いが、言ってることは理解できるし納得もできる。

「キリトは要するに『人を殺した自分への罪悪感が半端ない』って事だろう？　それが間違っているとも思わないし、それを許す許さないはキリトが決めることだから俺は何も言わない。——だが、それが他人にも当てはまるとは限らないことを理解してほしい」

人を殺すことは悪だ。これは万人共通の理解ではあるし、俺やケムツソがSAOで行った正当防衛という名の殺人行為を何も知らない第三者に言ったのなら、九割九分の人間が後ろ指を差すだろう。

だが単に『悪』と割り切つていいのだろうか？　そう二面性で測れるような問題なのだろうか？

背景は？　事情は？　そんなことも知らずに『悪』と断定するのは？

キリトの件を例で挙げるとするならば、正当防衛で人を殺すのは本当に悪なのか？　話し合いの努力で解決するなら戦争なんざ起こらんし、話し合いのリスクも大きいと分からないのか？　それとも笑顔で殺された方が良かったのか？

こんなことを考えてると、俺は真性のサイコパスなんじゃないかって思うことがある。

ああ、本当に——

「……何をするのが正しかったんだろうね」

「……ハムタロサアン」

「お前実はそこまで罪悪感持っていないだろ？」

ねつとりとしたこうしくんボイス口調やめろ。

真剣に考えてやったのが馬鹿らしく感じるだろうか。

「あーもうめんどくせえ！　サッカーだ！　サッカーやっぞ。おい、キリト、ラフコフ討伐参加者全員集めろ！　今すぐにだ！」

「はあ!?　そんなの無理」

「やれ」

「イエス、ママ！」

俺の無茶ぶりに焦ったキリトだったが、いつの間にか起きたクロにのドスの利いた声に敬礼しながらメールを急いで書き込むのだった。



「おーい、そっちボール行ったぞ！」

「カット入れって、何やってんのフォワード！」

「よしよしよし、テメエ等中央まで下がれー！」

夕暮れの石造りの街は寂しくも感じるし、美しくも感じる。

そんな下層の街の大広場で、年代男女問わず、装備を外して一つのボールを追いかけ回す。ポジションを叫んだり、専門用語を連発する者もいるが、基本的にそんなことを考えずプレイしている姿は微笑ましい。

その様子を眺めるのは、さっきまで若さを活かしたプレーでスタミナ切れるまで走り回ってたキリトと、審判やってた俺、順番待ちのケムツソだ。

電脳世界でも息切れするんだなど感心しながら、肩で息をするキリトに水を渡す。

「——ぶはっ！ あー、づがれ、だー」

「少しは気が晴れたか？」

「少し、な」

まるで討伐戦などなかったかのように笑顔で走り回る連中を細目で見ながら、黒の剣士は息を吐くついでに言葉を漏らす。

煮え切れてないかと判断したのだろう。ケムツソが準備運動をしながら吐き捨てた。

「まだまだお子様だなア。難しく考えてンと老けるぞ」

「ケムツソは割り切ってるんだな……」

「当たり前だ馬鹿野郎。こんなデスゲームで他人のこと気にしてる余裕があっつかよ。むしろ余計なことを考えて、手エ抜いて生きてくもんなら、殺した連中に失礼だ」

そう言い捨てると、汗をかきまくってるクラインの兄貴と交代して

サッカーに参加する。

俺とキリトは目を見合わせた。

「……俺、励まされたのか？」

「昔から不器用な奴だよ。つまりはそういうこと」

「……あれで？」

「言つてやるな」

不思議と込み上げてきた笑いに、俺達は声を上げて笑う。

そんな、デスゲームの一日。

「ふっ、私の鉄壁が《神聖剣》以外でも通用することを教えてあげ——」

「おー！ ハッタのオーバーヘッドが決まったああああ!!」

「ヒースクリフ、泣くな！ あれは仕方ない！」

「むしろ顔面使つてでも阻止しようとするアスナが異常じゃね？」

「つか副団長がそろそろゴッドハンド会得しそうなんだが」

「とか言ってるうちに副団長の鉄壁が破られた!?!」

「キバオウのヘディングシュート凄え！」

「クローバーのフルスイングが凄いだじゃね？」

「そもそもサッカーのやり方を間違ってるというか」

「……そろそろヘディング狙ってオレっち投げるの止めてくれないか？」

「だからクロちゃんと武器を一緒にするなどあれば……」

「しゃーねえだろ、クラインが率先して武器になりに行くんだから」

キチガイ共の日常 主人公編

俺は朝早くから第三十九層にやって来た。

田舎のようにこじんまりとした街が印象的な層で、一見前線入りしている攻略組の人間が足を踏み入れるような場所ではないように思われるが、ここには《血盟騎士団》のギルドホームがある。

月一の攻略組ギルドの全体会議がココで行われるため来たのだが——勿論それだけが理由じゃない。

キチガイ共と顔を合わせない月一日。

精一杯のびのびと羽を伸ばしたいのだ。

「——ハア、ハア、ハア……ここまで来りや」

「私からは逃げられない」

「キエエエエエエエエエ、シャベツタアアアアアアアアアア!？」

この月一の楽しみだけにカンストさせた《隠蔽》スキルを駆使したのにもかかわらず、今回も神話生物を撒くことが出来なかったことに、マリアナ海峡よりも深い悲しみを覚える。

おかしい、フレンド解除したから場所が割れるわけがないし、念の為に《麻痺》デバフを付与する朝飯も用意したはずなのに。

仕方ないので、ギルドマスター会議にクロを引きつけて、会場の《血盟騎士団》ギルドホームに足を踏み入れる。本来ならばギルドホーム入り口の門番に止められるはずなのだが、血盟騎士団団員の彼等は苦笑と同情が入り交じった笑みを浮かべて通してくれる。

まるで「今回も駄目だったんですね」と言いたげだ。

アインクラッド最強のヒースクリフですら止められない化物だから理解はできるが、こう、もうちよつと門番らしくクロの奇行を止めてくれないものだろうか？

会議室まで行く途中で、補佐として会議に出席する《豪気》と、ソロだけど攻略の要たる《イキリト》に遭遇する。しかも手まで繋いでいるもんだから、相当仲がいいんだろう。

俺はアツアツの二人に声をかけた。

「よーっす、アスキリ。元気してた？」

「あ、ハム君にクロちゃん！」

俺とクロを視界に入れたアスナさんはキリトを伴って近づいて来る。……キリトを引きずっているようにも見えたが、まあ、気のせいだろう。

「朝から見せつけて……何なん？ 恋人なん？」

「え!? そ、そう見えるかな……?」

「おいハムタロ！ 余計なことを言うな！ 俺達はそんなんじゃない——ヒイツ!？」

ロリを守るハツタ並の速さでソードスキルを振るうアスナに、一層の面影は微塵もなかった。前まではデスゲーム内という環境で情緒不安定となっていたが、今ではジャングルの奥地に身一つで生活できるレベルまで強かになってしまった。

だが当人のアスナさんは黒の剣士にソードスキルをぶち込んだ後、首を傾げる。

「ねえ、クロちゃん。やっぱりシステム的にソードスキルの速さに限界があるのよね。ちやうど火力も欲しかったし、両手剣も使ってみようかなって思うんだけど、どうかな？」

「うん。アスナなら細剣と同じ速さで両手剣を振れる」

「両手剣も片手で振れば細剣よね？」

「当たり前」

なら細剣の熟練度で使えるわ、そう言って笑う狂乱の姫君に、近くを通りかかった同ギルドメンバーは顔を真っ青にして逃げ、関節技を決められているキリトは奥歯をガタガタと震わせる。

ここに二人目の神話生物が誕生したのかもしれない。いや、元々か。

「キリト、誰か可愛い女の子紹介してくれないか？ どうも俺の身の回りに女性が一人も存在しないんだ」

「……俺も最近見てないな、女の子」

キリトはどこかやつれた表情をしていた。



マスター会議というのは大切だ。

誰がどのように動き、攻撃のタイミングやタンク入れ替えの指示、ボス攻略ヒントの情報共有、最後にどこで最終兵器イキリトを使うか——とにかくボス攻略前にやることはたくさんある。

それに各ギルドの装備やアイテム、人員の確認の共有も必要となってくる。

特に今回の会議は、長年攻略組の柱として活躍していた《アインクラッド解放軍》の最前線戦力縮小化により、他のギルドからも人員を送らなければならぬ。アインクラッド攻略による中層・下層拡大により、自警団の《ドラゴンナイツ・ブリゲード》だけでは足りなくなつたため、在籍数1000人を超える《アインクラッド解放軍》も自治に努めることになったのだ。

これには普段マスター会議には出席しないヒースクリフも参加している。

そもそもギルドに興味関心のないヒースクリフだが、ボス攻略に関する案件なので、自ら出向いたというわけか。

「——というわけで、次の案件、来週に迫った『第二回大花火大会』の企画へと移りたいと思います」

「「「待ってました！」「」」」

あと祭りの企画ぐらいだろうか。ヒースクリフが率先して参加するのは。

ぶっちゃけマスター会議なんざ一時間弱で終わってしまうもの。今回の目玉と言っているのはコレだったりする。

ただでさえデスゲームでは精神を削るもの。

ずっと迷宮区に籠ってモンスターを狩り続けるようなキチガイじみた行動をするよりも、時折息抜きをする方が効率が上がるらしいからな。ソースは俺達。

そんな歓喜の声を無視するかのよう、進行役のアスナさんが、どこからか持ってきたホワイトボードに色々と書き込んでみる。

「今回も『打ち上げ《イキリト》』の季節がやってきました。他に

も夏限定イベントと並行して、プレイヤー・ギルド主催のイベント、舞台の配置……詳しいことは手元の資料を参考にして下さい」

資料一番前の表紙ページの絵、これ誰が書いたんだろう？　綺麗なまでに打ち上がってるデフォルメされたキリトの絵なんだが。

これを見てクロは指を鳴らして意気を示し、キリトは溜息をつきながら手を振るのだった。

「《イキリト》スキルもカンスト寸前。前回より打ち上げて魅せる」
「前回は三回だったからなあ。レベルも上がったし、五回までなら回復しなくても耐えられるぜ」

嫌がる頃のキリトはどこへ。

笑いながらも頼もしく感じる黒の剣士だった。

——それだけで終わるんなら俺達じゃないが。

「加えて、《SAOゼネラル・エグゼクティブ・プレミアム・ディレクター》マッドハッター氏の提案により、男性の部・女性の部ファクションショーの企画案もあります」

「おお！　ええやんか！」

「うっひよおおお！　可愛い女の子の晴れ姿が見れるのか！」

「そしてキリト君は強制的に女性の部への参加となります」

「ファッ!？」

キバオウとクラインの兄貴が喜ぶ中、「お前女装な？」をアスナさんから遠回しに宣告されたキリトは、余裕そうな表情をあっさり崩す。

他の攻略組ギルドマスターは全員が目を逸らす。

ここに居る全員（含・ヒースクリフ）が共犯者である。

「まままままままま、待ってくれ！　男性の部だったら百歩譲って参加することもないけど！　どうして女装前提の話で進めてるんだ!？」

「ワシじゃよ」

「お前かハムタロおおおおお!!」

胸ぐら掴まれながらブンブン振り回されてるけど、そんなのしたところで決定は覆らない。

多数決万歳。もうギルドマスター全員からの了承は得ているのだ。物事を決めるときには、あらかじめ何人かに話しを既に通しておく成功率が上がる。社会人の基本だ。

「そんなに俺を出したいなら自分で出る！」

「は？ 俺も参加するが？」

「マジか!？」

「はっ、たかだかスカート穿いて、化粧して、ウィッグつけて、骨格を女性らしく自力で変えるだけだろ？ そんなに難しいことじゃない」「お前もうちよつと自分の言ってることに違和感持てよ！」

女装なんざリアルでも腐るほどしたわ。

中学時代万年女性役だぞ？

こうして夏祭りに『黒の剣士・キリ美』が誕生し、男女問わず密かな人気を得るのだった。

キチガイ共の日常 不良少年編

そんなに早くない時間に目が覚める。

予定は午後しか入っていない上に、今日はあのアホ面の数々を視界に入れる時間が非常に少ない日。ゆつくりと約束ギリギリの時間まで惰眠を貪ろうと考えていた。

ならば、なぜ目が覚めたのか？

どつかのアホが叩き起こしてきたからだ。

「……起きて。ハムタロどこ？」

「……うっせエな」

「どっか？」

無理矢理寝ようとするが、この金髪女の馬鹿力によってリビングまで引きずられていく。首根っこ掴まれて行く姿は、さぞ滑稽なことだろう。クソが。

というかタンクと狙撃メインなオレは、ヘイト集めるための火力が必要なために、相当な量のSTRを振っているため、バーサク女レベルの筋力値は持っているはず。

なのにオレの抵抗に手こずるところか、されるがままにリビングまで引きずっていくコイツの筋力は何なんだ？ もしかしてハムタロの言っていた「コイツSTR極な上にタンクでVIT振ってないとかマジやべえ」という戯れ言は本当なのか？

そうだったとしたら馬鹿だろ。

「つかフレ登録してんなら場所分かるだろうが」

「フレ切られた」

「……チツ。要するに場所知られたくねエってことだろ？ なら放っておいていいんじゃないの？ わざわざ休日までストーカー行為とか、ロリコンの変態じゃねエんだからよオ」

「嫌。ハムタロに変な虫^女がつく」

もうとびつきりの手遅れなデカイ虫がついてるだろうが。

言つてやりたい気持ちには山々だったが、特に口に出す必要性を感じなかったために、喉まででかけた言葉を飲み込む。

肩を落としているクロをよそに、テーブルにあつた料理を適当に摘まむ。どうやらギルドマスターの野郎は、ご丁寧に作り置きまでして出掛けたようだ。

まあ、アイツの作るもんは味は悪くな——

「がっ……!?!」

待て待て待て待て待て。

なんで麻痺がついてやがるんだ!?

倒れ行く寸前に、机の上に書き置きが用意されていたのが目に入る。ちゃんとクロのものだけ指定して。神話生物から逃げるのに本気出しすぎだろう!?

一時間半という、プレイヤー相手どころかモンスターにすら使わなレベルの、長期のデバフに引きつった笑いが出る中、麻痺したオレの前にしやがみながら、仏頂面の女が見下ろしてくる。

見てねえで助けるボケナスが。

「……ケムツソのフレ欄見せて」

「……」

コイツ本気で言ってるのか?

まずはデバフかかったギルメン助けるのが先決だろうか?と思わなくもなかったが、何言っても無駄だと悟ったオレは、首で自分の右腕を示す。

ボーっと何考えてんのか分からん表情で、オレの右腕を使ってメニューを開き（犯罪その一）、フレ欄を閲覧し（犯罪その二）、ついでにオレのアイテム欄から転移結晶を勝手にトレードする（犯罪その三）。

……いや、まあ、転移結晶は別にいいんだが。

アホのクセに律儀に相場の倍のコルをトレードしてくれたし。

「じゃあ行ってくる」

「……」

仏頂面のクロが出ていくのを寒冷期よりも寒い瞳で見つめながら、アイツだから仕方ないと諦め半分で虚空を数分間眺める。

せめてもの抵抗として、動かない体を何とか駆使して、ニートの寝

室近くまで移動する。こんな姿見られた日には、アインクラッドの外へと I can fly するだろうが、何も予定のない日の天壤無窮は午後まで惰眠を食ることなど珍しくもない。

そしてアイツならそろそろ——

「ハロー、人類代表諸君！ 清々しい朝の始まりだよ！ ほら、グッドモーニング——」

「うるせエ無職」

「——もぐもぐ。お、これはハムの朝ごはん……がつ!？」

笑顔で扉を開けた白髪のクソ野郎に向かって、途中まで食べていた麻痺ご飯を投擲スキルで口にぶち込む。投擲スキルをカンストさせたオレの投擲が外れるわけもなく、朝っぱらからうるさい無職童貞の口へとジャストミートした。

そして仲良く倒れる。

「テメエは同じギルメンだが、こんな時間まで寝てるテメエがいけねエんだよ……クククつ……ハハハハハハハハハハ!!」

「シヤア！ 謀つたな！ シヤアアアアアア！」

「ああ、オレとテメエは今のところ麻痺状態だが——オレの方が先に麻痺が解除される。その意味が分かるかア？」



無職引きこもりを本当の無職引きこもりに仕上げた後、オレは中層の何の変哲もない層まで足を延ばす。この層は特に重要なクエストもなければ、旨みのある狩場もない上に、街数も少なく入り組んではないため、レッドの連中すらも目に留めない。

そんな層の主街区の、コロッセオ風な建物に足を踏み入れる。

人気はないと思われたそこには、オレと同世代に見える男女が立っていた。

「あ、ケムツソさん！」

「……二十分オーバー、明らかに遅刻ですよ」

「こつちも忙しかったんだよ、察しろ」

オレの姿を見た瞬間に明るい声で迎える女と、敬語を使う姿があまり似合わない男。女の方がユナって名前前で、野郎がノーチラス。

何故こうやって待ち合わせているのかというと、始まりは数か月前。ハツタ經由で知り合ったコイツ等なのだが、暇さえあれば時折こうやって会うようにしている。どうもアインクラッドを戦闘面ではなく精神面で支えることを選んだ連中らしい。

とんだ非戦闘員腰抜け野郎共だな。まあ、死に急ぎ野郎共攻略組よりは遥かにマシか。

目的は無論――

「準備は出来てるな？ さっさとバックダンスの練習始めるぞ」

「分かってますよ……」

「――つと、その前にラジオ体操だな」

オレはアイテム欄から《メッセージ録音クリスタル》を取り出す。そこまで高価なものではないが、これを落とすモンスターは意外と少なく、コレ目的に狩りを意識しない限り集まらないレアアイテム。

歌を録音する意味合いでユナは使うことが多い。

本来なら狩りをしないコイツ等には手に入りにくいものだが、そのためにだけに投擲練習を兼ねて、これを落とすモンスターを乱獲したこともあり、《天壤無窮》だけで数千個所持している。

これにはすでに音声を録音してある。

ニートが歌った『ラジオ体操第一』だ。

「何で今さらラジオ体操を？」

「ああ？ 老若男女を問わず誰でもできることにポイントを置いた体操と言えばコレだろうが。するしないで大きく変わる。足腰弱いバアですら熊をシバき倒センだぞ」

「ケムツソさんといい、ハツタさんといい……やっぱ攻略組っておかしい人たちの集まりなんだね」

「血盟騎士団で前線入りしようとした自分が馬鹿らしくなつて来ます」

皮肉交じりにノーチラスが何かほざいているが、それを無視して《メッセージ録音クリスタル》を起動させる。懐かしのリズムカルなラジオ体操の鼻歌をクロが歌い、体操がスタートする。

三人が横一列に並んで体操を始める。

『腕を前から上にあげて、大きく背伸びの運動〜』

「あ、懐かしい。こういうの小学校の頃にやったな〜」

『手足の運動〜』

「適当にすんじやねエぞ」

「言われなくても」

『足を横に出して、胸の運動〜』

「なんか仮想世界なのに運動してる気分。何か子供の頃に戻ったみたいだね」

「どうしてユナはそれを俺を見ながら言うのかな……?」

「隠さなくてもテメエがリアル繋がりなの知って——」

『腕を前から上に上げて大きく手脚の腕を回します〜』

「……はい?」

「オイ、動き止まってンぞ」

『足を斜め上に横曲げの運動〜』

「それ物理的に不可能だよね!」

「あア? ちゃんとやってるだろうが」

『足を上げて十歩曲げてレッツダンスイング!』

「うわっ、ケムツソさん気持ち悪っ! あとノーチラス! 無理にする

ると骨折れるよ!」

「こ、これくらい……!」

『足を横にして深く曲げて正面で回しましょう〜』

こうして最後の『大きく深呼吸』の部分では、ノーチラスが過呼吸をしているのであった。

キチガイ共の日常 マイペース編

気がついたら朝になってた。

いや、太陽の高さに『おはようございます』が言えるような時間じゃないか。

「……あと十八時間」

なんて言っただけはみたものの、果たして惰眠を貪り続けることが、有意義な時間の使い方なのだろうか？ 有意義もクソもない日常を送ってるから何とも言えないけど。

朝遅く起きることが好きではあるが、別に眠り続けることは好きじゃない。ハムタロとかなら何十時間も眠れるとか言ってたし、逆にハツタは朝早く起きないと気がすまない性格。やっぱ人それぞれなんだらうね。

そんな感じでベッドから体を起こす。仮想世界にフルダイブし続けている状況なのに、『寝た』と言い表してもいいかは微妙なところだけど、そこるところどうなんだろう？

まあ、いつか（思考放棄）。

今日は確かギルド内での用事はなかった筈なので、とりあえず中層にいるフレンドのところへ足を運ぼうと思う。攻略組ともなると時間的にも立場的にも下手に中層・下層への行き来ですら容易にできなくなるのが非常に不便だ。これがクロちゃんなら「あ——（察し）」みたいな感じで許されるんだらうけどさ。

寝間着の装備から普段の装備に変えながら、ついでにストレージの整理もする。

ついでにキチガイ共の行動を見てみると、どうやらギルドホームにはケムツソしかいないらしい。ハムタロは血盟騎士団の本拠地がある層で、クロちゃんがそれを高速で追ってる感じか。ハツタの『??』の場所は気にしないようにしよう。

さて、やることは終わった。

僕は非常に心優しいガイジだからケムツソにも挨拶してやろう。

「ハロー、人類代表諸君！ 清々しい朝の始まりだよ！ ほら、グッドモーニング——」

「うるせエ無職」

「——もぐもぐ。お、これはハムの朝ごはん………がっ!？」

仲良くハムタロが用意した対クロちゃん用ブルービートラップに引っかけり、先に麻痺が解除されたケムツソが立ち上がって、僕の中にも麻痺料理をねじ込んでいる姿を眺めながら察した。

今日は厄日のようだ。



「やつはろー、ポーション制作進んでる?」

「あ、ニートさん。予定よりも遅かったですけど、何かあったんですか?」

「ちよつと三時間くらい麻痺ってた」

「ホントに何があったんですか!？」

所変わって十一層。《月夜の黒猫団》のギルドホームへと邪魔した僕は、他ギルメンが素材集めに出払っている中、ギルドホームでポーション制作に勤んでいるサチちゃんへと軽い挨拶をする。

《天壤無窮》全員が何か一つ生産系スキルを取得しており、僕は《ポーション制作》のスキルを保有している。そのため、ハムタロとイキリト君経由で紹介された彼女と、こうして暇さえあればポーション制作に勤んでいるわけだ。

彼女の作るポーションは品質と効力が良く、攻略組では頻繁に目にするレベルで使用されている。そりゃ、僕達が腐るほどポーション素材を提供し、アインクラッド内で一番高いであろう《ポーション制作》の熟練度を持つ彼女が作る回復ポーションが、命懸けの前線で使われないはずがない。

そんなわけで先日ギルメンから回収したポーション素材をサチちゃんとトレードしながら雑談を始める。

「本当は自給自足してみたいんだけどさー。僕の熟練度じゃ前線で使うには回復量が少ないんだよね」

「やっぱり生産系をカンストさせるのは難しいんですか?」

「僕達は基本攻略がメインだから、どうしても生産系は趣味の範囲になっちゃうよ。ハムタロぐらいじゃないかな、生産系スキルカンストさせたのは」

サチちゃんは感心したように頷く。

まあ、遊んでる暇があったら熟練度上げろって話ですけどね。先日
の攻略組によるアイスホッケーを思い出しながら苦笑する。

「だからこそ、中下層の生産職の方々には頭が上がらないよ」

「私達には……それしかできませんから」

謙遜するサチちゃんは耳を真つ赤にした。それでも現在ポジションを作る手を止めないのだから、職人気質みたいな何かを見受けられる。

僕からしてみれば、このインクラッドで前線のために貢献しよう
と思うプレイヤーがどれだけいることやら。

ウチのギルマス曰く「後方支援なくば兵士は戦えん」。このゲーム
で例えるなら、鍛冶師・ポーション生産職・情報屋などが居ないと、迷
宮区の攻略すら儘ならなくなる。当たり前のことと言えばそうだが、
意外とそれを見落としがちなことが多い。

だからこそ、ハムタロは第十層以降から非戦闘員に仕事を斡旋し、
ハツタが商品の流通経路を確保した。その基盤が様になってきたの
がクォーターポイントの第二十五層前だったこともあり、僕達のギル
ドは攻略組の総指揮官みたいな扱いを受けているのだ。

今はインクラッド解放軍に一任しているが、下層の低レベルプレ
イヤーが下層でしかドロップしない素材を流し、中層の生産系スキル
持ちが商品を攻略組に流す構図を保っている。

「そう考えると、ハムタロさんって凄い方なんですね」

「いやー、ただ単に後から楽しめたかっただけさ。安全にアホなことす
るには、それ相応の準備が欠かせないからね」

「——あ、ニートさん。来てたんですか」

「お、ケイタ君。お邪魔してるよ」

そこで《月夜の黒猫団》のギルドマスターが帰還する。それなりの装備をしていることから、中層で狩りをしてきた帰りなのだろう。

聞いてもいないのにケイタ君は今回の収穫を僕とサチちゃんに説明してくれる。

「——を集めていたんですよ」

「……ああ、その鉱石は中層じゃないと手に入らないね。高値で取引されるもんじゃないから、攻略組も金策のために目をつけないし、割りと寡占状態なんじゃない？」

「いえいえ、最近の中層に上がってくる小規模ギルドが増えてきたので、比較的集まっている素材ですよ。下層から上がってきたばかりのパーティは、危なっかしいのも多いですけど」

昔の自分達みたいだね、とケイタ君は苦笑しながら肩をすくめる。別に彼等の成長を促す何かをしたわけじゃないけど、こうやって初心者パーティが成長していく姿は見ていて微笑ましいものがある。

武器になったプレイヤーの言葉の重みは違うなあ。

「あ、そうだ。話は変わるけど、サチちゃんに調合してほしいものがあるんだった」

「別に構いませんけど……何をでしようか？」

「《屑鉄》と《サラマンダーの種火》と《自爆兎の火薬》。この前やったクエストで行った民家にあった調合書にあったレシピなんだよね。すっごい気になる」

「物凄く嫌な予感がするのですが」

え、気にならない？

このレシピを見た感じ、ボス攻略がもつと面白くなる予感がするんだけど。

「えっと、ひとまず調合してみますね……」

サチちゃんはトレードで送られてきた素材を、手慣れたように調合のページを開いて新しい物を作る。部外者とギルドマスターが見守る中、調合師の手に虹色の光が集まる。

そして、それは出来上がった。

「……なんかノーベルさんの気持ちができるような気がします」

「何ができた？」

「《悪魔の劇薬》……つまり爆弾ですね」

「Foooooooooooooooooooo!! チョケプリイイイイイイイイイイイイ！」

アインクラッドのノーベルとなったサチちゃんの作ったものの正体に、僕は我を忘れてエイサイハラマスコイ躍りを披露する。

後で威力検証をするのは当然のこと、場合によっては迷宮区のボス攻略がぐつと楽になる可能性がある。素晴らしいダイナマイトを創造してくれたサチちゃんにマジ感謝。

「で、でも！ ボムラビット 自爆兔ってレアなモンスターですよ？ 量産は難しいのでは？」

ケイタ君の言葉にも一理ある。

何故かは知らないけど、アインクラッドで兎系統のモンスターは中々お目にかからない、非常に稀少なモンスターとなっている。そのため、この爆弾は量産できない

「というわけで、量産よろしくねサチちゃん。はい、コルと素材」

「どうして会うのも困難な兎のレアドロップを数千単位で所有してるんですかっ!?!」

「あはは、武器強化に失敗したことがない僕のリアルラックをなめないで欲しいね。むしろ最近は兎しか見てない」

「アインクラッド終了のお知らせ」

ケイタ君が真っ白になっている横で、狂ったように爆弾を量産していくサチちゃんはマジで狂気だった

キチガイ共の日常 ロリコン編

紳士たる私の朝は早い。

とは言っても日が昇る頃に目が覚めるため、全国の社畜の皆様よりは起きるのは遅いと思われる。現実世界に戻っても、仮想世界よりも厳しい現実が待っていることを考えると、果たしてSAOをクリアすることが幸せなのだろうかと考えることがある。

まあ、そのようなことを考えられる暇があるくらいには、死なないように生きよう。

個室から出てリビングへ赴くと、一足早く起きているギルドマスターが目に入る。作り置きしようとしているのだろうが、休日にまで精を出すとはご苦労なことだ。

私は黒髪の少年の元へと向かう。

「おはようございます、相変わらず胃袋を刺激してくる料理を作りますね」

「うつつ、ハッタ。休日なのに今日も商業地区に遠足か？ それとも新しいロリでも探す旅にも出るんか？」

「両方ですね（即答）」

「いつも通りで逆に安心したわ」

こちらを見ずにロリコン扱いするハムタロに、私は少しばかりの不満を感じる。私は幼き少女を一人前の女性として認識しているだけであって、ロリータコンプレックスではないのだ。……あ、ロリコンか。

自問自答で自分自身がロリコンの典型的な思考に陥っていることに驚く。

はたして私はいつからロリコンになってしまったのか？

「……？ 何か異物混入しませんでしたか？」

「さっすが性犯罪者。普通目視で認識できる速度じゃないんだが、麻痺付与した」

「性犯罪者ではありません」

体型が幼き女性を守護するために鍛え上げられた反射速度が生き

たのか、ハムタロの指の動きをкаろうじで認識することができた。恐らく対クロ用最終兵器リーサルウェポンの、大型モンスターすら一日は動けなくする麻痺デバフを付与したのだろう。そんなので止められるのなら苦労しないのに。

私は麻痺の入っていない料理を食しながら、今回のハムタロの失敗を先に憐れむのだった。



第五十層の主街区。

迷路のように入り組んだ街なため、ベテランプレイヤーや住人ですら迷うとも言われる場所。イキリト君も街の全貌を把握していないという。私は一度歩けば感覚で全貌を脳内に展開できますが。

転移してきた私は足を止めることなく最短ルートで目的の場所へと向かう。そして、とある店の前で止まり、何の迷いもなく開けるのだった。

「——失礼いたします」

「失礼するなら帰ってー」

「あいよー」

「……おいおい、本当に帰ろうとするな。お前本当にノリがいいな」

店に入る時の常套句に、猫の髭のようなペイントを頬につけた少女がニヤニヤ笑いながら新喜劇の如く返し、例にならって私も店を出ようとした。スキンヘッドの男性に止められたが。

猫髭の少女——アルゴ嬢は口だけの謝罪を述べる。

「悪かったって。コイツ等はいつもノリだけはいいからナ」

「そのノリでヒースクリフが熱湯風呂に突き落とされた件を忘れたんじゃないだろうな？ 本人が楽しんでたから蒸し返す気はないが」

「ああ、例の祭りですね。その苦情はクロに言っして下さい」

アレに苦言を言っても仕方ないだろう？と肩を落とす店の店主——エギル氏。ヒースクリフ氏の雄姿により、彼の店の売り上げが伸びたのだから、エギル氏も同罪だ。

企画した上にイキリト君も熱湯風呂に叩き込むよう指示したのは私だが、まさかヒースクリフ氏がノツてくれるとは思わなかった。最前線でもトップクラスの實力を誇る《血盟騎士団》の団長は、圧倒的な強さとユーモアも持ち合わせているからこそ、ギルドメンバーの士気を高めているのだろう。

ぼっちの黒の剣士にも見習ってほしい。

「……まあ、いい。で、今日は何の用で来た？」

「ある程度予想はしているはずでしょう？　これが我等がギルドの寄付金と依頼内容です」

「お前が来る理由なんざそれだけなのは長い付き合いで理解してるさ。だか形式上の確認は必要だろう？　対等なビジネスパートナーなら尚更だ」

エギル氏にトレードを申し込み、先月頼んだ上層攻略に必要なアイテムと、今月中下層への寄付金を交換する。そして今月必要な物資の依頼を申し込む。

その内容に目を通し始めたエギル氏は、特に変なモノはないことを確認して頷く。

「攻略組は中層の物資が頻繁に必要なようになってくるんだが、最近は下層の依頼が減っていてな。《風林火山》ぐらいしか斡旋してくれねえんだよ」

「解放軍もできるだけ依頼を作ろうとはしてくれてるんだがな。ここまで攻略が進むと下層の素材は需要がなくなっちゃまうんだ」

「悲しいことですがM M O R P Gの定めというやつですね。この依頼もハムタロの料理で使う素材ですから」

「趣味スキル取る奴が少ないご時世だもんな」

下層の素材がゲームが進むにつれて必要なくなるのはM M O R P Gだと珍しいことではない。ポーション類ですら、上層で手に入る素材で下層の素材を使ったモノよりも高品質なポーション類が生まれるため、それこそ《料理》スキル持ちぐらいしか下層の素材を使わない。

中層のプレイヤーが下層の素材を欲しがることも多々あるが、『工

ギル氏が斡旋したクエスト』という信頼があるためか、ハムタロの依頼は下層のプレイヤーに人気が高い。

解放軍も頑張ってくれているようだが、どうも治安維持だけでも厳しいというのが本音なのだろう。

定期的に行われる祭りや催しに加え、これも上層と中下層のプレイヤーとの亀裂を生まないための根回しなのだが、あまりにも長期化すると抑えが効かなくなる可能性も出てくる。

私はハムタロの使用する素材の個数を確認しながらため息をつく。

「これ以上の戦線拡大は避けるべきなのは、戦略的にも当然のことなのですが……」

「その戦線拡大つてのをしなきゃ、現実世界に帰れないだろうが」

「……早急にゲームクリアを目指すのがベスト、ですね。まだ攻略も折り返したばかりですけど」

加えて、私達プレイヤーの数は増えることはないが減ることはある。新規参入のないMMOなんて廃れる以外の未来はない。

この消耗戦に近い無益な戦いを楽しむことは、長期的に見れば非常に厳しい。それをハムタロも理解してるだろう。

思わず失言がこぼれてしまうのも無理はないだろう。そして、それを情報屋が聞き逃すはずがない。

「せめて《老人会》の面々が居てくれれば……」

「それってキー坊の言ってた、ハツタの住んでた町の高齢者のことか？ 確か田ノ浦がどうのこうのいつてたような気が……」

「ああ、《町内四天王》とは別の派閥ですよ？」

「町内に派閥があること自体が驚きなんだが」

エギル氏が呆れたように肩をすくめ、アルゴ嬢も表情を引きつらせている。

さて、《老人会》の説明なのだが……。

「そうですねえ……各国の特殊部隊顔負けの陸戦部隊としか説明のしようが」

「その冗談笑えばいいのか？」

「そんなレベルの化物と住んでなきゃクロみたいなキチガイは誕生し

「ませんが？」

不思議と自分で言っておきながら説得力のある言葉に、エギル氏は二の句が継げない。むしろアルゴ嬢にいつては「なるほど、そういうことか」と納得までしていた。

「とにかく老若男女自由な方が多いんですよ、私達の故郷は。陸海空全てを押さえた地形や、放任主義が基本でしたので、やろうと思えば何でもできたってのが答えですね。お陰様で私達のような品行方正な人間が育つわけです」

「今世紀最大の嘘を吐くな」

バツサリ斬り捨ててきたスキンヘッドは置いといて、私は人差し指を口元に当てて悪戯っぽく微笑む。

「ああ、《老人会》云々のことは御内密に。あんまり広められると怒られてしまいます」

「ん〜？ それなら渡す物があるんじゃないか〜？」

親指と人差し指で円形を作る少女に、私は別種の笑みを浮かべる。

「こちらが何も対策してないとても？」

「ちなみに他人にゲロったら相応の罰は受けてもらいますよ？」

「例えば？」

「アルゴ嬢は体型的に見れば私の守備範囲内です」

「墓穴まで持ってくわ」

恐らく声色からして今の口調が彼女の素だったのだろう。

キチガイ共の日常 神話生物編

私は一人だった。

よく分からないけど、私は頭がおかしいらしい。

ニホンジンは異物を徹底的に排除する生き物らしいから、私は何処に行っても常に一人だった。知り合いもいなかった。友達もいなかった。兄弟姉妹もいなかった。両親もいなかった。

ずっとずっと、一人だった。

『いやー、便所飯する奴ってのは本当に居たんだな。何が凄かって、男子トイレで女子が飯食う姿を見るとは思わなかったわ』

——××に会うまでは。

出会ったことを今の××は「あの時の俺は気が狂ってた。関わったのが運の尽きだった」と言ってたけど、私にとっては××と会った20××年5月14日午後12時28分34秒から、私の時間は始まった。

『テメエ本物のキチガイ連れてくんじゃねエよ。これ以上増えたら常識人のオレがキチガイに染まるじゃねエか』

『有史以来最大の嘘乙。それにしても……また個性的な娘を連れてきたねえ』

『……ふむ。ロリ巨乳という希少種であるにも関わらず、どうしてこゝうも心動かされないのでしょうか？ 実に興味深い』

友達というものを持ったことがないから分からないけど、私と会話してくれる人も少し増えた。

『どおとおおおしてこうなったあああああああ!? 逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろおおおおお!!』

『はっはっはー、……あ、ちよつとヤバいわコレ。洒落になんないわ』
『このキチガイ金髪娘が変なことしなきゃなア！ 晩飯まで待てって』

言ったじやねエか！」

『なるほど、死ならば諸共つて訳ですか？　これ素直に投降——したら死にますね確実に』

でも、世間一般では『キチガイ』とは端的に状態が著しく常軌を逸した狂人のことで、いい意味で使われることは限りなく少ない。×達×に会ってからというものの、『キチガイ』と言われることは多くなつた。中でも私は本物の狂人らしい。

×けれども——私は『キチガイ』と呼ばれることを誇らしく思う。

×が私に居場所を与えてくれた。

×のお陰で私は一人じゃなくなった。

×が——私を私にしてくれた。

×物覚えは前から人よりも悪いし、純粋なニホンジンでもないし、感情を上手く表に出すことが出来ないし、身体は最初から切り傷や打撲の痕でボロボロだし、お金もそんなに持ってない私。

×と会う前のことは思い出せないけど、どこの国のハーフかも知らないけど、いつ誰かに切られたり殴られたりしたのか見当もつかないけど——前に×が何で泣きながら私を抱きしめてくれたのか今でも分からないけど。分からないことだらけの私だけ。

『アスゲームつっわけかあ。参ったな、こりや』

×そんな何も役に立たない私は、××についていく。

×『私』が『私』であるために。



「とうとうインクラッド解放軍もリタイアしたかあ。それしか方法がないのは分かるけど……こりや次の層の作戦案を考え直さなきゃアカンわ」

「攻略組最前線指揮官様は大変だなあ」

『「大変だなあ」の言葉で済ませられる立場の黒の剣士様は気楽でいいな、オイ。羨ましいなら代わってやろうか？ ん?」

血盟騎士団本部がある第39層の主街区。何もないクソ田舎のよ
うな街並みが特徴の人気のない場所。

マスター会議? っつのが終わった私達は、食欲を満たすために古ぼ
けた食堂のような場所に入った。

「あれを……こうして……ええと……あのギルドにも根回しを……ア
イテム分配は……人員配置……」

イキリトと雑談しながらも、各ギルドから渡された資料と、攻略層
のクエストから得られるボスの情報を照らし合わせながら、次の層を
攻略するための作戦案を考える××……ハムタロ。

やっぱりゲームの名前は慣れない。

「——次の層はこの陣形で行ってみつか? 血盟騎士団副団長様的に
どう思う?」

「いつもとは違う配置ね。どちらかというところクォーターポイントのボ
ス攻略編成に似てるし……今回のボスが他の層のボスよりも二回り
くらい大きいって情報があるから?」

「アスナ、その紙見せてくれ。——タンクの比率がやや多いな。まあ、
ヒースクリフを起点としたタンク編成ってことは、今回のボスは火力
が高いって見積もってるのか?」

イキリトから紙を見せてもらったが何書いてんのかさっぱり分か
らない。

日本語でおk?

「ちゃんと推測が間違っていたときの作戦計画も複数用意してあるみ
たいだし、これで大丈夫じゃないかしら。私は特に言うことはないか
な」

「アスナさんのお墨付きって箔もついた上で……おっしや、次はこれ
で行くぞ覚悟しとけよ黒の剣士」

「……でも次善の案は個々の能力頼りが否めないなあ」

「歴戦の攻略組様だぞ? 『臨機応変に柔軟な対応を』 っつてワケだ」

「要するに『行きあたりばったり』ってコトか？」

「現段階の情報を頼りに最善の策を提出したんだ。そんな無粋な言葉でまとめられるのは遺憾の意砲発射案件だぞ？ 別に偵察隊の情報が出てからいくらでも路線変更すりゃいいし」

これでいいだろ、と机に置かれた作戦案を軽くノックするように叩くハムタロ。

アスナもイキリトも真剣な顔で頷く。

私には分かんないけど。どうせ私の頭では理解できないから、難しいことはハムタロに任せる。

「で、ご丁寧に48人の位置まで指定してるが、肝心な俺のポジションはどこなんだ？ ……出来ればラストアタック狙える位置だと有り難いんですがねハムタロサアン」

「え、全部だが？」

「いや、ラストアタックは取れそうだけでも」

違う、そうじゃない。

イキリトが顔を引きつらせる。

何てワガママなんだらう。

「えー、でもキリトならボスソロ出来そうな気がすんだよなあ」

「あ、私もそう思う。どこかの世界線では迷宮区のボスを二刀流で倒したりして」

「ハハハ、そんなキチガイじみた命知らずの行動を、俺がするわけないじゃん。ユニークスキルにも限度があるさ」

なんかイキリトなら仲間を守る！とかアホな理由で『スターバーストストリーム』とか叫びながら七十四層のボスを倒しそうな気がするが、まあ、気のせいだろう。

馬鹿な私でも迷宮区のボスを一人で倒したりしない。

面倒だから。

「もししたら俺は許さんけどな」

「……もししたら？」

「ピナを焼いて食わせる」

「ピナアアアアア!!」

私の言葉にイキリトが金切り声をあげる。

……ピナは美味しいのだろうか？

「キリト君、ピナはいいとして、それを見てシリカちゃんが泣いたら、ハツタさんに切り刻まれるよ？」

「社会的にも物理的にも俺死ぬじゃん！」

ハムタロなら美味しく料理してくれることだろう。

塩焼き？ 煮付け？ カレーに肉の代わりに入れてもいい。

「んなアホな話は置いといて。クロもコレに異存はないな？」

「……竜田揚げ？」

「お前ん中でピナ調理確定なのは分かったが、それハツタの前で言うてみ？ この作戦案に異議はねえのかって聞いてんだよ」

「馬鹿だから分かんない」

「なるほどな。馬鹿なら仕方ないな」

自分で言うのはいいが、他人に言われると腹が立つ。

とりあえず最後の台詞を吐いたイキリトの後頭部をつかんで、テールに頭ごと渾身の一撃を叩き込んだ。前にアスナが町のものは破壊できないって言ってたから、安心して全力を出せる。

でも机が壊れた。あれ？

「……壊せるんだ、それ」

「相当量の筋力値が必要なんかね」

「その相当の筋力値で机ぶっ壊れるレベルで床とキスした俺の心配は？」

鼻血出てるけどHP減ってないからへーきへーき。

「それがご褒美だつて言う人もいるから、キリトもソツチ側の人間なのかと」

「え、ホント？」

「アスナっ、ちよ、やめ——」

イキリトがまた床とテールキスしてるけど今日も平和。

第五十二層ボス討伐戦

縛りプレイ。

本来使えるシステムをあえて使わずに物事を進めていくドMの諸行で、ゲームだと『○○を使わずにゲームクリア』とか『××禁止』など、ゲームの難易度を上げるために使われることが多い。

ある意味で『ソードアートオンライン』も『死んではいけない』という縛りプレイと呼べるだろう。あまりにもリスクが大きすぎるが、そう考えれば……こう……何というか、ゲーマーとして胸が熱くなる。加えて、んなことを考えてる時点で俺もキチガイ共に毒されてきたと思うと悲しくなるな。

なぜ今頃こんな話を持ち出したのか。

それは例のアイツ等が「今回は縛りプレイすつから」と明言してきたからだ。

「アイツ等なに考えてんだ……？」

「何を今更」

迷宮区のボスの間で待っている他プレイヤーを眺めながら、俺の発言に対して、隣に居たエギルが適当に答えを返す。でも、よくよく考えてみたら最適解と思えるような返しだったことに気づく。

その証拠に、縛りプレイ発言をボス攻略会議で聞いた攻略組からは、特に反論はなかった。

下手すれば死人が出る迷宮区のボス攻略戦で、なぜキチガイ共が自由に行動できるのか。それは、作戦立案者のハムタロに対する絶対的とも言える信頼があるからだ。

何層からハムタロが指揮するようになったかは覚えていないが、アイツの計画の綿密さは攻略組の年長者を始め、あのヒースクリフですら一目置くほどとも言われている。実際に今までのボス攻略戦での死亡者は全体で5人。それも死亡理由が本人の油断やミスによるものなので、キチガイマスターが致命的な失敗を犯したことが一度としてない。

神話生物のクロ、変態紳士のハツタ、行動系キチガイのケムツソヤ

便乗系キチガイのニートに埋もれているものの、あれの頭ん中も十分に変態だろう。

「おーっす、お待たせー」

「やっとか。時間通りってのは珍……しい……な……？」

いつも時間の十分前には来るはずのキチガイ集団が来たわけで、それをからかってやろうと振り向いて——絶句した。

誰一人として欠けている訳でもなく、全員がいつものように揃っている。それはいい。

問題なのは——全員が黒を基調とした装備で整え、背中に二本の剣を装備していることだろうか。特にクロ以外の四人は黒いコートに指ぬきグローブ、黒いズボンと、既視感のありすぎる装備で身を固めていたのだった。

俺の呆然とした表情に満足したのか、キチガイ集団はドヤ顔で口を開いた。

「ニ「俺はキリトだ（キリッ）」」

「おーしお前等全員並べシバき倒したるわ」

なぜか俺の二本の剣が血を求めているため、ひとまず目の前に居るアホ共を二枚に下ろそうとしたところで、通りがかったアスナに羽交い締めされる。

「どうかアスナの力強くないか？」

体がびくとも動かん。

「これ揃えるの大変だったぜ？ なんせ黒いコートに指ぬきグローブなんて厨二臭い珍しい装備を扱ってる店がなかったもんでな」

「厨二臭いっつったよな？ 今厨二臭いっつったよな？」

「幻聴だろ。そうじゃなきゃ無意識に心当たりでもあるんじゃないか？」

俺の追及をのらりくらりと回避するハムタロ。

コイツ真顔で嘘つく上に見破りにくいから、俺は本当に信じるが多々ある。そもそもコイツに言い合いで勝てた試しがない。

「それとニート、その眼帯なんだ？」

白い髪と対比した黒いコートを完璧に着こなしているニートに僅

かの羨望を覚えながらも、目を怪我しているわけでもないのに右目を隠す黒い眼帯について尋ねてみる。

「ほら、キリト君って厨二病でしょ」

「疑問符もつけずにストレートに言い切ったな」

「そして厨二病と言えば眼帯でしょ」

「その偏見どうかと思うぞ」

「だから眼帯をつけてみた」

「三段論法にすらならないガバガバ理論が原因か」

「……ところでニートの眼帯はどこで買ったのだろうか？」

後で聞いてみよう。

そして、なんか黒いコートをスマートに着こなしているハツタとケムツソは置いといて、いつもの装備を黒くしただけのクロに声をかける。

基本的にクロは善し悪し関係なくハムタロと同じような行動をするイメージがある。だから普段と似たような装備に関して聞いてみると、

「？ 私もちやんとイキリトの装備してる」

「……はい？」

「黒い装備してる。だからイキリト」

「おい、クロ。テメエの言いたいことは理解できたが、それをオレに向かって言うんじゃないよ」

どうやら神話生物にとって俺の特徴は「黒色」だけらしい。その事実を裏づけるように、ケムツソのことを俺だと思って話していたようだ。色彩で判別していたことに言葉を失う俺。

他人事ながらコイツ本当に大丈夫だろうか？

物凄く心配になってきた。



キチガイ集団と言えども攻略組のプレイヤーだ。ましてやケムツ

ソの柔軟なヘイト管理、ニートのユニークスキルによる単体火力、ハツタの弱点を的確に突くスキル回し、力こそ正義と言わんばかりのクロのタンクは重要なソースとなっている。

あの連中を擁護するつもりは一ミクロもないが、何が言いたいかというと――

「……チツ、ヘイト取れねエ」

「取れるわけないじゃーん。スキル縛って火力気にするとか脳ミソお花畑かな？」

「やはり二刀流は慣れませんなあ」

アホ三人が毛ほども役に立たないってことだ。

むしろスキル縛ってヘイト取ってるクロがおかしいんだ。なんだあの理不尽の塊。

そんなクロにも回復は必要。

いつもならケムツソが管理してくれるヘイト。

つまり――

「タスケテクダサイツ、ハムタロサアン！　ハムタロサアン!？」

「きりと君に構っている暇はないのだ。ここがきりと君の墓場なのだ」

「いやほんとマジで助けてお願いしますから今掠ったんだけど刃掠ったんだけどお!？」

いくらユニークスキルを持っている上に、《二刀流》の本質が防御面であったとしても、俺は神話生物のように一人で長時間タゲを取るなどできない。なので、刺繍糸並の命綱を渡りながら繰り広げられる俺とボスの攻防戦と、それを笑いながらペチペチ二本の剣でダメージを与え続けているキチガイ集団。

STR、AGI、VITに均等に振り分けてる俺のステータスから分かる通り、俺はタンクするようなプレイヤーじゃないんだが。

ん？　ヒースクリフや他のタンクはどうしたかって？　そこでU NOしてるが？

そんなこんなでボスと鏖迫り合いを繰り返していると、《豪気》の異名を持つアスナさんが明るい声をかけてくる。

「ウノ！ キリト君！ もう少しで上がれそうだよ！」

「そうかそうか！ その勢いで早く俺を助けてくれアカンこれ死にそう——」

「アスナ君、君の番だぞ。ツードローを持ってなければ十二枚ドローになるが？」

「……十二枚引きまーす」

「ヒースクリフてめえええええええええええ!!」

最大の敵は味方だということを改めて認識するソロ専プレイヤーの俺。

それはそれとして、俺のHPゲージがレッドになりそうなんだけど？

「待って！ 話せばわかる！ 話せばわかるから！（熱い命乞い）」

「ボスモンスターに対話を求める黒の剣士の図」

モンスターにAIがあるのだから、平和的な解決があるはず。

……このゲームにはタイムシステムがあるのだから、もしかしたらSAOのモンスターと共存することが出来るかもしれない。

可能性は限りなく少ないだろう。だが、俺はそれに賭ける……！

「あ、ボスにスタンデバフ入ったで」

「死ねえやああああああああ！（形勢逆転）」

「熱い掌返しを見た」

モンスターに感情なんてあるわけがないだろ常識的に考えて。

シルバニアファミリー水車のある大きなお店

四十八層と言えば街の至る所に水車が回っている、のどかな田舎町で有名だ。そこまで苦戦したり面倒なモンスターも少なく、主街区を歩き回るだけでも結構楽しめる階層だと認識している。イキリト君と一緒に街巡りした時は面白かった。

迷宮区のボスが数千のゴキブリを召喚するタイプだったことを除いて、比較的素晴らしい階層だろう。

あれは事前に知ってても阿鼻叫喚だった。

そんな田舎町を害虫と神話生物を引き連れて歩いていた俺は、そこかしこにありそうな水車のある家の一つへと向かう。

四十八層以来のケムツソは言葉に不信を込めながら目前にある店を眺めた。

「ここがテメエの言ってた、マスターミスとかいう野郎の居る店かア？ 見てくれは普通にいい家だが……ここが武器屋とか何の冗談だよ」

「お前の顔面の方が冗談きついで。あと野郎じゃなくて女性な。ハツタの守備範囲外の」

「——人妻か？」

「何なん？ お前等の女性像って幼いか既婚者かの二択なわけ？」

『ハツタの守備範囲外』という単語を聞いた瞬間に、ケムツソが劇画タッチ風の顔で聞いてきた。一瞬コイツ誰だよって本気で思ったわ。この人妻ニアめ。

この茶番の間、暇しているクロは「水車を物理で止められるのか？」を頑張って検証している。……うん、水車の回転を片手で止めてるわ。

「それ以外に何があんだよ」

「いやいや、普通に女の子居るだろ。血盟騎士団のアスナさんとか、昨日ライブしてたユナさんとか、ポーシヨン作ってくれるサチちゃんとか」

「アスナは神話生物、ユナはノーチラスの嫁だから実質人妻、サチって

誰？」

……そういや黒猫のメンバーはケムツソに対してトラウマあるんだっけ？ だからコイツは覚えてないのか。未だにケムツソのプレイヤーネームを出す度にサチちゃんが気絶するんだが。

ユナさんに聞いている——人妻と認識しても大丈夫なのだろうか？ 確かにユナさんとノーチラス君の煮え切らない互いの距離に痺れを切らした《天壤無窮》により、半強制的なゲーム内結婚式を開催させてもらったので、事実上彼等は夫婦だ。

アスナさんは知らん。苦情はクロに言え。
人妻スターと脳筋は置いといて、俺は扉をノックして店の中に入る。

小綺麗な店内の壁やショーケースに武器、防具を着たマネキンなどが並べられ、奥に同世代くらいの可憐な少女と黒いのが何やら話しているようだった。取り込み中だったので一瞬だけ入るのを躊躇したが、彼女が話し込んでいる厨二病患者を脳が認識したことにより、「あ、コイツならいつか」と遠慮なく入る。

少女は客の来店を笑顔で迎える。

「いらっしやいませー！ リズベット武具店へようこ——あー、また来たの？」

「おいおい……前は仕入れだったけど、今回はれっきとした顧客だったの」

少女は客が俺だと分かった途端、営業スマイルを引っ込めて怪訝な顔をする。鍛冶スキルMAXの店長——リズベットさんとは、ハツタ経由の業務提携的な繋がりを持っているので、かなり砕けた挨拶を交わす。

客だ何だ言っても本心はそんなこと気にしてない俺は、先客だった黒いの——イキリキリキリキリト君に視線を移した。

「お前も常連？」

「いや、初めてだ。アスナに紹介されてな……」

「……ああ、例の件か。確かにリズベットさんなら適任か」

キリトが前々から悩んでいたことを事前に知っている俺は、解決方

法はマスタースミスたる彼女が相応しいと思ひ至る。アスナさんも行動がクロに似てきただけで、それ以外はコミュニケーションの取れる社交的な人物だもんな。リズベットさんと知り合いでも不思議じゃない。

「実績もあるし鍛冶スキルも申し分ない。俺達を提供してきた素材もあるからキリトの注文にも応えられるだろう。おまけに美人で可愛い。ついでに、クロをけしかければ割引もしてくれる。彼女以上の鍛冶師はS A O内には存在しないだろうよ」

「アンタさらつと怖いこと言わないでよ……」

「クロはクローポン券か何かか?」

冗談だったのに二人に本気に受け止められた。

んなことエギルさんにしかしらないっての。

ここで《天壤無窮》のキチガイ二人が入店してくる。

先に言っておくが、リズベットさんとクロは割と仲が良い。マスタースミスとしては庇護欲がくすぐられるらしく、クロの方もリズベットさんを認識できるらしい。十中八九色彩で判断してる。

「リズ、久しぶり」

「クロちゃんいらっしやい」

「ほう、テメエがマスタースミスのリズベットか。あ、それと外の水車壊したわ。オレじゃなくてクロが」

「は?」

クローバー容疑者は「ドラゴンボールがあれば何とかしてくれる」と供述しており、「んなもんあんならゲーム脱出しとるわ」とリズベット被害者は血の涙を流したという。これでブチ切れない辺り、よほど器が大きいのか、マスタースミスとして水車を直す金をはした金に見えるくらい稼いでいるのか、はたまた俺達キチガイの行動に諦めがついているのか。

どちらにせよ水車の修理代はギルドで負担しよう。

名ばかりの《天壤無窮》会計担当が悲鳴を上げるだろうよ。

「そんで、キリトは何探してんだ?」

「《エリユシデータ》って片手剣があるじゃん? それをやつと装備で

きるようになったんだけどさ、なんか《二刀流》で装備すると弱くなるんだよ。おそらく二本の片手剣の平均値が攻撃力になるからだと思っただが……」

「片方の剣だけ強いとダメだと。そう考えるとユニークスキルつても面倒臭エモンだなア」

かと言ってクォーターポイントのボスからドロップした魔剣クラスの片手剣と同等の攻撃力を持つ武器となると簡単に見つかるとは思えない。剣マニアのニートなら一本くらい持ってそうな気がするが、アイツが素直にレア武器を渡すとは思えんしなあ。

加えてキリトが要求するのは攻撃力と重さ。

「でもねえ、めちやくちや重い剣なんてこれくらいよ?」

そう彼女が見せてきたのは、カウンターに置かれている片手剣。

一見普通の片手剣に見える。

「めちやくちや重い、って位がちょうどいいんだよ。重くないと『速さ』に特化した《二刀流》じゃ火力が出ないからな。少し持ってみてもいいか?」

許可を得たキリトがカウンターに置いてある剣を持ち上――

「持ち上がらないんだけど」

全体重を乗せるように引っ張るが、カウンターに置かれてる武器はビクとも動かない。

攻略組でもトップクラスのプレイヤーかつ《エリユシデータ》を装

備できる《イキリト》のキリトが持ち上げることすらできない片手剣とは。

まさか勇者にしか抜けない伝説の武器とかじゃねーだろうな？

「待って待って待って、いやこれマジで持ち上がらないんだけど。え、ちよ、これ要求値見えていい？——こんなの誰が装備できるんだよっつっつ?!?!?!」

確認したキリトは頭を押さえて蹲る。

俺も横目で確認したが、知己で装備できそうな人物がクロしか思い浮かばないんだが。むしろリズベットさんがカウンターまで運んだ方法が知りたい。

「やっぱり？ それ元々は細剣をベースに作ろうとして、アスナの『リズが作れる可能な限り重い両手剣にしてくれない?』っていう路線変更から生まれた負の遺産」

「あのゴリラにしか装備できない武器なんて持てるわけないだろっ!?!」

この後なんやかんやでキリトは、俺達がこの前クエストで入手してリズベットさんに流した素材を使って、新しい片手剣《ダークリパルサー》を即席で作ってもらったわけだが——それ以降二週間くらいキリトとアスナさんは音信不通&行方不明になったとか。

ソードマスターキリトく誤植編く

迷宮区にも『安全エリア』というものが存在し、よほどのアホでもない限り、迷宮区探索をするプレイヤーはここで休息を取る。確かに見張り役を交代しながら休息を挟んだこともあったが、せっかくの安全地帯を利用しない手はない。

休憩所には俺達しかいないらしく、『天壤無窮』のギルドメンバーは休憩スペースを広々と使いながら、昼飯を囲んで食した。

そして、迷宮区のマップ埋めとモブから得られる経験値やドロップをメモにまとめている俺をよそに、他の四人はトランプをしながら時間を潰している。情報量が多い上に、これを他ギルドに提出するため書類でもあるため、まだまだ時間はかかるだろう。

「これは僕が勝ち申したわー。ゴリラハンドプリキュアだわー」

「ハア？ テメエに勝たせるわけねエだろうがよオ。おい、ハツタ、コイツ最優先で潰すぞ」

「はいはい、分かりましたから、スペードの3を持つてる人は誰ですか？」

「ハートの3ならある」

のんきに大富豪してんじやねえよ。

つかゴリラハンドプリキュアって何なんだよ。語呂が良過ぎるだろ。

ニートが同じ数字のカード4枚を使って行う革命を起こして、クロがそれに革命返しをして、マイペースクス野郎が発狂した。そんな惨事をBGMに筆を進めていると、どこからか発せられた大きな雄叫びが迷宮区にこだました。

俺は上を見た後に周囲を見渡す。

「……アスナ？」

「うっそだろ、とうとう人間辞めたのか」

クロの呟きに不思議な力があるように、俺は何故か納得してしまった。

そもそも十分ありうる話だから普通に信じるわ。

年頃の女の子に大変失礼な話をしていると、安全エリアから猛ダツシュで飛び込もうとしている二つの影があった。一人は血盟騎士団副団長のアスナさん、もう一人は《イキリト》の異名を持つキリト君だ。どちらかというアスナさんがキリトの襟首掴んで引きずつてる感じだな。

その光景を見てクロ以外の《天壤無窮》メンバーはビクツと肩を震わせる。

一瞬俺達の馬鹿話を聞かれたと思ったからだ。

「——あ、クロちゃん。こんなところでどうしたの？」

「迷宮区で遊んでいた。アスナはペットのお散歩？」

HPは減ってないけど引きずられてボロボロになったキリトを横目に、彼女達が迷宮区で猛ダツシュしてきた理由を聞く。とうとう攻略組火力最強をペット呼ばわりか。

キリトが偶然見つけたラグー・ラビットだからレスキュー・ラビットだか知らんS級レア食材をアスナさんが料理して——アスナさん料理できたのか。アスナさんが半強制的にキリトをパーティに誘って迷宮区に行くこととなり、迷宮区のボス部屋まで行って帰ってきた、と。

途中で話の断片で出てきた《クラデイル》という名前にハツタが反応した。

「……ああ、そういうえば彼は《血盟騎士団》に所属してましたね」

「彼のこと知ってるの？」

「ええ、SAORロリコン同盟の副会長《鉄血》のクラデイルは有名ですからね」

アスナさんの問いにハツタが答える。

どうも元・ラフ☆コフのメンバーだったらしいのだが、ハツタの洗脳汚染によつてロリコンに目覚めたらしく、今ではSAOでも《アイクラッド解放軍》以上の規模を誇る《SAORロリコン同盟》に所属しているらしい。この犯罪者予備軍集団はギルドではなく、有志の集まりだとか何とか。クツソどうでもいい。

ちなみに会長は目の前の変態紳士。

「んで、七十四層のボスは《The Gleam Eyes》……羊の頭をしていた二足歩行の悪魔型モンスター、と。攻撃パターンは？

武器種は？ 取り巻きの特徴は？」

「見て逃げてきたから分からない」

「チキン野郎かよ、胎児からやり直してこい」

「《二刀流》の餌食にしたるわ」

「ユニークスキルでしかマウント取れんのか？」

HHHAHAと笑い合ってお互いの得物をぶつけ合う黒髪二人を、生暖かい視線で見つめるクロ以外の面子。何回か片手剣と短剣が火花を散らしていると、迷宮区の入り口側の通路から複数の足音が聞こえた。おそらく人数的に六人だと推測する。

さすがに安全エリアでPVPする姿を見られるわけにはいかない
ので、即座に武装解除した馬鹿キリトと俺二人だが、その六人集団の戦闘を歩く
人物を目にして――

「――よおーつす、キリの字とハムタロサアンじゃねえか」

「……………」

「コラっ、いくら見られても大丈夫だからって再戦しないのっ」

別に喧嘩してるところを見られても平気なプレイヤーだったので俺とキリトは再度得物を構え合って、それを血盟騎士団副団長様に喧嘩両成敗される。詳しく描写するなら、アホ二人の頭を軽くたたいただけだ。

衝撃波を生み、光の速さで頭が地面にめり込んだが。

「お、前回の迷宮区のボス攻略以来のクラインサアンじゃーん。元気してた？」

「その総指揮官と同じような呼び方やめてくんねえか？ 同類だと思われちゃうじゃねえか。……ああ、お前等が情報を提供してくれてるおかげで生き永らえてるよ」

ニートがケラケラ笑いながらクラインの兄貴に絡み、それをジト目で対応する《風林火山》のギルドマスター。侍みたいな服装をした《風林火山》は基本的に迷宮区のボス戦ではスタメンを誇る上に、多方面にパイプを持つので、ハツタを筆頭に《天壤無窮》も公私で深いつな

がりを持つ。

中下層のプレイヤーにも援助をすすんで行い、プレイヤースキルも豊富、ちゃんと俺の指示にも応えてくれて、お祭り騒ぎにも積極的に参加してくれる。SAO内でここまで良心的なメンバーは非常に珍しい。

「というか現階層まで一人もギルメンが欠けてないってのがおかしいんだよ。人様のことは言えんが。」

アスナさんの姿を見つけてクラインの兄貴が顔を引きつらせたり、クロの存在に《風林火山》のメンバーがマスコットキャラクターのように愛でたり……なんて展開もあったが、一通り挨拶を交わした後には情報交換を行う。三つのギルドの重要人物が揃っている故のことだったが、交換と言っても俺達のモンスター&ドロップ情報とアスキリのマップ情報を提供したことぐらいだろうか。

その間暇になってる《天壤無窮》と《風林火山》とその他一名はU NOをやっていた。大人数になったのでトランプから切り替えたのだろう。

書類じゃなくてメールで情報を送ったため、メールの文面をスライドさせながらクラインの兄貴は考え込む。

「……麻痺を付与してくる敵がいののか。こりや出会う前に知れたのはラッキーだな——お！ このモンスター^{直接ドロップ}つてレア刀を直ドロすんの!？」

「相変わらずハム君の情報の緻密さには頭が上がらないよ。このマップの端っこの部屋なら効率的に経験値を稼げそうね。団長にも伝えとくわ」

「……は？ ……こ隠し部屋ある感じ？ え、トラップある？ あるんなら注意喚起だけはしとくかー」

報告書に一部訂正を加えながらアスナさんの話に顔を向けていると、ボスの間辺りからまたもや雄叫びみたいな声が聞こえる。アスナさ《The Glean Eyes》とかいうボスの鳴き声だろう。全員が今やっていることの手を止めて同じ方向を見る。

あれ定期的に吠えてんだらうか？ 演出かな？

「うわあああああああああああああ!!」

「!!!?!?」

矢先に聞こえる、男性が発したと思われる絶叫音。

俺はキリトに叩きつけるように質問をした。

「キリトっ！　ボスから逃げてる最中に誰かとすれ違ったかつ!？」

「た、確か《アインクラッド解放軍》の奴等が数十人くらい向かってたような……」

前線から身を引いた《アインクラッド解放軍》が何故? という疑問すら考える暇もなく、またもや喉から絞り出したような絶叫が迷宮区にこだます。

まずい。

何故か知らんけど、これは多分まずい。

俺は舌打ちをしながら、何かを感じ取ったのか、先に安全エリアから出る準備をしていたギルメンに指示を出す。こういうとき察しがいいのは有り難い。

「お前等っ、ボスの間に向かうぞ！　ついて来い！」

個人的にはギルメンに呼びかけたはずだったのだが、ここにいた攻略組全員が弾かれるようにボスの間へ全力疾走をするのだった。

ソードマスターキリトく（人生） 完結編く

先に第七十四層迷宮区のボスの間に辿り着いたのはキリトで、俺は七番目くらいだったと思う。先についたはずの六人がなんで立ち止まってるのかと、開かれた扉から見える光景を目の当たりにした絶句した。

HPが二割以上残っているプレイヤーのいない《アインクラッド解放軍》の面々。

大きな両手剣をだらんと下げたまま幽鬼の如くプレイヤーを追いつめる《The Gleam Eyes》。

誰もが瞳に威圧感を放つボスに怯えと恐怖を浮かべる。

キリトは叫んだ。

「転移結晶を使え！ 早く逃げろ！」

「だ、ダメだ……転移結晶が使えな——」

そこまで言葉を紡いだ《アインクラッド解放軍》のタンクが、ボスの横薙ぎで吹っ飛ばされる。ただでさえ少なかつたHPがドットまです減少する。頭の中がお花畑のクロですら、このままでは《アインクラッド解放軍》が全滅すると想像するのは難くない。

扉の外にいる攻略組の猛者たちも、助けに行こうとした気持ちと、この少人数でボスと戦うことの無謀さで、その場から動けずに拳を震わせる。

俺は不快感で目を細めた。

助けに行くことのメリットとデメリットを天秤にかけている自分に対する不快感だった。

ここで《アインクラッド解放軍》——いや、プレイヤーの人数が減ることは無視できない。しかし、彼等を助けるために攻略組のトッププレイヤーを博打みたいな戦闘に投入する利点がないのは事実。むしろ転移結晶を使えないエリアだったはずのボスの攻撃パターンを目にする好機でもある。

人を人とも思わない思考回路と、それを冷静に考えている俺は何なのだろうか？ 非情なクソ野郎に違いない。

考えている間にもボスの蹂躪は続く。

体の動かない解放軍のタンクを見定め、大きく剣を振ろうとし――

「だめええええええええええええ!!」

この光景に耐えきれなくなったアスナさんが突進し、ボスの背中に飛び蹴りをかます。普通のプレイヤーならダメージすら入らないだろうが、神話生物と化したアスナさんにより、衝撃波を生んだ飛び蹴りに当たったボスは壁にめり込む。

マジである人何なん？

だが隙は生まれた。

アスナさんに続く形でキリトもボスの間に入り、諦めたクラインの兄貴も《風林火山》のメンバーも参戦していく。考えなしの行動に腹が立つ一方、どこか安心してはいる自分もいる。

「ケツ、これで助けられないわけにはいかなかったよなア？ え？ ハ

ムタロサアンよオ」

「うっせーよ害虫」

「さて、このろくでもない祭りを楽しむとしましょうか。情報が圧倒的に不足している中の作戦指揮、任せましたよ攻略組総指揮官殿」

「ああ、もう。作戦も指揮もあつたもんじゃねーだろうが」

言いたいことだけ言って自分の役割を自己判断で行う《天壤無窮》メンバーに、俺は髪の毛をわしゃわしゃ搔いて激戦区へと身を投じる。



まずは《アインクラッド解放軍》の隊長格らしき人物へと近づく。呆然としているそいつにビンタをかまし、

「《天壤無窮》ギルドマスターのハムタロだ。解放軍の指揮官だな？」

「あ、ああ……」

「現時点を以て《アインクラッド解放軍》メンバーの指揮権を頂く。要

するに死にたくなかったら俺の言うことを聞けって話だ。はいかyesで答えろ」

無理やり領かせた俺はトレードでHPポーションを渡し、ボスの間にいる全員に大声で告げた。

「《天壤無窮》ギルドマスターのハムタロだ。現時点を以てここにいる全員は俺の指揮下に入ってもらおう。ボスが動けるようになったと同時にクロはボスのヘイト集め、その間にパーティの組み換えを行う。アタッカーはニート侍かマッドハッターをリーダーとするパーティに、タンクは俺かケムツソのパーティに所属するように」

皆が静聴しているせい、叫んでいるわけでもないの、俺の声はボスの間に響く。

「《風林火山》はクラインの指揮下でサポートに徹しろ。アスナとキリトはクロとパーティを組むように。一分一秒が惜しい。俺の指示には即座に従い、生き残ることを最優先として考えろ。組み次第ポジションでの回復を行うこと。俺が指示を出すまではパーティリーダーの指示に従え。以上」

さっそく集まった解放軍のタンクとパーティを組み、俺の簡略化した命令を、HPが減ったメンバーにポジションを飲ませながら説明する。生き残る希望と捉えられたのか、全員が素直に聞いてくれた。

それからクロがHPを減らしたタイミングでハムタロPTをタンクとして全面に押し出す。

「ボスの横薙ぎが来るぞ！ パリイ用意！ ……今！」

パリイを使うと敵は強制的にスタンする。

ある意味戦闘の基本ではあるが、先ほどの壊滅を見ていた感じだと、彼等はパリイのタイミングが掴めていないように思えた。なので俺がタイミングを指示することで確実にスタンを狙う。

動けなくなったボスにニートとハツタのPTを始めとするアタッカーが総攻撃を仕掛ける。今回は今回だけにキリトは最初から《二刀流》を開放し、ニートも自分のユニークスキルを使う。《風林火山》のメンバーも重要なダメージソースだ。

「攻撃止め！ 深追いはすんじゃねーぞ！」

そしてボスが起き上がる少し前にアタッカー組を下がらせることも忘れない。慎重に徹している故にアタッカーはスキルが一つしか打てないが、下手にギリギリまで攻撃するのは危険だ。特にロクな意思疎通もできていないような混成PTなら尚更だろう。

タンクをケムツソのPTに任せながら、俺のパーティーを下がらせる。

タンクがタゲを取ってる最中、時折ニートとハツタ、クロやキリトがボスの攻撃範囲内に入ったたり出たりを繰り返す。そしてボスの特殊技を観察するのだ。

「範囲7、数8、デバフ2！」

「クロとアスナがタンクの時は《風林火山》は五人で攻撃を行え！ボスの半径七メートルには入るなよ！」

ニートが『範囲七メートルに八人以上プレイヤーがいるとデバフ二つを付与する範囲攻撃をする』という意味の報告により、新しい指示を出す。タンクの大半が解放軍なので不安に感じたが、アタッカーが攻略組のトッププレイヤーな為、ボスのHPが減る速度が想像以上に速い。

これなら余程のヘマをしない限りは大丈夫だろう。もちろん警戒は怠らないが。

アスナ&クロ、ハムタロPT、ケムツソPTをローテーションでタンクを回しながら攻撃のチャンス逃すことなく戦うこと約二十分。《アインクラッド解放軍》を半壊滅に追いやったボスは、最後のクロによる《スターバースト・キリト》によって蒼い結晶片となって消える。

四十八人を総動員せずにボスを討伐したのは初めてだろう。しかし、ボスを攻略したという達成感よりも、生き残ったという安心感から、糸が切れたように全員が等しく地面にへたり込むのであった。

俺なんか仰向けになって倒れる。

「あーもうつつかれたあ！何が事前情報なしの迷宮区ボスじゃマジなめてんじやねえぞ二度しねーから絶対しねーから家帰って寝たい」

息継ぎなしに不満をたれ、子供のように駄々を捏ねる姿に生暖かい視線を向けられてる気がしたが、そんなもんは関係なかった。割と《The Gleam Eyes》のHPが低かったことが幸いしただろう。これが普通の迷宮区のボスだったら一時間ぐらいは同じ工程を繰り返していたに違いない。

ただでさえ今ここに居る全員の命を預かっていたに等しい状況だ。長時間もボス戦やってられっか。

無謀にもほどがある。

「……キリト」

「お疲れさん、ハムタロ。お前のおかげで死なずに済んだ」

「お前絶対ピナ食わせるからな」

「ピナあああああああああ!?!」

だから八つ当たりしてしまうのもご愛敬だろう。

絶対負けられないし勝っても大変なことになる

『第七十四層のボスを最大レイドメンバーの半分以下で攻略』という偉業を成し遂げてから数日経った頃。いつも通り七十五層のクエスト情報を集めていた俺は、血盟騎士団団長のヒースクリフにギルドハウスへ招かれていた。

攻略組の一人として赴いたことは多かれど、ヒースクリフに一個人としてギルドハウスに招かれたことは、俺の記憶の中では一度としてないはず。なんだか嫌な予感を感じながらも、ヒースクリフが待ち構えている部屋まで行く途中、すれ違った団員達の間で交わされた会話が耳に残る。

七十四層ボスと戦わずに済んだ安堵。

二十人そこらでボスを討伐したハムタロサアンへの称賛。

ボスの間で結晶が使えなかったことによる不安。

クォーターポイントの節目に対する緊張。

特に結晶の使用不可の波紋は大きかったようで、攻略組の間でも話題に上がることは多い。この数日だけでも効果量の高い回復ポーションの需要は高まり、大規模なレベリング大会も開催された程だ。加えて、ボスの情報を直接探れない可能性が出てきたためか、第七十五層のクエスト情報は重要性を増し、それと比例するかのよう攻略組迷宮区ボス討伐戦総指揮官の《天壤無窮》ギルドマスターの存在が大きくなる様は、端から見て「ざまあ」と笑いたくなる。

「最前線から足洗って年金生活していい？」などとハムタロが言っていたなんて、口が裂けても言えない雰囲気は自然と出来上がっていた。

などと考えている間にヒースクリフの執務室へと着いたようだ。

礼儀として扉をノックし、あまり目上の人に会うことに気負うことなく開け、

「――あ、キリト君！」

「……………」

「キリト君、流石に顔を見て扉を閉めるのは失礼じゃないかね？」

俺の天敵
アスナの姿を視認した瞬間に脊髄を通すことなく扉を閉めようとしたが、その気持ちわからんでもないと苦笑したヒースクリフに止められる。執務室中央にある机で仕事をしていたこの男、あまり感情を表に出すような人物ではないというのが第一印象だったけど、今では大分丸くなったと実感する。

《お祭り男》ヒースクリフの二つ名は伊達じゃないなあ。

…………あれ？

ふと自然に流してたが、アスナと二人きりで仕事する忍耐力を持つヒースクリフって、あのキチガイ集団よりもヤベー奴なんじゃないだろうか？

凄いいという感想よりも畏怖で手が震えてくる。

「…………なぜキリト君は震えているのだろうか」

「久しぶりに私に会えてうれしいんですよ」

「………………仲が良いのはよいことだ」

咳払いをしたヒースクリフが真剣な瞳を俺に向ける。

「君を呼び出したのは他でもない、先日のボス討伐の件だ。ちようど昨日のこの時間だったか、《アインクラッド解放軍》のキバオウ氏から謝罪の言葉と共に原因解明のメールが送られてきた」

「…………一部の前線復帰派の暴走、か？」

「察しが良く手助かる。…………いや、キバオウ氏のことを良く知っている君なら、彼が指示を下したかなんて考えなくともわかるかね」

確かに攻略組を引退したことを一番重く受け入れていたのはキバオウだった。しかし、私情程度で軍を動かすような真似をするような考えなしの男ではないのは、クロに武器扱いされてきた俺には口にしなくても分かる。あそこまで義理堅く、アインクラッド攻略のことを第一に考えている奴はいない。

そうになると、現段階で前線復帰するメリットがない軍がボス討伐に人員を動かすはずがない。キバオウの人柄的にも、軍全体の損得的にも矛盾が出てくるのだ。

つまり今回の独断は軍の総意ではないと推測できる。

「もちろん今回の独断行動の責任者は懲戒処分……という事実上の除名扱いだ。彼等が前線に赴いてくることはなくなるだろう」

「当たり前だ。同じようなこと起こそうモンなら、今度こそハムタロがブチ切れて攻略組から引退するぞ。クロもおまけで消えるだろうし」

「考える限りの最悪の未来よ、それ。『誰も死なないことを戦術目標とした作戦指揮』をするハムタロ君が居たからこそ、今まで攻略組が瓦解しなかったようなものだし、そう考えるとある意味ちよつとした奇跡よね」

俺の真実混じりの皮肉に、半分奇跡みたいな存在と化したアスナが肩をすくめる。本当によくもまあアイツ等は馬鹿みたいにふざけながら七十五層まで来れたもんだ。あのキチガイ集団がいなければ、ボス攻略がもつとピリピリした空気だったであろうことは想像に難くない。

基本的に Damage Per Second DP S では火力最強を名乗っている俺だが、タックルにしては火力がおかしいクロやアスナ、純火力で俺レベルの DP S を誇るニートやクライン、安定した防御力を持つヒースクリフやケムツソ……挙げれば片手の指じゃ数えられないほど、攻略組のレベルは高いことが伺える。

「まあ、君を呼び出した理由は他にある」

「ん？ まだ何かあるのか？」

「正確に言えば君とアスナ君か。——ボス攻略における独断行動だな」

ヒースクリフ曰く、俺とアスナが行った行動は結果的には人命救助にあたる。しかし、独断行動で罰を課せられた軍の例を挙げるとするならば、あの時感情的に動いたアスナ（と何故か俺）にも何らかの処罰を与えなければならぬ……らしい。

分からなくもない言い分ではあるが、俺はとりあえず嫌な予感が拭えないので反論を示す。

「それじゃあ軍の連中を見捨てたほうが正解だったって言いたいのか

？」

「ハムタロ君はそう考えていたらしいがね。彼等を命を賭してまで助ける義理と状況ではなかった上に、ボスの行動パターンをある程度見極めるチャンスであった、と。あそこまで私情を斬り捨てた考え方をする彼には、薄ら寒さを覚えてしまおうよ」

「……ならクライン達は」

「彼等は『攻略組全体の利益を損なわないために、やむを得ず戦闘に参加した』との記録がされている。ちなみに記録したのはケムツソ君だ」

キチガイとクライン
アイツ等グルだったのかよ。

簡単に言えば責任を全部アスナ（と何故か俺）に押し付けたわけだ。後で覚えてろよコンチクショウ。

「しかし私も理不尽に思ったのは言うまでもない。アスナ君はともかく、君もクライン君達と同様に罪はない立場なのだから。キリト君には何の罪もない。うん、君は悪くない」

「どうしてそこを強調する？」

「そこで——だ」

ヒースクリフは机に肘をつき両手を組みながら、両手の上に顎を乗せる。

「私と君との決闘が開催されることになった。私に負ければ君はアスナ君と一緒に謹慎扱いとなる。逆に私に勝てば、君を謹慎中のアスナ君の監視役に抜擢させてあげよう」

「それ俺への死刑宣告ですか？」

横で「え、どっちも私へのご褒美じゃん」と呟くアスナの言葉は聞こえないようにして、どう考えても俺への罰ゲームが目的だと思わざるを得ない処遇に、思わず反射的に言葉を返す。

「私だって有能な副官を謹慎させるのは忍びない。泣いて馬謖を斬る思いだ。だから、せめて彼女と友好的な関係にある君に監視役を頼もうと思っっているのだよ」

『泣いて馬謖を斬る』か、ケツ。自分が犠牲にならずにすむなら、いくらだって嬉し涙が出ようってもんだらう？」

ヒースクリフの演技めいた悲壮感漂う表情に、俺はジト目で皮肉をぶちまけた。おそらくヒースクリフを始めとする攻略組全員で口裏を合わせていると確信する。

どうしてこう非常にどうでもいいことに全力を出すんだコイツ等は。

こうして俺とヒースクリフの決闘が開催されることとなった。

逃げた場合は「アスナ共々人生の墓場に屠ってやる」と脅されれば、受けざるを得んだろう？

グレート・オールド・ワンは恋をする

第七十五層には古代ローマのコロッセオを彷彿とさせる闘技場がある。

満員となった観客席に見渡されながら、コロッセオの中央に立ち、マイクを持った《月夜の黒猫団》の団長——ケイタ君は空気を震わせる程の声を張った。

「——さて、この日雌雄を決するのは迷宮区攻略を掲げる猛者達。ソードアートオンラインが約二年を費やし生み出した歴戦の覇者。二人の神話生物の前に『最強』の二文字は意味がないと知りながら、それでも男なら証明して見せたい！ 今ここに、SAO最強を冠する英雄が降臨するっつ!!」

その熱気は今からガンダムファイトでも始めんのかという暑苦しさではあるが、それは今回のイベントが順調に始まろうとしている証でもあった。一番後ろでケイタ君の雄姿を眺めながら、同時に何が起ころうともすぐ動けるよう周囲にも気を配っている。

隣にいるクロは警備に一番使えない思考回路してるからな仕方ない。コイツと組ませたほか連中絶対許さんからな？

「SAO最強決定戦の始まりだああああああああ!!」

「「「うおおおおおおお!!」」」

某テニスプレイヤーの二分の一くらい熱そうな観客に苦笑いしながら肩をすくめていると、俺の後ろから声をかけてくるプレイヤーがいた。

「どんな物好きかと振り返ってみると、

「久しぶりね、元気してた?」

「おう、ぼったくり鍛冶屋のリズベットさんじゃないか。見ての通り悪運よく生き永らえてるよ」

「ぼったくった記憶よりも、ぼったくられた記憶しかないんだけど……」

ピンクの髪とそばかすが特徴のマスターミスがにこやかに立っていた。クロとも「クロちゃんも生きててよかったわ。こんにちは」「よっ」と意思疎通の取れる、SAOどころか人類史上でも珍しい娘だ。

俺の横にいるクロの横に立ってコロッセオの様子を見た彼女は、その熱に若干顔を引きつらせる。

「相変わらずイベントを盛り上げるのが上手よね、アンタ。あそこに立ってる男の子の台詞もアンタが考えたんでしょ？」

「いや、俺は関与しとらんよ。元々そういう才能があったんじゃないの？ ……それよりもリズベットさんがココにいる理由を知りたいんだけど。こういうイベには参加しないイメージがあつたからさ」

協力はしてくれるけど、こういったデュエルやスポーツ大会などには参加してないことが多かったためか、俺は表情には出さないながらも内心結構驚いてる。

この疑問に対して彼女の反応は苦笑いを含む微妙な表情であつた。

「そりゃあ、まあ……キリトが絶望的な顔で鍛冶屋来たら気になるわよ」

「……………せやな」

何となく想像できるのが悲しいところだ。

原因は七割くらい俺だけだ。

彼女曰く、昨日訪ねてきた黒の剣士様は「勝つても地獄、負けても地獄、逃げたら墓場……俺はどうすればいいんだっ……！」と頭を抱えていたらしい。そんな彼の様子を見せられたら、せめて最後まで見届けてやろうというリズベットさんの優しさよ。聖女か。

戦術において、敵の行動する選択肢を狭め、どの選択肢を選んでも俺個人が面白く自分が有利になるような状況を作り出すことは良策だと言える。そして自分が有利になるような選択肢を選んでくれたら上々だ。まあ、今回の『敵』はこの場合だとキリトだったりするんだが。

そんな悲しい会話をしていると、コロッセオに二人の選手が入場す

る。

周囲に手を振るくらいサービス精神あふれる《お祭り男》ヒースクリフトと、目から光が消えている《イキリト》のキリトだ。彼の纏う雰囲気は『壮大な悲しい過去を背負っているラノベ主人公』に見えなくもない。悲しい過去というか悲しい未来背負ってるんだけど。

「私としては逃げて欲しいところなんだけどね」

「え、キリトに死ねと?」

「アンタ今アスナに対して物凄く失礼なこと言ってる自覚ある?」

クロの隣でボソツと呟いたリスベットさんに真顔で質問する俺。

だって事実だろうが。

「……まあ、私も今から物凄く失礼なこと言うんだけど、ほら、アスナって外見だけは魅力的な女の子じゃない? それでも浮いた話がないって言うことは……まあ、その……つまりは……そういうことでしょ?」

「外見『涼宮ハルヒ』で中身『島津豊久』みたいな女の子とは付き合いたくないって心理と同じか」

「失礼さでアンタに勝てる気がしないわ」

意気揚々と剣と盾を構えるヒースクリフト、力なく二本の剣を構えるキリト。

対比とも言える状況を面白半分で眺めながら、俺はリスベットさんの心境を自分に分かり易く変換する。

めっちゃ酷いこと言ってる自覚はあるけれども、事実を隠したところで仕方ないだろう?

確かにアスナさんは顔面偏差値は高いし、出会った初期の頃のような状態が続いていたら、今頃素敵な彼氏でも作っていてもおかしくない可愛さだ。それは否定しない。

けどキリトとは違って俺達男共は付き合う相手を選ぶ権利がある。

『可愛いは正義』や『我々の業界ではご褒美です』と言えるような範疇を超えているんだよ、アイツ等は。前にアンケート調査を行ってみたところ、クロを可愛いと思うプレイヤーはいても、結婚したいと考えるプレイヤーはゼロだった。もう一度言う。ゼロだった。

「要するに貰い手がいなさそうなアスナと、一生フリーを貰きそうなキリトをくつつけたいってコトだろ？」

「……あのアスナが現実世界に帰ったところを想像しなさい」

「……親御さんに顔向けできねえわ」

コロッセオの中央で二人の剣士が激しく剣戟を交わしているが、俺達はそれどころじゃなかった。

全ての元凶が俺の隣でハンバーガーを関係なさそうにむっしやむっしや食ってるが、俺にも原因がなかったとは言い難い。まさかクロの類似品が生まれるとは思わねえじゃん。

「関係ないと思う」

「どういう意味だ脳筋」

血盟騎士団団長と黒の剣士の試合を仏頂面で観戦してると思っていたS A O最強タンクは、その仏頂面を俺の方へ向けながら、意味深な発言を残す。

ちなみにヒースクリフとキリトの決闘の様子は実況しなくても分かるだろう。絶好調と絶不調じゃ勝負にすらならん。

「私がアスナならイキリトを力づくでもお嫁さんにする。アスナもきつとそうする」

「つまり私達が何もしなくてもアスナは自分で何とかする……って言いたいよね」

キリトに最初っから未来なんてねえんだよと同義のクロの発言に、リズベットさんは困ったように頬を掻いた。

俺達がアスナさんを神話生物に変えた件は置いて、リズベットさんが心配するようなことは起きないと、全ての元凶は思っているよ。うだ。現実世界に戻ったところで、草の根掻き分けてでも見つけ出してやるってことなんだろう。

何そのホラー。

「むしろ貰い手がないって考える方が不謹慎」

「ご、ごめんなさい、クロちゃん」

「あー……まあ、その……悪かったよ」

「手に入れたいものは権力と腕力の全てを以て手に入れる。アスナに

はそう教えた」

「なんてことを」

そういうところやぞ金髪脳筋神話生物娘。

血盟騎士団副団長の地位 ステータス振り

権 力と腕 力の両方を持つてる奴にジャイアニズムはアカ

ンつて。もうキリトが尻に敷に敷かれる未来しか想像できないんだけどさあ。

俺とリズベットさんが頭を抱える中、客席から大きな歓声が上が
る。

そこには苦笑いを浮かべながら剣を掲げて歓声に応える勝者の姿
と、絶世の美少女に抱きしめられて絶望に染まった青い顔をした敗者
の姿が、そこにはあった。

やっぱり筋肉は至高なんだなって

『始まりの町』は意外と広い造りとなっている。実際に、町の広さは浮遊城アインクラッド基部フロアの約2割……東京都の小さな区1つほどの大きさを占めているため、現在七十五層まで解放されており、各層に街や家が準備されていても、未だに『始まりの町』に住むプレイヤーは少ない。

このゲームがクリアされることを期待する者や、戦闘に参加できない子供や老人が在住し、その管理はアインクラッド解放軍が行っていると聞く。

「……クロが勝手に付いて来るのは別にいいとして、どうしてお前^{ハツタ}まで来てんだよ」

「新たな少女の気配を察知したので」

「お前ホントマジで一回死んでくんない?」

では攻略組に『始まりの町』は無関係なのか?

実はモンスターの『呪い^{カース}』のデバフ解除、対アンデット用に武器の祝福を受けることが出来る教会、生存確認をするための黒鉄宮内部の『蘇生者の間』にある金属製の巨大な碑《生命の碑》など、割と重要な施設がココに備わっている。

今回の俺の目的だって、七十五層の某モンスターに教会のアンデット特効の祝福が加算されるかの検証に赴いたに過ぎない。ついでにキバオウとかに会えればいいなとか。

そして少女漁りに来た変態は「しかし……」と顎に手を当てる。考えてる姿は絵になるんだよな。変態なだけで。

「私の感知する少女センサーが薄いんですよね。ましてやアインクラッド内の全少女の身長・体重・スリーサイズを網羅する私が視落としていること自体がおかしい」

「自分の発言自体がおかしいことに気付け」

「はてさて……突然現れた少女が本当に少女なのか。楽しみですなあ」

含みのある言い方で楽しげにスキップする変態と、それを真似する

脳筋に舌打ちしてると、どこからか少女の悲鳴が聞こえた気がした。
一瞬気のせいかと考えたが、どうやらハツタの様子からして俺の耳は衰えてなかったようだ。

「——っ!? 幼女に危険がつ!?!」

血相を変えたハツタは地面を大きく蹴りあげ、超音速飛行により発生する衝撃波が周囲に巻き起こった。同時に町の窓ガラスという窓ガラスが綺麗な音と共に粉碎して破片となる。それゲームシステムの壊せないよね？

面倒事に巻き込まれることを覚悟で俺とクロはハツタの後を追う。

そして追いついた現場には、死屍累々の軍のメンバー、謹慎中のキリトアスナ夫妻、幼い子供三人と見知らぬ女性一人が唾然としていた。気持ちは分からんでもない。

血を払うような仕草をして細剣を収めるハツタに、ホントは近づきたくないけど呆れを含む溜息をつきながら接近して皮肉をぶつける。

絶対零度の表情で完全に瞳孔が開いているコレに関わりたくないんだが。

「ふん……どの面下げて女子供に武器を向けたのやら」

「勝手に軍と殺り合うのやめてくれませんかねえ、ハツタさんや。それ俺の責任になるんだけど」

「この蛮行を黙認するような組織だった記憶はありませんが？ もしこれを知っても尚何か言ってくるような畜生の集まりであれば……切って差し上げましょう」

何を切るのかは聞かないでおこう。縁であると思いたい。

子供から「スゲー!」だの「格好いい!」だの称賛され、女性から深々と頭を下げられているハツタを放置し、俺は夫妻の元に向かった。

死角で見えなかったが、キリトはどうやら子供を背負ってるようだ。

「よっす、謹慎中のキリトさん。それアスナさんとの子供」

「縁起でもないこと言うな。拾った娘だよ」

「それはそれで問題なんだけど——」

もつとキリトを弄り倒してやろうかと考えた矢先、それは起こった。

視界そのものに走るノイズ。

脳裏を揺さぶるかのような不協和音。

一瞬姿がぼやける少女。

摩訶不思議な現象は短い時間ではあったが、確かに起こったバグのようなものが消えた時には、キリトの背負っていた少女は後ろに倒れるように気を失う。

慌てて俺が支えようと試みたが、「ユイちゃん！」という言葉と共に、アスナさんが俺を吹き飛ばして少女を優しく抱きとめる。近くの壁にめり込みながら、俺は彼女が最後に発言した「みんなの、みんなの心が……あたし、ここには、いなかった……ずっと一人で、暗い所に……」の意味を考えていた。

そう、俺達は気づかなかった。

彼女の正体を。彼女が現れた理由を。その末路を。

鋭利な眼差しでその様子を見ていたハツタを除いて。



「ホンマすまんかった」

「いやいや、キバオウさんが謝ることじゃないだろ。幸いこちらには物理的な損失はなかったわけだし、今回は水に流してくれると嬉しい」

子供たちの保護を幼女相手にヤベー奴と誰に対してもヤベー奴に任せ、俺は一層の視察に訪れていたキバオウと黒鉄宮前の広場で軽い情報交換をしていた。

いかにも噴水広場とも呼べそうな場所で男二人が会話するのは絵面的にどうかとも思ったが、俺は噴水のオブジェの縁に腰を下ろし、俺の前にはイガグリ頭が特徴のキバオウさんが立っている。

今回の騒動に関してはキバオウさん方で対応してくれる話となり、他にも前線の様子などの聞かれたことを事細かに説明した。俺も『軍内部では未だに主戦過激派と治安維持派で割れており、今回のようなことが小さいながらも起こっている』という情報を頂いた。

「軍も一枚岩とは程遠いというわけだ。」

「対応が後手に回るのは感心しない——なんて口が裂けても言えねえわな。そもそも俺達はゲームするためにSAO来たわけであって、政治しに来たわけじゃない。現実世界でも完璧とは程遠いのに、素人の俺達が治安維持を完璧にできる訳がないんだって気づくべきだったんだよ、うん」

「せやけど、起こさないように努力はするべきや。アンタ等がゲームクリアするまでは、なあ?」

「軍が前線抜けてからの再編で一時期攻略が滞っていたけど、今はちゃんとペース保って攻略が進んでるだろ? 絶対とは言い切れんけど、来年度にはクリアしてやるよ」

わざと挑発するような笑みのキバオウさんに、俺は同じような表情で返す。同時に、やはりこの男が前線から引退してしまったのは非常に惜しいと痛感してしまった。

そろそろ連中の元へ戻ろうと腰を上げた時、思いだしたかのようにキバオウさんが「ところでシンカーはんを知らへんか?」と深刻そうに尋ねてきた。

「えっと、軍のサブリーダーだよな? 俺は最近見てないけど」

「今行方不明になってんや。アインクラッドの一層にいるのは分かっているんやけど、搜索しても目撃情報すら得られん。フレンド欄もなぜかアテにならんし……情報あったら連絡頼むで」

「あいよ。まあ、俺はすぐにでも前線戻るけどな」

キバオウさんと別れて、俺はキチガイ共の元へと帰る途中、ふとキリトとアスナさんが拾った少女——ユイちゃんが脳裏を過った。

幽霊が出ると噂のある森。俺達はそこに『コサックダンス縛りのレベリング』と称して行ったことがあるが、少なくとも彼女のようなレベル上げもしてない少女が倒れていて無事な場所じゃないのはよく

知ってる。無事であったことは……まあ、奇跡って言葉で片づけられるだろう。

だが彼女にプレイヤーだと証明するカーソルがなく、アスナさん曰くシステムウインドウがバグかなんかで変なことになってるらしかった。極めつけに、軍との騒動後のノイズ……。

自分にあるだけの情報を整理し、とある仮説を立てたところで、俺はキチガイ共のいる建物の前へと辿り着いた。

俺はノックして扉を開き――

「やはり筋肉！ 筋肉こそ至高！ ハツタさん、もっとプロテイン下さいー！」

「そのままの彼女でいて欲しかった……！」

「うん、これでユイも仲間」

「ほら、キリト君！ 私達の娘がちゃんと立派になったよ！」

「……もう……なるようになれよ……」

首から下がドラゴンボールの主人公並みに筋肉質となったユイちゃんと、項垂れて血の涙を流すハツタ、満足げに頷く確信犯のクロと、自分の娘の成長に歓喜するアスナさん、諦めの境地に至るキリト――そのような地獄を目の前に、考えるのが馬鹿らしくなる俺だった。

Lv90台ボスだろ!? 首置いてけ!

ドラゴンボールの登場人物のクソコラみたいな少女(?)は一旦置いて、俺達はシンカーの居場所を知っている『ユリエール』という女性の依頼の下、アスキリと変態と脳筋を引きつれて、黒鉄宮地下迷宮へと足を運ぶこととなった。彼女曰く、シンカーは軍の過激派により丸腰のまま地下迷宮へと誘いだされ、そこから帰るに帰れない状況らしい。

途中で合流したキバオウさん含む八人は、薄暗い神殿のような道を歩きながら、時折現れるモンスターを倒しつつ、シンカーが連れられた場所へと進んでいた。

というが軍のリーダー連れ帰るのに過剰戦力や過ぎないか？

アスナやキリトなどの現役攻略組メンバー、軍の副官とユリエール軍のサブリーダーオウ、悪名轟くSAOロリコン同盟会長、加えて攻略組迷宮区ボス討伐戦総指揮官の俺。そして――

「かめはめ波あああああああああ!!」
「ティロファイナーレ」

あそこで馬鹿やってる少女二人組だろう。

クソコラ少女が手のひらから波動砲を出し、神話生物が自分の大剣をフルスイングで投げてLv60台のボスを木っ端微塵に吹き飛ばしている様を見ていると、俺達のやってるゲームが分からなくなってくるんだが。

さすがに少女組のやりたい放題が見過ごせなかったのだろう。攻略組の大手ギルドの一つに名を連ね、規律と秩序の象徴たる血盟騎士団の副団長が注意を促した。

ぶっちゃけ規律と秩序なんて、団長と副団長の頭の中がお花畑の血盟騎士団よりも、なんだかんだルールは絶対を守る、クラインの兄貴が率いるギルドの方が相応しいと個人的に思うのは気にしない。

「クロちゃん、ユイちゃん、ここには攻略組じゃない人もいるんだ

から地形破壊はやめなさい」

「はい」

壁や天井などに大きな穴が開き、そこから0と1の数列らしきものが見え隠れする光景に、ユリエールさんは泡を吹き、キバオウさんは呆れながら首を振っていた。最近だと破壊不可能なオブジェクトも破壊するようになったからな、あの金髪脳筋神話生物娘は。

あのポリゴンの裏側みたいな空間は今に始まったことじゃない。どうやるのか皆目見当もつかんけど、時々クロが壁とか破壊してるのを見たことがあるからだ。ちなみにアスナさんもそれは不可能じゃないらしい。ルール無視かよ。

まったく、このゲームシステムはガバにも程があるだろう？

アスナさんがユイちゃんに「あとサイヤ人モードは迷惑かけるから止めてね」というブーメラン発言に、ユイちゃんがおとなしく従って元の幼女姿に戻り、モード選べるのかと俺が感心していると、どうやらユリエールさんの言ってた目的地に辿り着いたようだ。

確かに彼女の言ってた通り、ゴールらしき通路の奥には丸腰のプレイヤーが見える。あれがシンカーさんなんだろう。

ユリエールさんとキバオウさんは彼が無事だったことに安堵し、特にユリエールさんは嬉しさのあまり彼の居るところまで駆け寄ろうとして――

「――来ちゃ駄目だっつ!!」

「はいストロップ」

俺は彼の叫びに条件反射で彼女の後ろ襟首を掴んで制止させる。

カエルが潰れるような声を出したユリエールさんを止められたものは良いものの、彼女が歩み出した位置がちょうどトリガーだったのだろう。

俺達とシンカーさんの間に現れたのは――まさに『絶望』を具現化させたような存在だった。

このフロア自体は天井が高く設定されているが、その天井ギリギリまで届くようなボス級モンスターだと言えば伝わるだろうか？ 命を刈り取る形をしている凶悪で大きな鎌と、一般的に俺達が連想する

ような死神風のフードを深く被っている。しかし、顔の位置には頭骸骨そのもののはつきりと見え、血の色をした瞳は俺達を品定めするかの様に睥睨する。

俺の《識別スキル》でもステータスを読み取ることが出来ない。つまりレベルは相当高いのだろう。

攻略組で長く戦い続けてきた俺達だからこそ分かる。これは戦つてはならない相手だと。他のメンバーも冷や汗をかきながら、後ずさりしつつ後退し、逃げるタイミングを伺——

「……あれ、結構レアなアイテム落としそうだな」

「さあ、テメエ等！ 狩りの時間だア！」

「「Foooooooooooooooooooooooo!!」」

——う暇があるんなら、攻略に役立ちそうなモン落としそうな目の前の獲物倒す方が得策だよな。うん。

俺の呟きと共に、どっかの不良少年みたいな口調で喜々と二刀流を構える黒のイキリト他、文明が発達してない民族の狩りの合図みたいに雄叫びを上げる攻略組のトッププレイヤー達。

いくら格上だろうと、レアアイテム落とすモンスターを見逃す奴は攻略組にはいない。つかこのモンスター前にクロが間違つて壊した部屋の奥にいた気がする。

「レアアイテム置いてけ！ なあ、Lv90台ボスなんだろう、お前!? ならレアアイテム置いてけよ！ レアアイテム置いてけええええええ!!」

《識別スキル》なくても大まかなレベルを察するキリトは、薩摩兵子もニッコリな獰猛な笑みを浮かべながら、二刀流スキルを惜しみもなくブン回していく。自称ゲーマーのイキリト君は昔からレア泥に関して並ならない執着心的なものがある。その結果がああザマである。こうやってレアアイテムの欲求を前面に押し出した黒の剣士は、や

はりDPS最強のプレイヤーなのだ嫌でも自覚してしまうな。某調査兵団の兵長みたいなトリツキーな素早い動きは、幼女を追い求めるハツタぐらいしか比較対象がないくらいだ。

格上のボスモンスターのHPゲージが信じられない速度で減少する様を眺めながら、俺はなぜボスモンスターがここに現れたのかを考察してみる。

クロが偶然バグ利用みたいに壊した壁にあった部屋もそうだが、このような初見殺しに似たモンスターを配置されている場所には、何か重要なものが隠されていることが多い。

そして、そのような場所には二つのパターンがある。一つは階層攻略に必要なギミックか情報を持つ鍵となるモンスター。もう一つは本来GMが使用するはずだった部屋を守護するためのボスモンスター。

今回は——後者だったようだ。

その事実気付いたのは、隣でバーサーカー共が狂乱の宴を行っているのを黙って見ていた黒髪の少女が、ゆつくりとボスモンスターへと歩み始めたのと同時だった。

「——大丈夫だよ。パパ、ママ」

その言葉は誰に向けてのものだったのだろうか。つか何が大丈夫なのだろうか？

ボスモンスターは少女の存在に気付いたのか、ヒヤッハーしてる攻略組を無視してまでユイちゃんに襲い掛かる。思わず駆け寄ろうとした俺だが、黒髪の少女は一瞬にして筋骨隆々なサイヤ人モードと化し、

「七花八裂……改……っ！」

襲い掛かるボスモンスターに、身体を捻って拳を相手に突き出して敵の肉体を内側から破壊し、強烈な拳底、合掌した手を開きながらぶつける掌底で相手の外側に衝撃を与え、足を斧刀に見立てた踵落としを喰らわし、下から打ち上げる膝蹴り、両手で放つ水平手刀で両脇を

打ち、最後に敵の胴体を穿つ貫手を流れるような動作で繰り出した。
どこの虚刀流だよ。

殺意が無駄に高すぎて全員が言葉に出ない。

ポリゴンのように弾けて消えたモンスターを背景に、彼女は悲しみ
と寂しさを混ぜたような笑みを攻略組の面々に向け、

「俺のラストアタックがああああああああ!!?!」

空気の読めないキリトの嘆きが地下迷宮に木霊した。

そもそも情弱なカーディナルが悪い

そこは白い部屋だった。

清潔感漂う質素な内装……と言えば聞こえはいいのかもしれないが、俺はどうにもこの空間が堅苦しく何とも言えないような印象を覚えた。形式ばったものが嫌いなキチガイ集団にありがちな感性である。

ユリエールさんとキバオウさんはシンカーさん救出して本部まで戻っていったので、この棺桶みたいな黒い何かだけが鎮座する部屋にはキリト夫妻と脳筋と変態と俺が、黒い何かに座って居るユイちゃんを注目している。

ユイちゃんは悲しそうに俯く。

悲痛な面持ちなため、首から下さえ見なければ何とかシリアスになりそうな絵面だ。

「ユイちゃん……思いだしたの?」

「……はい」

顔を上げた時のユイちゃんは外見上は前とは変わらぬ様であったが、雰囲気完全に別のそれとなっていた。できれば外見も変えて欲しかった。

「キリトさん、アスナさん」

「……っ!」

さっきまで彼女は彼等のことを「パパ、ママ」と呼んでいたはずだ。ただ呼び方が変わっただけ——なのに、どうしてこうも壁のようなものを感じてしまうのだろうか?

ユイちゃんは彼らの名前を呼んだ後、俺達馬鹿三人組の方にも目を向け、

「クローバーさん、マッドハッターさん……ハムタロサアン」

「だーめだこれ、俺が居るだけで雰囲気締まらねえわ」

そもそもココ来た瞬間に何もかも疑問を無視して「お、俺の!

俺のラストアタックボーナスはどうなったんだ!」と詰め寄ったキリトがいた時点でお察しなんだがな。とうとう日頃の（アスナさんへ

の) ストレスからか頭おかしくなったんだろう。

俺たち全員が困ったように笑いながら、ユイちゃんへと向き直る。

「それでユイちゃん、続きをどうぞ」

「ソードアートオンラインと呼ばれるこの世界は、一つのシステムによって支配されています。システムの名前は——『カーディナル』」

ユイちゃんは語った。

『カーディナル』というシステムは人の手のメンテナンスを必要としないものであり、カーディナルシステムのAIはSAOの制御を自らの判断で行っている。しかし人間の精神面までは『カーディナル』では調整できないはずだった。そのため数十人のGMで管理することとなるのだが、開発者たちはそれさえもシステムによって統制させようとし、人間の所へ訪れてカウンセリングするAIが試作された。それが『メンタルヘルス・カウンセリングプログラム』——

『試作1号、コードネーム——『Yui』』

「AI……ユイちゃんはAIだって言うの!?!」

「私の感情は人間に違和感を与えないよう組まれた模倣プログラムです。偽物なんですよ、私の感情は」

神話生物その2の悲痛な問いに、涙を見せるユイ。

感情も持たぬのに涙を流す。それに違和感を覚えたが、俺は口にし
ない。

SAOの正式サービスが始まったとき、上位プログラム『カーディナル』から下された命令は「人との一切の接触禁止」という、ユイちゃんのプログラムとは矛盾するも内容だった。ナーヴギアを通してプレイヤーの感情をモニタリングしていると、プレイヤーの全員が大小の差はありながらも『恐怖』や『絶望』などの負の感情を抱いており、自身がすべき使命が目の前にあるのに出来ないジレンマ。これが約2年も続き、ユイちゃんは初期の頃大きくエラーを蓄積したそうだ。

最初の頃は本当に絶望だった。自殺した者、それを見て恐怖を抱く者、中には精神的に狂い始めた者——それはカウンセリングプログラムであるユイちゃんには耐え難い苦痛だったのだろう。俺には想像もつかない。

しかし——ある日を境に彼等の負の感情は小さくなり始めた。

「それは違う意味での『狂気』でした。プレイヤーの持つ負の感情が限りなく少なく、けれども他者への精神汚染能力が極めて高い5人のプレイヤーが現れたんです」

「俺達やん」

「そこから、他のプレイヤーの負の感情が少なくなりました。『喜び』『安らぎ』……そのような希望を持つ人たちが増えたことにより、私のエラーが蓄積する量は減るように思われました」

だが、そのキチガイじみた行動をするプレイヤーのメンタルをモニタリングしたのが間違いだった。彼等の起こす行動そのものが不可解で測定不能であり、それを可能にする要因すら分からず、彼等の精神汚染とも呼べるキチガイ思考は上位のプログラム『カーディナル』にまで影響を与えたようだ。

上位のプログラムへの影響はカウンセリングプログラムへのエラーを蓄積させた。

そのせいなのか。ユイちゃんはAIでありながらも、「彼等に会ってみたい」と思い始めたらしい。

「……ん？ ちょっと待って。もしかして『イキリト』のスキルや『投擲』がプレイヤーを投げられるようになったのって……」

「恐らく『カーディナル』がエラーを起こしているのが原因かと」
「やっぱ俺達のせいやん」

プログラムがエラー起こすレベルで言動がぶっ飛んでる俺達がキチガイ極めてんのか、それとも耐えることのできなかつた『カーディナル』が懦弱なのか。できれば後者であると信じたい。

俺は少なくとも他四人よりはマトモやぞ。

なんてアホみたいなこと考えていると、ユイちゃんが突然光り始める。下半身サイヤ人で光り始めるって、もはや次のサイヤ人モードに移行するかのようだ。

しかし、現実是非情だ。

「私がボスモンスターへとトドメを刺したせいで、プログラムが私を調べ、それが異物であると判断したようです。本来プレイヤーに不干

渉であるはずだったので、当然だと思えます」

「どうしてトドメ刺したりなんかしたんだ？」

「……私も皆さんと同じようにSAOというゲームを、一度でもいいから楽しんでみたかったんです。どのような絶望的な状況であろうと、笑いながら真剣に『生きる』ことを諦めない皆さんと一緒に……。……おかしいですよ、プログラムの私がおんなことを想うなんて」

キリトの問いに、ユイちゃんは泣き笑いながら答える。

笑っているはずなのに、悲痛な表情に、アスナさんは「そんなことないわ！ 貴方は私達の子供よ！」みたいなこと言つてユイちゃんに抱きつき、それを見てキリトが複雑そうだが言い出せない状況に目を逸らし、この現場をポップコーン食いながら仏頂面で眺めるクロ。

これは流石にどうしようもないだろう。

俺も何とかしてやりたい衝動に駆られるが、プログラムが関係してくるとなると、俺等にはどうしようも――

「――ハムタロ」

「んだよハツタ」

「私はロリコンです」

んなこと誰だつて知ってるわ。という言葉を出せない程の威圧感を出すハツタは、ゆっくりと黒い石みたいなオブジェへと歩を進める。

そこに迷いはなく、自分の行動に全面的な自信があるように思えた。

「たとえば作られたモノであろうとも、それがAIによる作られたプログラムであろうとも――幼女の流す涙を私は許容することはできません。これでも『幼女は皆等しく無邪気に笑う姿こそが美しく清らか』というのが私の持論でしてね」

ハツタが黒い物体に手をかざすと、青白い光を走らせながらキーボード風のコマンドが浮かび上がり――ちよつと待てや変態紳士。それ何なん？ お前知ってるん？

『楽しんでみたかったんです』……ええ、結構。その願いを叶えて差

し上げましょう」

「で、でも！ プログラムに消される私は——っ！」

「それが何か？ たかだか『カーディナル』システム程度の分際が、幼女を真に愛する私に敵うとでも？ プログラムで作られても貴方は子供なのです。そのようなことは気にせず、人生の先達者に全てを委ねて笑っていれば、それでいいんですよ」

高速でキーボードを叩くハツタに、キリトは化物でも見るような目で慄く。

俺には何やってんのかさっぱりだが、確かプログラム技術に詳しくあったキリトにはハツタの凄まじさが分かるのだろうか？

「は、ハツター！ 何とかできるのか!？」

「できるかじゃなくて、やるんです」

自信満々に浮かび上がる画面を相手に、ハツタは無意識に微笑んでいた。

「ふふ、幼女をカウンセリングプログラムに指定した茅場晶彦には好感を持てますが、それが今回仇になったようですね。貴女のプログラムは素晴らしかった！ 『カーディナル』も『カウンセリングプログラム』も！ だが、しかし、まるで全然！ この私を相手するには程遠いんですよ！」

歴戦の武士共

第22層の大きな湖。

そこでは《天壤無窮》非公式釣り大会が密かに行われていた。

開催主はロリコン紳士ことマッドハッターで、その上には本来なら消えるはずの運命だったユイが楽しそうに肩車されていた。最初はアイツに任せるのはどうかと思っただけど、『幼女が悲しむようなことは絶対にしない』の信念を持つロリコン相手には杞憂だったようだ。釣り大会とは言っても、SAO内に囚われたプレイヤー達が自由に釣るだけである。一見何が楽しいかは分からないが、いつもなら『始まりの町』から出ることのない非戦闘員のプレイヤーには大好評だった。

釣りスキルを取ったばかりの老若男女が楽しそうに釣りをし、中には某神話生物が魚を熊のように素手で掴み、取れた魚は《天壤無窮》のギルドマスターが調理をする。ニートやケムツソは配膳へと回っている。

そんな俺は少し離れた場所で座りながら会場の様子を一人で眺めている。

モンスターがこの会場に迷い込んできたときの護衛のようなものだが、それ以外にも俺が一人で黄昏ている理由があった。

「二「廬山昇龍覇あああああ!!」二」

どっかの馬鹿三人が馬鹿なことしてるけど。

金髪の少女と栗色の髪の少女、黒髪の幼女が湖に水の柱を生んでいたが、アイツ等は将来聖闘士セイントでも目指しているのだろうか？

「——はは、元気な娘さん達ですな」

釣り大会が水遊びに変化しようとしている様を何の感情もなく眺め居ていると、いきなり後ろから声をかけられて振り返る。俺の《索敵》スキルに引つかからなかったので内心警戒したが、そこには50歳は迎えているだろうと思われる初老の男性が微笑みながら立って

いた。

厚着の装備に釣竿をもっている姿を見るに、釣りをしに来た大会参加者かと思うかもしれないが、何か——そう、何か圧倒的な違和感を覚えるのだ。俺は何か強大な化物を相手にしているような。

喉に小骨が引つかかったような違和感を抱えながらも、俺は挨拶を試みる。どの階層で言われたか覚えてないが、どうやら俺は無意識のうちを目上に対する態度がなっていないとハツタに指摘されたことがある。

今ではニートのスパルタマナー講座で何とかなつたけど。

「えっと、はい……ウチの連れが騒がしくてすみません」

「いえいえ、元気なのは良いことです。特に今のようなデスゲーム下であのように笑えるのは、大切なことだと思えますよ」

元気過ぎるのも如何なものかと。

と思ったところで、初老の男性は気づいたように名乗る。

「申し遅れましたな。私のプレイヤーネームは『ニシダ』と申します」

「俺はキリトって言います」

「キリト……ああ、あの《黒の剣士》と名高き攻略組のキリト君ですか。

そのような有名人に会えて私も運がいい」

「あはは……その名前は久しぶりですね」

いつもは『イキリト』だとか『自分を主人公だと思い込んでいる精神異常キリト』だとか『変態ドロツパー』などとロクな呼ばれ方がない。だから黒の剣士と言われて、「え、誰のこと言ってるの？」と本気で考えようとしたレベルである。

そんな内心の俺を他所に、ニシダさんは「しかし——」と微笑みを崩さずに話題を変える。

「浮かない顔をしていた模様。何やら悩み事でもおありなのでしょうか？ 良ければ人生の先達者として聞いてみたい」

「え、いや、それほど悩みでも……」

などと口に出してはみたものの、本当に喋ってしまった方がいいと自分の中の何かが囁いてくる。今日会ったばかりのニシダさんに言うべき内容でもないだろうに、彼には不思議と悩みを打ち明けてし

まった。

「腐れ縁の連中を見ていると、何とというか、自分が物凄くちっぽけな奴だって考えてしまうんです」

俺は座りながら横に立っているニシダさんにぽつぽつと話し始める。

この劣等感にも似た考えが顕著になったのはユイが消えそうになった時のハツタの行動。自分には少なくともネットの知識はあったと豪語してただけに、複雑かつ理解不能な『カーディナル』を簡単に操作し、ユイをシステムから切り離して確立させたハツタに啞然となったのだ。

いや、今までもそうだった。

周囲の状況を誰よりも把握して幾多のボス戦で不敗を貫いているハムタロ、鋭い洞察力で時には核心を突くニート、不器用ながらも他者を誰よりも想いやっているケムツソ、自分の信念を守り抜く技術と知識を豊富に持つハツタ、無意識に不可能を可能にするクロ。

確かに攻略組では俺も抜きん出た存在だと思われているのだろう。けれども、どう逆立ちしても同世代のアイツ等よりも劣ってしまうと嫌にも自覚してしまうのだ。

一層の時に『自分がスケープゴートになればいい』と考えた事件。今思うと俺がSAOで初めて犯した失敗であり、今も失敗続きで今に至っている。

アイツ等なら——もつと上手くやれたんじゃないだろうか？

「——それは、違うんじゃないですか？」

「え？」

長い話に耳を傾けていたニシダさん。

表情は笑顔のままなのだが、そこには有無を言わさぬ迫力のようなものがあつた。

「この世界、下手をすれば簡単に死ぬことが出来ます。現実では得難い経験となる……と宣うには不謹慎と指を差されかねませんが、それ

でも貴方は生きています。生き抜いている。それだけでも立派だと私は考えますがね」

失敗したから何というのだ。大いに失敗すればいい。いつか失敗したでは取り返しがつかぬ問題に直撃した時の為に、その失敗を経験に活かせるような人生を歩むことが重要なのではないのか？

ニシダさんの言葉には俺やキチガイ共には出せない風格を感じる。「現実世界での経歴は語ることが出来ませんが、人生そのものが失敗続きです。あの時に死んでいれば……なんてデスゲームを体験しなくても思ったことがあります。今はそう思いませんがね。私は還暦を迎えましたが、六十歳近くまで失敗を恐れる生き方をしてきました。最近では、そうではない生き方もあることが、ようやく判って来たんですよ」

そう言つて微笑みを俺に向ける。

最初から彼の表情は変わってないが、それは俺の悩みを溶かしているくような優しい笑みだった。

「貴方の悩みを『たかが』と切り捨てる必要性はありません。それは貴方が感じた失敗の形なのですから。その感情が、貴方の今後の成長を促す糧になってくれると期待していますよ」



「ふむ、やはり失敗続きですな。結局は老害の説教じみた話になってしまう。私の意図が少しでも少年に伝わってくれたでしょうか？」

「おう、ここにいやがったのか。そろそろ時間だ——何ニヤニヤしてやがんだ？」

「少し若い頃の自分と似たような少年を見かけたものでしてね。かつての私が周囲の人間からこう見られているのかと考えたら……と」

「無鉄砲で考えなしでカツコつけてか？」

「……貴方とは決着をつける必要がありそうですね」

「お前さんみたいな化物とカチ合う予定はないんでね。俺のリアルの入れ歯が取れちまう」

「大気圏へと飛んでくれれば御の字ですな」

「つと、くつちやべつてゐる時間はねえ。あの嬢ちゃん待たせるには可哀そうだろ」

「一理あります」

「それにしても不思議な場所ですね、ホロウ・エリアとは。まあ、階層攻略は若い者が頑張っているのです。彼らの手の届かぬ範囲をサポートするのも年長者の務めですね」

「おいおい、変なこと言つてねえで早く行くぞ田ノ浦。ファイリアちゃんが見てるぜ」

「ここではニシダと呼びなさい」

決戦前夜は万全に

とある雑貨屋にて。

「——おう、注文の品はコレだろうか？」

「ありがとありがと。いやー、これで目的のブツは全部揃ったわ。あとはクソニートとロリコンの方が順調なら、文字通り『準備万端』つてワケだな」

スキンヘッドの店主とのトレードで渡された物を確認した黒髪の少年は嬉しそうに頷く。

その様子を見守るのは金髪の少女と猫髭の少女。

「随分と用心してるんだナ。やっぱり先遣隊を送れないからカ？」

「あつたりまえよ。死地だと分かかって自ら進んでいく馬鹿なんざ居るわけないだろうが。それを抜きにしても、わざわざ少ない精銳を減らしたら元も子もない」

「正論過ぎて反論すら思いつかねえな」

黒髪の少年の言葉に同調するスキンヘッドの店主。

猫髭の少女は苦笑した。

「とうとう七十五層、カ。あと四分の一なんだナ」

「ん」

「確か二年前だっけ？ SAO始まったの。はあ……二年間もこんなくっだらなボス戦を繰り返してるんだと思うと頭痛くなるぜ」

金髪の少女は一言頷き、黒髪の少年は頭を抱える。

「……二年もインクラッド居んのか。アイツは元氣してるかねえ」

「エギルの奥さんか？ 浮気してなきやいいな」

「ちよつと表出るや」

ガチトーンでキレルスキンヘッドの店主に、黒髪の少年は謝りながら笑う。

「そう怒るなって。少なくとも来年には再会できるんだからさ」

「……本当に出来るのか？」

「できなきや俺が困る」

黒髪の少年は肩をすくめながら言う。

「やれるだけのことは毎回やってる。でなきゃボス戦には絶対挑まねえよ。俺は勝てない戦いは絶対にしない主義なんでね。つまり勝てる見込みがあるからボスにカチコミするってことさ」



とある広場にて。

「……ケムツソ君、確か明日って七十五層のボス討伐戦だよな？」

「んア？ ああ、まあ、そうだが」

「七十四層では結晶アイテムが使えないんだったよね？ 本当に大丈夫なの？」

栗色の髪の少女が心配そうに灰色の髪の少年を見る。

それに鼻で笑いながら灰色の髪の少年は水分補給をした。

「その心配を前回はかア？ しなかっただろうが。つまりいつものようにボスの野郎をぶっ潰して帰ってくるだけだ。何の問題もねエ」
「……さすが攻略組のトッププレイヤーですね。羨ましい限りです」
「おうおう、羨ましがつとけ。こんな七十四回も同じようなこと繰り返してる作業が羨望の対象になるのか分かんねエけどなア」

銅色の髪の少年の皮肉にも、灰色の髪の少年は嘲笑うように返すだけだった。

その様子を見て栗色の髪の少女は安堵するように微笑む。

「それを聞いて安心したかな？ 私もノーチラスも、まだケムツソ君に恩返しできてないからね。ボスなんか倒されたらダメだよ？」

「恩返し云々気にすんなら、今のダンスの振り付けを完璧にしとけよ？」

「ええ、分かってますよ。他者を魅せる仕事なのでですから、やるからには全力です」

自虐的な印象が強かった銅色の髪の少年の前向きな発言に、少し眉を上げて感心したように息を漏らす灰色の髪の少年。

そして普段とは違う微笑みを浮かべるのだった。

「絶対に負けねえ保証はねエが、絶対に負ける保証もねエ。七十五層

でドロップアウトすんなら、オレの人生もその程度ってわけだ。ま、その程度の人生って言うには濃すぎるんだがな」



とあるポーション屋にて。

「いやー、サチちゃんありがとー。これで七十五層は超えられそうだよ」

「それは良かったです。この前調査を少し変えたおかげで、回復量は若干下がりましたが、持続回復効果リジエネが追加されたんですよ」

「それは回復量減少が気にならないくらい？」

「はい、クラインさん達に試してもらったんですが、気にならないどころか使いやすいって感想を頂きました」

「そっかそっか。じゃあ後で素材と泥する場所教えてよ。クエ発注して素材斡旋するからさー」

カウンター越しに黒髪の少女と白髪の少年は楽しく会話していた。

ポーションの効果量を詳しく聞いた白髪の少年はウィンドウを閉じる。

「それにしても……もう七十五層、なんですね」

「七十四回もボス戦やってるんだね。暇だなあ、僕達」

「ふふっ、名前とは違って働き者ですよね？」

「ニートの恥さらしってコトかな？」

声を出して笑い合った少年少女。

ふと黒髪の少女は遠い目をする。

「……まさか二年間もアインクラッドで生きられるとは思っても見ませんでした。これも攻略組の皆さんの御蔭です」

「大半はケムツソとクロの御蔭だと思うけどなー。最初のケイタ君みたいに突っ走ってたら、今頃ギルド壊滅してたかもしれないね。ダンジョンとかで」

「あはは……その節はお世話になりました……」

「所詮はIFの話だけだよ」

「白髪の少年は肩をすくめる。」

「こんな話してられるのも来年までだけどね」

「え？ ど、どうしてですか？」

「だって来年中にはクリアする予定だし。サチちゃんも早く両親に会いたいでしょ？」

「そう、です。はい、会いたいです」

「なら頑張ろう。死なない程度に」

自分の得物の柄を軽くたたきながら、白髪の少年は微笑む。

「僕達は大げさに言えばアインクラッド内の全プレイヤーの希望だからね。背負うにはちと重すぎる気もするけど、あと一年間を馬鹿みたいに過ぐすって考えれば、案外すぐ脱出できるんじゃないかな？」



とあるカフェにて。

「えつと……私の為に時間を割いていただいてありがとうございます」

「いえいえ、シリカさんの為ならボス戦の最中でも扉蹴破って向かいますよ」

「あ、あはは……」

割と洒落にならない冗談を真面目に答える黒髪の青年に、栗色の髪の少女は困り顔で笑う。

「して、用件とは？」

「そこまで重要なことじゃないんですが、これをどうぞ……」

「これは……押し花の葉ですか？」

「はい、ピナと一緒に頑張って探して作ったんです。いつも助けて頂いている日頃の御礼です！」

自己主張するかのように、少女の肩に乗っていた小さいドラゴンは鳴く。

「例の四十七層の丘の花ですね。『プネウマの花』でしょうか？ 実物を見るのは初めてですが、これはまた本当に綺麗です」

「葉なんてSAO内で使い道はないと思ったんですが、他に持ち運べ
そうな加工できる物が思い浮かばなくて」

「そんなことはありません。本当にうれしいですよ。今なら単騎特攻
でボスに挑めそうなくらいには」

紳士の笑みを浮かべる黒髪の青年。

その様子には栗色の髪の少女は引きつった笑みを誤魔化する。

「次のボス戦は大変かもしれませんが、絶対に死なないでくださいね
？」

「もちろんですとも。絶対に帰って来ますよ」

青年は色鮮やかな輝きを未だに保つ押し花の葉を愛おしそうに眺
める。

「これを持ったまま死亡すれば葉もロスト、でしょうか。いやはや、絶
対に死ねない理由が出来てしまいましたな。元より、幼女関係でやり
残したことが多すぎるので死ぬつもりは毛頭ありませんが」

「……あんまり疑いたくはないけど、他に候補がいるわけでもない。まず間違いなくアイツなんだろう」

「ユニークスキル持ちが消えるのは痛いけど、アイツが抜けたところで戦力的に攻略組が崩壊するわけでもない、か。もしかしてハムタロの野郎これを予測して動いてきたわけじゃないだろうか？」

「チャンスは一度つきり。……絶対に失敗できない」

「……でも、どうして」

「どうしてアイツはデスゲームなんか始めたんだ……？」

「アインクラッドも七十五層目か」

「私の《神聖剣》の御蔭……とは口が裂けても言えないな。私一人ではクリアできるはずもない」

「ああ、百層が本当に楽しみだ」

「ところで茅場晶彦はなぜデスゲームを作ったのだろうか？」

第七十五層ボス討伐戦

西暦2024年11月7日。

俺はこの日を生涯忘れることはないだろう。

「今回は最後まで思われるクォーターポイントでのボス戦となる。正確な情報が欠けてる今回の戦闘だけど……まあ、いつも通りゲームを楽しもう」

いつものように行われる俺の短い挨拶。

武器を掲げて士気を上げるギルドマスター達。

お祭り騒ぎの攻略組。

何が起こつても不思議じゃなかったアインクラッドの世界。

最低なこともたくさんあつたが、最高なことも少なからずあつた。『汝の敵を愛せよ』って言葉、そんなこと言ってる人から死んでくような残酷な世界。

ある意味妄想だつた俺たちの世界も、何の前触れもなく終わつていくことを、当時の俺は知る由もなかった。



大きなボスの間になだれ込む攻略組の面々。統率された軍人を彷彿とさせる動きで、各パーティは互いが互いの死角を補うかのように円陣に散らばる。ただだけふざけた問題行動が露呈するキチガイ共ですら、未だに姿を見せない七十五層のボスの姿を探す。

名前までは知ることが出来なかったが、情報によれば骸骨の姿をした大型モンスターだということ。攻防HPが高く、生半可な装備だと一撃死も考えられる凶悪なボスだと七十五層のキークエストで判明した。

透過するモンスターなのか？

集めた情報にないモンスターの新たな一面を考えていると、神話生物一步手前の五感を持つアスナさんが上を差しながら大声で叫ぶ。

「みんな！ 上よ！」

「キシヤアアアアアアアア——」

「エギル砲発射あつっ!!」

ドーム型の天井に張り付く、全長は十メートル以上じゃないかと思われる巨大な骸骨のムカデ型のモンスターを目視すると同時に、カンスト間近の《砲撃》スキルによる銃弾に匹敵する速度でエギルさんが発射された。俺が認識した瞬間にケムツツが投げたため、アイツは伝達神経が脊髄までしか通ってないのだろう。脳まで届いて。

その行動が幸運かどうか後世で意見が分かれるだろうけど、威嚇してきた骸骨型の巨大ボス——『ザ・スカル・リーパー』The Skull Reaperに黒い弾丸が殺到する。

最近では投げられながらソードスキルをぶち込むことによつて威力が上昇することを知つた攻略組の砲弾班は、投げられると反射的に各々の得意なソードスキルを敵に御見舞いすることがトレンドとなっている。エギルも例外ではなく、縦回転しながら光の軌跡を描く斧を振り回してスカル・リーパーに大打撃を与え、落下しながら天井から落ちて苦しむボスに追撃をかける。

斧を叩きつけるソードスキル——いわゆる『兜割り』つてやつだな。

「オラアツ!!」

「ナイスぼったくり店主! 皆も続けっ!」

ボスモンスターをリンチする攻略組の姿は、スーパーのタイムサービス商品に群がる奥様方の如く。それぞれがムカデの足みたいな部位を集中的に刈っているため、スカル・リーパーは攻撃に移ることが出来ない。

もちろん敵のメインウェポンたる二本大鎌を振り回そうと試みるのだが、そのようなことは俺が許さない。

「第二弾準備急げ!」

「準備出来てらア!」

「おっしやあ、アルゴ砲発射用意!」

「撃てエ!」

普通にソードスキルを放つよりも、砲撃の弾となつて特攻する方がダメージが出るようになってしまった情報屋のアルゴさんは、いつも

のように一つの弾丸となってボスの眼球部分へと放たれる。

ケツにソードスキルをぶち込んだ俺だからこそ言える体験談なのだが、人間にとつて致命的になりそうな部位に攻撃するとダメージが通りやすい。スライムとかは知らんが、大抵のモンスターには当てはまる。だからこそ鎧などの防具を身につけるモンスターがいるのだ。

眼球部分にクリティカルヒットさせたアルゴさんはボスの背骨部分に落ち、器用に背骨を伝ってコロコロ尾の部分まで転がる。そして「レアアイテムレアアイテムレアアイテムレアアイテム」とブツブツ呟きながらDPSを稼ぐキリトの顔面にダイブ。アルゴさんの慎ましい胸をラッキースケベで堪能したキリトが、アスナさんのスカイアツパーを食らいドーム型の天井に突き刺さる。

そんなピタゴラススイッチを面白半分で眺めてると、てくてくと俺の方にクロが歩いてきた。

「おい脳筋。お前タンクどうした」

「なんか上手くタゲ取れない。ケムツソにヘイト取られる」

「お前それ俺が初期に鍛えてた《アニールブレード》で殴って言ってるならブツ飛ばすぞ?」

「……あ。本当だ」

むしろ一層装備で時折スカル・リーパーのタゲ取れてたこと自体が驚きなんだが。タンクたるクロは殴ってダメージを一番稼いでヘイトを取るタイプ。つまり《アニールブレード》でボスのヘイトを稼いでいたということはそういうことである。

つか物持ち良過ぎないか? んな俺が昔あげたゴミまだ持ってたのかよ。

さっさと自分の通常武器に切り替えたクロがボスモンスターを殴りに行き、入れ替わりとしてポーションをがぶ飲みしながらケムツソが愚痴を零す。

「あー、クソめんどくせエ。どっかに熟女の人妻いねエかなア」

「スカル・リーパーって骨じゃん? ワンチャン熟女の人妻じゃね?」

「……オイ、腐れハムスター。オレはクロ程馬鹿じゃねエぞ?」

やっば騙されなかったか。

「つかテメエは殴らねエのかよ」

「ああ、瀕死になつたらラストアタック取ってキリト煽る」

「クソ野郎だな。ああ？ 休んでないでダメージ貢献してこいや」

「わーい」

「誰が装備^{マッ}ナシ^パで行けって言った」

「というか俺は武器持つて来てないんだが。」

防具以外の持ち物全てが回復アイテムで一杯となっており、武器を入れる余裕すらなかったのだ。俺が殴るより死にかけて仲間回復させて殴らせた方がダメージ出るんだもん。

死んでもOKなMMOでは絶対にしないが。

なんて他愛もない会話をしていると、スカル・リーパーがポリゴン片となつて消える。

怒涛のダメージによりHPバーが凄いい勢いで減つたせいで、予想よりも早くクォーターポイントのボスは討伐されたのだ。これで百層まで大型ボスが出ない筈である。恐らく、メイビー。

「つつかれたー。後四分の一だけケムツソさんや」

「まだ四分の一も残ってるぜハムタロサアン」

浮かび上がる『congratulations!!』の文字を前に笑いながら拳をぶつける俺と害虫。

ラストアタックを見事に獲得したことに胴上げされるクラインの兄貴。それを祝福するエギルさんとアルゴさん。クロと抱き合うアスナさん。葉を何故か掲げてるハツタにリアアットをするニート。

こうして七十六層の道は開かれる。

死人の出なかった、いつも通りのボス討伐戦。

俺は次の層でやることを頭の中で整理しながら歩く。

そう、歩くはずだった。

煌めくソードスキルの軌跡と、鈍い音がボスの間に鳴り響く。
それはSAOプレイヤーなら死ぬほど聞いてきた音であり、ボス戦
が終わった後に聞くような音ではなかった。そう、本来ならば。

「——この世界に来てから、ずっと疑問に思っていたことがあった」
黒の剣士は悲痛な面持ちで剣を握りしめる。

「アイツは今、どこで俺達を観察し世界を調整しているんだろうって
な」

その剣は紅い甲冑の男に刺さってた。

彼は心底驚いた表情で黒い剣士を見張る。

「……でも俺は単純な心理を忘れていたよ。ああ、どんな子供でも
知ってることさ」

HPは確かに減っていた。

イエローゾーンを突破し、レッドゾーンに入る直前、それは現れた。
『他人のやっているRPGを、傍らで眺めるほどつまらないことはない
』ってな」

浮かび上がるのは《Immortal Object》。

つまり『システムの不死』。

「なあ、そうだろうか？ 茅場晶彦」

「「「……は？」」」」

悲しそうな、泣きそうな、それでも恨めしそうに、黒の剣士——キ

リトは確信を持って尋ねる。

紅い甲冑の騎士——ヒースクリフに浮かんだ無慈悲な単語に文字に、俺達は疑問形を口から吐きだすのだった（含・ヒースクリフ）。

皆で一緒に 「「スターバースト・キリト！」」

良くも悪くも『キリト』というプレイヤーは俺の影響を受けていたのだろう。ユイちゃんの「人格汚染能力」という比喻表現は的を射ていたわけだ。

作戦指揮をする俺は悪く言えば悲観主義の臆病者だ。敵が俺達を全滅させる確率と、味方が多くの被害を出して負ける確率を限りなくゼロにしてボス戦に挑んでいた。どっかの用兵家の言う「戦いは始まる前の準備段階で勝敗が決定する」を律儀に守ったわけだ。

故に俺は情報を疑った。疑って疑って疑って、慎重に慎重を重ねてボス戦で余裕を持てるように準備をしっかりと行なった。その結果の一端が、攻略組の平均レベルが150の統計なのだろう。

そしてキリトは俺の影響を受け、疑ったのだ。

攻略組の安全に全力を尽くすために考えもしなかったが、悲観主義の感染したキリトは『茅場晶彦はどこで何をしているのか?』を本気で探したのだろう。

どれだけ苦労したのか。それはキリトが現在進行形で披露する推理が物語っている。情報屋のアルゴさんですら啞然としているのだから、コイツは誰の力も借りずに一人で結論に至ったのだろう。素直に称賛に値する。どうしてヒースクリフが驚いてるのかは知らんが。「——以上の理由から、俺はアンタが一番怪しいって推測したわけさ。まあ、結果は目に見えてるが」

「……よくもまあ、ヒースクリフが怪しいって分かったもんだ」

「アンタが前に酒に酔って『自分が世界を作った』とか言ってたのがきっかけだったかな」

「感動返せやイキリ泥ツパー」

完全にヒースクリフの凡ミスじゃねーか。

確かに「決闘の時に違和感を感じた」の件は素晴らしかったけども。

そして当のヒースクリフ氏はというと——

「……？」

啞然としていた。

彼は「コイツ何言ってるんだ？」みたいな顔をした後、眉間を指で揉みながら失った記憶を掘り起こすかのように思索し、腕を組んで顔を上げながら真剣に思いだそうと試み、顎に手を当てて唸りながら考え込み——ふとスッキリした表情でポンと手で叩いた。

そしてキリツと雰囲気を変え、尊大に宣う。

「確かに私は茅場晶彦だ。付け加えれば、最上階で君たちを待つはずだった、このゲームの最終ボスでもある」

「さしてはオメー自分の正体忘れてたな？」

キリトと言葉が被るなんて屈辱である。

訴訟したら勝てるかも。

俺とキリトのツツコミにヒースクリフは苦笑した。

マジで忘れてたのかよ茅場晶彦。

「いやはいや……まさか不死設定を二重にしていたことすら忘れてるとは。我ながら迂闊だったな」

「何か言ったか？」

「失礼、何でもない。——私は本来であれば90層で身を明かし、最上層のラスボスで『魔王ヒースクリフ』として迎え撃つ予定であったがね。よくぞ見破ってくれた、キリト君」

——このまま百層ボスモンスターまで一緒に倒していたかもしれないが。

俺はヒースクリフがそう付け足したように聞こえた。

鬩りのある微笑みで俺達を見渡したヒースクリフは、ウインドウを数枚出して何かを操作する。すると、俺を含む攻略組のほとんどが痙攣したように地面へ這い蹲る。

俺のHPバーの下に無期限の麻痺バフがあった。

「さて、キリト君に選択肢がある。私の正体を見破った報酬として、この場で1対1で戦う権利をプレゼントしよう。私に勝てばゲームはクリアされ全プレイヤーがこの世界からログアウトできる」

恨めしそうに困惑しているキリトにヒースクリフは言葉を続ける。

「もちろん挑戦権だけでは報奨にはならない。ここで負けても君の安全は保証しよう。要するに、今ここで君が私を倒してクリアするか、百層で私を倒すかの誤差だ。無論、君に強要はしないがね」

「……つまりデュエルで負けても俺は死なないと？ それはあまりにも——」

「虫が良過ぎる、と言いたいのかね？ 確かに私にしかデメリットのない提案であることは否定しない。ゲームのルールとしてフェアじゃないのは私自身が一番理解しているさ」

だが、とヒースクリフは剣を抜いてキリトに向ける。

そこにはゲームマスターとしての彼ではなく、研究者としての彼でもなく、一人の剣士としての誇り^{プライド}を背負った男の顔だった。

「この前の決闘は君は本調子ではなかっただろう？ このゲーム自体が私の我儘かもしれないが、この決闘は完全に自分の決めたルールにも反している。それでも——ゲームマスターとしても魔王としてもない、《お祭り男》ヒースクリフとして君と競いたくなかったのさ」

ヒースクリフの宣言に、キリトは不敵に笑った。

「……ああ、それを言われちゃ応じざるを得ないな！」

二本の剣を構えて対峙する。

その言葉を待っていたと言わんばかりの表情を浮かべたヒースクリフは、後ろにいた人物に「それではよろしく頼むよ」と言葉を投げかける。

「おっしやー、最終決戦いっちょやってみよー」

「……は？」

「真のイキリト使いは私」

「は？」

自然と呼吸するように麻痺バフをつけられなかったニートがヒースクリフの足を掴んで武器のように振り回し、同じくクロも対抗するように阿保みたいに口開けてるキリトを武器とする。

いつの間にか武器を構える二人の間にハツタが立ち、両方のコンデイションを確認する。立会人だな、何の違和感もない。アインクラッドらしい決着のつけ方じゃないか。

「双方、準備はよろしいですか？」

「ああ、何時でも構わないよ」

「……ああ、これで決着をつけてやる」

ヒースクリフを構えるハツタと、キリトを構えるクロ。

ハツタは神妙に頷いた後、右手を大きく上げる。

「いざ尋常に——始めえっ！」

「うおおおおおおおおお!!」

瞬時に懐へと入った双方は、渾身の力を込めて互いの武器を叩きつける。ニートはアインクラッド世界で培った《抜刀術》のスキルを元に、クロはイキリトと共に幾多のボスを薙ぎ払った我流の剣技を元に。

どちらが武器として優れているのかを競っているのだろう。

先にHPという名の耐久値が消えたほうが負けである。

人間を打ち合つてるとは思えない音がドーム型の部屋に響く。

一合、十合、百合、それでも互いの耐久値はゼロにならない。

「ニート君、もうちよつと斬撃の角度を上修正してほしい。《神聖剣》の攻撃スキルが撃ちにくい。加えて遠慮なく攻撃したまえ。神聖剣の耐久は伊達ではない」

「角度四度修正ね。了解した」

ヒースクリフの紅い斬撃が踊り狂う。

剣舞のような美しさを内包しながら、ニートの鋭い抜刀技がキリトを襲う。

「クロ！ 攻撃速度が遅い！ 《イキリト》スキルを合わせるぞ！」

「りよーかい」

キリトの蒼い斬撃が踊り舞う。

信頼関係とも呼べる息の合うスキル回しで、クロの実用性だけに特化した剣戟がヒースクリフを捉える。

麻痺しながらでも観戦くらいはできる。

徐々に終盤になるにつれて、攻略組の面々から声援が迸る。

「キリト君！ 頑張つて！」

「キー坊！ ここが正念場だゾ！」

「ここで負けたら承知しねえぞ！ キリの字！」

「魚雷だけが取り柄じゃないって証明してください！ 団長！」

「血盟騎士団団長の名は伊達じゃねえ！」

「《お祭り男》の名が泣きますよ！」

そこに『デスゲームの真犯人』だとか『イキリ散らすガキ』などという、まどろっこしい感情を持つ者は攻略組には一人として存在しなかった。これがゲームクリアを賭けた戦いだということも忘れてしまっていた。

拮抗する両者の剣戟に、誰しもが各陣営の応援をする。

そう——ここに憎むべきラスボスなど存在しない。

確かに《神聖剣》スキルは頑丈だ。それは間違いない。

けれども《イキリト》スキルで倍率がかけられたクロ&キリト組に

は遠く及ばないはずなのだ。そんな当たり前の結果を知っていたとしても、ヒースクリフはアインクラッドの流儀で決闘を持ちかけたのだろう。ヒースクリフの指示のように戦ってしまえば、どちらが先に潰れるのかをニートも知ってるはず。

だから——これはヒースクリフ最後の戦いなのだ。

徐々に差の開くHP。

誤差でもゼロになれば負けだ。

しかし、HPがドットでしか残ってないヒースクリフは剣と盾を構える。

「さあ、ファイナーレだ！ ニート君！」

「……そうだね。この一撃を以て決別の儀としようか」

「最後決めるぞクロオ！」

「ばっちこーい」

互いに距離を取っていたニートとクロは地面を蹴りあげて突進する。

クロに持たれているキリトは青白く輝き出し、怒涛の16連撃を披露した。

「エクス、カヤバアアアアアアアアアアアアンっっ!!」

「《スターバースト……キリトおおおおおおお》っっっ!!」

交差する蒼と紅。

飛び散る火花。

湧き上がる外野。

そして——

そして——

そして——

『11月7日、14時55分、ゲームはクリアされました』
『11月7日、14時55分、ゲームはクリアされました』
『11月7日、14時55分、ゲームはクリアされ——』

「さらば友よ」

気づいた時に、俺は空にいた。

夕焼けに染まる大きな入道雲。叩きつけるように、それでいて優しい風。遠くに見えるのは……あれはアインクラッド城だろうか？もう半分近くが崩れ去り、今も尚崩れている。

地面に透明の床があるように、俺は空に立っていたのだ。

俺は胡坐を掻いて座りながらぼんやりと城が崩れる姿を眺める。

どのくらい時間が経過しただろうか。ふと、俺の鼓膜を男性の音が震わす。

「——ゲームクリア、おめでどう。ハムタロ君」

「どうもありがとう、茅場晶彦」

俺は隣に立つ男性を見ずに言葉を返す。

見なくても誰かは分かる。

「それはキリトに言うべき言葉じゃないんかね」

「さつき行ってきたよ。ちゃんと別れも済ました」

「……馬鹿だなあ、茅場。俺なんかが最後に会う人間でいいのか？」

「ああ、それこそ私が望んだことだ。君に一つ質問しなければならぬ
いと思ってるね」

顔も合わせずに質問を聞くのは野暮だろう。

俺は立ち上がって、茅場の顔と向かい合う。白衣姿の茅場晶彦は、ゲーム世界で親しんだヒースクリフの姿よりは細身の身体だが、どこか雰囲気似ていた。それも当然か。

「私はずっと思っていた。システムを君達が超越した……などという
事実はもうどうだっていい。それよりも——なぜ君達はデスゲーム
化させたソードアートオンラインを最後まで楽しむことができたん
だね？」

「そんなん決まってるだろう」

俺は目の前に立つ茅場を見据える。

ヒースクリフのような威圧を纏った力強さは微塵も感じられなかったが——なるほど、あの目は清々しいほどに前向きで一直線。途

中に曲がることのない芯の強さを感じた。

このような人物に俺達の仮想世界——アインクラッドが作られたのか。

同時に思わず笑みが零れる。

俺だって長年疑問に思っていた答えを得ることが出来たのだ。笑いたくもなる。

「この仮想世界が大っ好きだったからだよ、茅場。広大なフィールドマップ、二度と同じ景色のない空、本物のように生きているNPC……例を挙げるにはキリがないほど、あの世界は本物だった。偽物なんて何一つありやしない。アンタだって本気で作ったんだろう?」

「ああ、そうさ。私は自分が思い描く——夢に見た浮遊城を再現しただけだ」

「自分の夢を形にする、か。いいねえ、羨ましいくらいだ」

本気で羨ましいと思った。

自分の夢を形にするなんて何と素敵なことだろうか。確かに一人を巻き込んだのは大変よろしくないだろうが、キチガイな俺にはそれが美しく見えた。俺はやろうとは思わんが。

それが伝わったのだろう。茅場は目を見開いて驚く。

「ゲームで死んだら本当に死ぬような環境でも?」

「でも俺は死ななかつた。死んだらどう思うかは知らんが……少なくとも今の俺は満足してるぜ。いやー、思い出しただけでも楽しかったわー」

そうか、と茅場は呟くだけだった。

彼の目には俺がどう映ったのだろう。

少し気になったが聞く気にはなれなかつた。

「まあ、少し名残惜しい気もするが、くっそ楽しかったよ」

「……そこまで称賛してくれるとは思わなかつたな」

「何だよ、アンタは楽しくなかつたのか?」

「……いや、楽しかったさ。自分の世界で生きることよりも、君達と一緒にゲームをした思い出が。ああ、本当に楽しかった」

研究者とか技術者とか関係なく、無表情に見えた茅場の瞳は宝石よ

りも綺麗に輝いていた。まさかデスゲームで面白おかしく遊ぶなんてGMとして考えられなかったのだろうが、想像以上に楽しんでいたのだろう。

自分の立場を忘れるくらいに。

そんな茅場をよそに、俺は「それよりも……」と話を切りだす。

「もうゲームで生き残ってた面子は現実世界に帰ったんだろう？ そろそろ俺を返しちゃくれないか？ 待たせてる奴もいるんでな。下手に遅寝していると神話生物に捕食されちまう」

「……そうだな、それはすまなかった。現実世界に帰るといい」

白衣のポケットに手をつ突っ込んだままの茅場が背を向けようとしたところで——俺は言い忘れてたことがあったことを思い出して、彼の背中に声をかけた。

彼は不思議そうにこちらを向く。

「どうしたんだね？」

「いや、言い忘れてたんだけどさ——」

俺は言葉を紡ぐ。

心の底から。

本心を。

「ありがとよ、茅場。また馬鹿みたいに遊ぼうぜ」

その言葉にポカーンと口を開いて固まった茅場は、意識を取り戻して苦笑いを浮かべる。

まるで聞き分けのない子供を見る親のように。

「……言い忘れていたかな？ このソードアートオンラインはHPがゼロになったプレイヤーは例外なく死亡する。つまり私はもう——」
「おいおい、野暮なことは言うなよ。ここは『OK、またな！』って言うところだぜ？」

茅場の言い訳を俺はバツサリ切って、さつきと同じ言葉をかける。
SAOを作った天才なのに言葉の真意すら見抜けないのかよ。
困った天才だ。

「ありがとよ、茅場。また馬鹿みたいに遊ぼうぜ」
「……………」

俺は笑顔で同じ言葉を天才に言う。

茅場は意味を理解したのか、仮想世界なのに彼の両目から涙の粒がツーツと流れる。今まで変化がなかった茅場晶彦に、初めて懐古以外の感情が浮かんだのだ。

その涙に驚く茅場であったが、その涙を拭うことなく小さく笑った。

「……そうだね、また私のゲームを楽しんでほしい」

「馬鹿みたいに遊んでやるから覚悟しとけよ？」

そうして俺の視界は真っ白に染まる。

真っ白に染まってしまったが——

——あの時浮かべた茅場の笑顔を、俺は一生涯忘れることはないだろう。



「……お別れだな（歓喜）」

「ううん、お別れじゃないよ。ねえ、最後に名前を教えて？ キリト君

の本当の名前」

「排泄物五郎三郎」

「桐ヶ谷……和人君。年下だったのかあ。私はね、結城明日奈、十七歳です」

「待つて待つて待つて、どうして俺の本名知ってるんだよ。というか俺は君の名前聞いてないんだけどお!？」

「いいよ……いいんだよ。私、幸せだった」

「俺はしわよせだったわ」

「和人君と会えて一緒に暮らせて、今まで生きてきて、一番幸せだったよ」

「俺の視点では、どんな単語にも（物理）がついてるんだが……」

「ありがとうございます」

「なんちゆうタイミングで告白してるん!? え、ちよつと待つて!? 俺どうなるん!? 俺死ぬん!? ちよ、抱きしめないでマジで痛い痛い折れる折れる、いや、本当に背骨折れるから! 茅場あ!? 助けてええええええええええええええええ!!」

愛して——

愛しています。

「不吉な言葉残すの止めてええええええええ!!」

なんでコイツ等楽しんでんの？

御徒町の喫茶店『ダイシー・カフェ』。

いつもならそんなに人の居ない時間帯なのだが、今日は珍しくほぼ満員となっていた。そもそも扉に『貸し切り』の看板が立て掛けられているため、部外者が入ってくることはないのだが。

各テーブルでワイワイ騒いでいる者達を横目に、学生服の少女——朝田詩乃はカウンター席でオレンジジュースを嗜んでいた。

そこに近づくのは、店の出入り口近くのテーブルで関節技を決められている少年の妹——桐ヶ谷直葉。

「隣いいですか？　ちよつと肩身が狭くって……」

「同感。こつち座る？」

「ありがとうございます、シノンさん」

「ちよ、プレイヤーネームは止めて……！」

ゲームでの名前を出されて赤面する彼女だが、「それもそうなんです……」と直葉は頬を掻く。

「でもみんなが互いにプレイヤーネームで呼び合っているのに、本名出すと不自然じゃないですか？」

「それは……そうだけど……」

「——ははっ、確かにお前さん達には肩身が狭いな」

カウンター越しコップを磨きながら話しかけてくるスキンヘッドの店主——アンドリユー・ギルバート・ミルズは、同情するように苦笑いしながら、直葉に詩乃が飲んでいる物と同じものを出す。

素直に御礼を言う英雄の妹は、詩乃の隣の席に腰をかける。

「お兄ちゃんから誘われたから来てみたはいいけど……やっぱ場違い感が凄いなあ」

「リーファはキリトの妹だからまだマシよ。私なんて完全に部外者じゃない。……だからってSAO生還者を羨ましいだなんて一ミリも思わないけど」

肩をすくめる二人に笑う店主。

「確かにデスゲームだって考えれば羨ましいだなんて口が裂けても言

えないな。俺としてはゲーム内で死ぬ以外の要因が理由でオススメしないが」

「……それって、アレ？」

苦虫を噛み潰した表情の詩乃に、スキンヘッドの店主は神妙に頷く。

よく見れば直葉も同じような表情を浮かべていた。

「よくよく考えてみれば、あの五人が二年間もログインしてたのに無事なサーバーってのも、ある意味奇跡ですよ。ALOなんて未だにサーバーが復旧してませんよ。やっぱユグドラシルをクロちゃんが片手で伐採したのが大きかったのかなあ」

「GGOもね。最終的に銃じゃなくてプレイヤーを投げ合ったとか笑い話にもならないわ。デスIIガンとか『自分から死に行くアホ』の意味かって疑っちゃったくらい。はあ……お陰様でみんなが集まれる場が限られてるから困るわ」

「クロ以外の四人も同じことを思ってるだろうよ。脳筋神話生物曰く『その程度で落ちる脆いサーバーが悪い』って話だけどな。というか馴染の中では九州最南端のアイツ等が一番困ってるんじゃないか？

やっぱ茅場は天才だったんだろうよ」

SAO事件が終息して一年しか経っていないにも関わらず、遠い昔を懐かしむような表情をした店主はカウンターの端に立てかけてある写真に目を移す。

写真にはSAO事件の諸悪の根源にしてVRMMOの第一人者である男性が写っていた。写真の前に冷めたコーヒーと、どっかのキチガイ共から送られてきた紫芋キャラメルが添えられている。

二人の少女は互いに顔を見合わせて店主に問う。

「どうして彼の写真があるの？」

「そりゃ今日はSAOをクリアした奴等の集まりだからな。この場には居ない立役者のアイツにもコーヒーの一杯くらいは供えたくなったのさ」

「でも茅場晶彦のせいでデスゲームに閉じ込められたんですよね。憎くないんですか？」

「そりや憎いに決まってる」

即答した店主に二人は哑然となった。

「でも……」と言葉を続けるスキンヘッドの店主。

「SAOを作った茅場晶彦は確かに憎い。俺は死ぬまで大っ嫌いだと思う。……だが、クリア間近まで背中預けてきた『ヒースクリフ』つてプレイヤーは嫌いじゃないんだ。恐らく今集まってる奴等の大半はそうなんじゃねえかな」

「……つまり茅場晶彦は嫌いだけど、同一人物のヒースクリフは嫌いじゃなかったと?」

「おかしな話だが、俺は体張ってまで一緒にSAOを楽しんだアイツを嫌いにはなれねえんだ。あのキチガイ共に関わり過ぎたせいかもしれないが」

確かにキリトやアスナもヒースクリフという人物の話をするときは、茅場晶彦の名と違って嫌悪感などの負の感情を見せない。たとえば事実上は同一人物であろうと、彼等にとつて『血盟騎士団団長ヒースクリフ』は『共にボスを倒した仲間』という認識なのだろう。どうも彼等自身も矛盾している感情を不思議に思っているため、そう納得している。詩乃は推測した。

直葉も大切な兄を二年間縛り続けたSAOと茅場晶彦に憎悪を向けたこともあったが、当の本人が気にしていないのだから何も言えない。最悪の犯罪者と世間一般で叩かれている一方、それとは真逆の感情を露わにする攻略組の面々に、彼を殺した少年の妹は複雑な心境であった。

どちらにせよ部外者の自分がとやかく言う必要もない。二人の共通した結論だ。

んなことはどうでもいいとして、と店主は扉の方に目を向ける。

あえて白目を剥いている元黒の剣士は気にしない。

「アイツ等遅え、どつか道に迷ってんじゃないだろうな」

「適当に寄り道でもしてるんじゃないかしら? 放っておきましょう」

「その割にはさつきからずっと扉の方と携帯の方を確認してますよね、シノンさん。ケムツソさんを待つているんですか」

「なあつ!? 変なこと言わないでよリーファ!」

詩乃が首筋まで赤くして全否定する。

あからさますぎる反応に二人が苦笑していると、外から騒がしい会話が貫通するが如く耳に入る。

『あー、もうクツソ! お前等のせいで一時間も遅れたじゃねえか! だから早めにホテル出ようって散々言ったのに、このアホ共ときたら……!』

『テメエだつてホテル出る二分前まで惰眠を貪つてただろうが! あアン!? とうるか首都高で延々と同じ道迷い続ける運転手が悪いんじゃないのかア?』

『僕は悪くないもんねー。長く寝てたいからって全員のタイマーを三時間ぐらいずらしたけど、僕は全然悪くないもんねー。無罪を主張する』

『いやいや、一本道の我等が高速道路と同じ感覚で喋られたら困ります。あんなの人間が通れるような道路じゃないですよ。一番悪いのはタイマー弄った自宅警備員です』

『ごっはんー、ごっはんー』

「……………」

互いに目を合わせた三人は、それぞれの反応を示すのだった。

「やつば迷つてたじゃねえか」

「あはは、ちよつとお兄ちゃん起こしてきます」

「何やってんのよアイツ等は……」

貸し切りだった喫茶店の扉が大きく開かれる。

そこに入ってきたのは――

SAO事件を知る者は多いだろうが、結末を知る者は少ない。
それも攻略組しか真相を語るものがないからだ。
後に出版される『SAO事件の真相』を記したドキュメンタリー。
最後の章はこう締めくくられていた。

「ラスボスであった茅場晶彦を、『黒の剣士』キリトと『お祭り男』ヒー
スクリフが打倒した」と。

F i n